遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 測定値(cm) 〔 〕復元値 ( )現存値			写真番号
第18号住居跡	坏	第66図13	BⅢ	ピット14	2/5	内→灰白色、褐灰色 外→灰白色、褐灰色	砂少量混入 だいぶ密	だいぶ硬	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	口径〔13.6〕 器高 5.4	底径〔 4.7〕 脚高	頸径 胴径	
	高台付坏	第66図14	BⅢ③	ピット11第1層	1/6	内→にぶい橙色 外→にぶい橙色	砂微量混入 かなり密	やや軟			〃	〃	〃	〃	ロクロナデ	〃	(6.1)		高台径 7.2	
	坏	第66図15	BⅡa	ピット14	1/2	内→浅黄橙色、にぶい褐色 外→浅黄橙色、にぶい褐色	砂多めに混入 密	かなり硬	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	〃	〃	〃	回転糸切り	〃	〔13.9〕 3.7	5.7		
	坏	第66図16	BⅡa	ピット11一括	1/5	内→橙色 外→橙色	砂少量混入 だいぶ密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.6〕 3.9	〔 5.6〕		
	坏	第66図17	BⅡa	カマド内	1/3	内→暗褐色、明褐灰色 外→灰白色、浅黄橙色	砂若干混入 かなり密	かなり硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔 5.5〕 4.3	〔 7.1〕		
	鉢	第67図1	BⅠ1b	床面	1/10	内→灰褐色、浅黄橙色 外→褐色、黒褐色	砂多めに混入 やや粗	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔22.2〕 (9.0)		〔20.5〕 21.1	図15版右28上
	甕	第67図2	BⅠ1(1)(i)	床面	1/10	内→灰白色、明褐色 外→灰白色、褐色	砂少量混入 やや粗	やや軟	〃	〃	ヘラケズリ	〃	ヘラケズリ	〃			〔23.2〕 〔12.0〕		〔20.2〕 〔21.4〕	図15版左28上
	甕	第67図3	BⅠ1	ピット17	1/7	内→明褐灰色や橙色 外→にぶい橙色	砂多めに混入 やや粗	やや硬					〃	〃	ヘラケズリ	ロクロナデ		9.8 (6.0)		
	甕	第67図4	BⅠ1	ピット15	1/10	内→灰白色、褐色 外→灰白色、褐灰色	砂多めに混入 やや粗	やや硬					〃	〃	〃	〃		11.6 (6.3)		
	甕	第67図5	BⅡ	東壁外焼土部	1/6	内→褐灰色 外→灰色	砂少量混入 かなり密	かなり硬			ヘラケズリ	ロクロナデ	〃	〃	〃	〃		〔10.8〕 〔12.9〕	〔19.8〕	
	鉢	第67図6	BⅠ3	ピット9	1/10	内→橙色 外→にぶい橙色、橙色 褐灰色	砂少量混入 だいぶ密	だいぶ硬	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	〃			〔14.0〕 (5.8)		12.9	図版15 28中
	甕	第67図7	BⅠ2(1)	ピット8一括	1/10	内→浅黄橙色 外→浅黄橙色	砂多めに混入 やや粗	普	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔14.7〕 (7.2)		〔13.3〕 〔14.0〕	図版15 28下
	甕	第67図8	BⅠ2	ピット5	1/6	内→にぶい橙色 外→赤橙色	砂少量混入 やや密	かなり硬			〃	〃	〃	〃	回転糸切り	ロクロナデ		7.5 (8.0)	〔12.2〕	図版15 28下
	甕	第67図9	BⅠ2	ピット12底部	1/10	内→浅黄橙色 外→浅黄橙色、褐灰色	砂少量混入 かなり密	かなり硬					〃	〃	〃	〃		6.8 (7.5)		
	甕	第67図10	BⅠ2	ピット9 第2層・第3層	1/10	内→明褐灰色 外→明褐色	砂少量混入 かなり密	かなり硬					ヘラケズリ	〃	ヘラケズリ	〃		〔 8.7〕 (5.9)		
	甕	第67図11	BⅡ	ピット6	1/10	内→褐灰色 外→明褐色	砂少量混入 かなり密	かなり硬	ロクロナデ	ロクロナデ							〔13.7〕 〔 2.0〕			

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 〔 〕復元値 ( ) 現存値 測定値(cm)			写真番号
第住18居号跡	甕	第67図12	BⅡ	埋土下部	1/10	内→褐灰色 外→灰褐色	砂少量混入 かなり密	かなり硬 かすかに	ロクロナデ	ロクロナデ							口径(17.5) 器高(2.4)	底径 脚高	頸径 胴径	
第19号住居跡	坏	第70図1	BⅠc−H5	ピット3	1/2	内→黒色、にぶい黄橙色 外→にぶい黄橙色 にぶい橙色	砂かすかに混入 わりと密	かすかに軟	〃	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	回転糸切り	ヘラミガキ	〔14.9〕 4.35	4.9		図版10 27
	坏	第70図2	BⅠc−H3	ピット3	3/8	内→黒色 外→にぶい黄橙色 にぶい橙色	砂若干混入 わりと密	やや軟	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ	〃	ヘラケズリ	〃	〔14.1〕 4.1	〔 6.7〕		図版12 27
	坏	第70図3	BⅠc−H3	ピット3	1/4	内→黒色 外→にぶい黄橙色、黒色	砂少々多め混入 わりと密	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔15.4〕 4.5	〔5.85〕		
	坏	第70図4	BⅠa	埋土下部	3/8	内→黒色 外→にぶい黄橙色、黒色	砂若干混入 わりと密	若干硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	回転糸切り	〃	〔15.0〕 5.2	〔 6.3〕		図版11 27
	甕	第70図5	BⅠ2 (1)	不明	1/10	内→灰オリーブ色 外→にぶい黄橙色	砂若干混入 やや粗	硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔14.0〕 〔6.05〕		〔12.7〕 〔13.1〕	図13 版左 27下
	甕	第70図6	BⅠc (1)	ピット第1層	1/10	内→灰黄褐色 外→灰褐色、浅黄橙色	砂若干混入 やや密	やや軟	〃	〃	〃	〃					〔18.8〕 (4.1)		〔17.0〕 〔17.2〕	図版13 27下
	鉢	第70図7	BⅠ1 b	ピット3	1/10	内→にぶい黄橙色、褐灰色 外→淡赤橙色、灰白色	砂若干多め混入 かすかに粗	やや軟	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ			〔15.6〕 〔10.1〕	〔14.5〕	〔14.5〕	図版13 27右
	壺	第70図8	BⅡ	床面	1/10	内→灰白色、灰色 外→灰白色	砂若干混入 だいぶ密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃					(6.4)		〔 6.6〕	
第20号住居跡	坏	第72図1	BⅠc−H	ピット2	1/3	内→黒色 外→明褐色	砂微量混入 密	やや軟	〃	〃	〃	〃	ヘラケズリ	ヘラミガキ			〔17.0〕 (6.5)			図版4 29
	甕	第72図2	BⅠ1 (1) (i)	カマド付近	1/2	内→灰白色、暗褐色 外→灰白色	砂多めに混入 だいぶ密	だいぶ硬	〃	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ	〃	ロクロナデ			〔25.2〕 〔26.0〕		〔22.8〕 〔24.3〕	図版9 29
	甕	第72図3	BⅠ1 (1) (i)	カマド埋土	1/10	内→にぶい褐色、浅黄橙色 外→灰白色	砂若干混入 やや密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃					〔26.6〕 (7.8)		〔22.7〕	図版8 29
	甕	第72図4	BⅠ1 (2) (i)	ピット2	1/10	内→にぶい褐色、褐色 外→にぶい褐色	砂少量混入 やや密	やや軟	〃	ロクロナデ	〃	刷毛目					〔23.3〕 (11.4)		〔21.2〕 〔23.4〕	図11 版右 29(1)
	高台付坏	第72図5	BⅠ2 ③−M (1)	カマド袖	3/5	内→黒色 外→黒色、黒褐色	砂少量混入 密	やや硬			ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	(5.9)	〔 7.0〕 1.4	高台径(7.8)	
	坏	第72図6	BⅠa	ピット3	2/5	内→黒色 外→灰褐色	砂微量混入 密	普	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	〃	回転糸切り	〃	〔14.3〕 4.6	5.7		図版5 29
	坏	第72図7	BⅠa	ピット2	1/2	内→黒色 外→褐色、黒色	砂少量混入 普	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔13.2〕 4.6	6.2		

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 測定値(cm) 〔 〕復元値 ( ) 現存値			写真番号
第20号住居跡	坏	第72図8	BⅠa	埋土中	1/2	内→黒色 外→にぶい赤褐色	砂微量混入 密	やや軟	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転糸切り	ヘラミガキ	口径〔4.3〕 器高 4.9	底径 7.0 脚高	頸径 脚径	
	坏	第72図9	BⅠa	カマド付近	4/5	内→黒色 外→にぶい褐色、明褐灰色	砂少量混入 普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.7〕 4.7	6.6		図版6 29
	高台付坏	第72図10 ①	BⅠ2	埋土中	1/3	内→黒色 外→にぶい橙色、黒色	砂少量混入 密	やや硬			〃	〃	〃	〃	菊花状ヘラ刻み	〃	(4.3)	(0.3)		
	坏	第72図11	BⅢ	ピット2	1/2	内→浅黄橙色、灰褐色 外→浅黄橙色	砂少量混入 密	だいぶ硬	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	〔13.6〕 3.9	5.6		
	坏	第72図12	BⅢ	カマド付近	4/5	内→浅黄橙色、褐灰色 外→明褐灰色、黒色	砂少量混入 やや密	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.0〕 4.3	5.5		図版7 29
	坏	第72図13	BⅢ	カマド脇一括	1/6	内→灰白色 外→浅黄橙色	砂少量混入 やや密	少々軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔14.1〕 (2.8)			
	坏	第72図14	BⅢ	ピット2	1/2	内→橙色 外→橙色	砂少量混入 普	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	回転糸切り	ロクロナデ	〔15.1〕 3.6	5.4		
	甕	第73図1	BⅠ1 (1)(ⅰⅰ)	カマド袖	1/10	内→にぶい橙色、橙色 外→にぶい橙色、浅黄橙色	砂少量混入 やや密	やや軟	〃	〃	ヘラケズリ	〃	ヘラケズリ	〃			〔30.2〕 〔12.2〕		〔28.0〕 〔27.7〕	図10 版左 29(1)
	甕	第73図2	BⅠ1 (1)(ⅰⅰ)	カマド付近	1/10	内→灰白色 外→灰白色、橙色	砂少量混入 やや密	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔29.5〕 (9.5)		〔27.4〕	図版11 29上
	鉢	第73図3	BⅠ1 b	埋土中	1/5	内→にぶい橙色、暗褐色 外→にぶい赤橙色	砂多めに混入 やや粗	やや硬	〃	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	〃			〔15.9〕 (8.0)		〔14.1〕 〔14.0〕	図10 版左 29(2)
	甕	第73図4	BⅠ2 (1)	カマド付近	1/8	内→灰白色 外→褐灰色、にぶい橙色、黒色	砂若干混入 普	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔16.7〕 (8.4)		〔15.1〕 〔15.8〕	図10 版右 29(1)
	甕	第73図5	BⅠ2 (1)	カマド付近	1/10	内→橙色、灰褐色 外→褐灰色	砂多めに混入 やや粗	やや軟	〃	〃	〃	〃					〔17.5〕 (5.1)		〔15.5〕	図11 版左 29(2)
	甕	第73図6	BⅠ2 (1)	カマド付近	1/8	内→灰白色 外→灰白色、赤橙色	砂若干混入 やや粗	やや軟	〃	〃	〃	〃					〔18.9〕 (7.1)		〔17.1〕 〔17.8〕	図版10 29上
	鉢	第73図7	BⅠ3	カマド付近	1/10	内→灰白色、橙色、赤褐色 外→淡黄色	砂若干混入 やや密	少々軟	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ			〔14.9〕 (7.5)		〔13.1〕 〔13.4〕	図11 版左 29(1)
第21号住居跡	坏	第75図1	BⅠc −H1	床面 (南東コーナー)	1/3	内→黒色 外→にぶい橙色、黒色	砂若干混入 わりと密	やや軟	〃	〃	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	〔14.5〕 5.85	〔6.5〕		図版7 27
	坏	第75図2	BⅠc −H1	埋土上部	1/5	内→にぶい橙色 外→にぶい橙色	砂若干混入 かなり密	やや軟			〃	〃	〃	〃	〃	〃	(2.95)	〔6.5〕		

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 〔 〕復元値 ( ) 現存値 測定値(cm)			写真番号
第21号住居跡	坏	第75 図3	BⅠa	第1層	2/5	内→黒色、にぶい黄橙色 明褐色 外→にぶい黄橙色 にぶい橙色	砂若干混入 わりと密	やや軟	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転糸切り	ヘラミガキ	口径〔14.1〕 器高 4.7	底径〔 6.4〕 腕高	頸径 胴径	図版8 27
	鉢	第75 図4	BⅠ1 b	埋土中	1/10	内→灰黄色 外→黄灰色、灰黄褐色	砂若干混入 わりと密	やや硬	〃	〃	〃	ロクロナデ					〔17.8〕 (5.1)		〔15.9〕 〔16.0〕	図版9 27上
	壺	第75 図5	BⅡ	床面上	1/20	内→灰色 外→明緑灰色	砂若干混入 かなり密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃					〔16.9〕 (3.5)			図版9 27下左
第22号住居跡	甕	第77 図1	BⅠ1 (1)(i)	カマド付近	1/9	内→にぶい褐色、灰色 外→灰白色、褐灰色、暗褐色	砂少量混入 わりと密	やや軟	〃	〃	ヘラケズリ	〃	ヘラケズリ	ロクロナデ			〔21.9〕 〔15.4〕		〔19.5〕 〔21.1〕	図版13 30
	甕	第77 図2	BⅠ1 (1)(i)	ピット5	1/8	内→浅黄橙色 外→浅黄橙色	砂少量混入 わりと密	やや硬	〃	〃	ロクロナデ	ヘラナデ	〃	ヘラナデ			〔23.6〕 (19.3)		〔20.3〕 〔22.3〕	図版16 30
	甕	第77 図3	BⅠ1 (1)(i)	ピット1埋土中	1/10	内→極暗褐色、灰白色 外→灰白色、褐灰色	砂少量混入 わりと密	やや硬	〃	〃	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ			〔26.1〕 (1625)		〔23.9〕 〔24.5〕	図版15 30
	坏	第77 図4	BⅠc −H1	埋土中	1/7	内→黒色 外→にぶい黄橙色	砂かすかに混入 わりと密	かすかに軟	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	〔14.0〕 4.7	〔 5.0〕		
	坏	第77 図5	BⅠc −H1	カマド付近	1/5	内→黒色 外→にぶい橙色、橙色 にぶい黄褐色	砂若干混入 わりと密	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔15.3〕 5.65	〔 7.3〕		
	坏	第77 図6	BⅠa	不明	1/2	内→黒色 外→にぶい黄橙色	砂若干混入 わりと密	やや軟			〃	〃	ロクロナデ	〃	回転糸切り	〃		6.2 (2..9)		
	坏	第77 図7	BⅠa	ピット1埋土中	3/5	内→黒色 外→にぶい黄橙色、褐灰色	砂かすかに混入 わりと密	かすかに軟	ロクロナデ	ヘラミガキ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.0〕 4.6	6.4		図版1 30
	坏	第77 図8	BⅠa	ピット1	4/5	内→黒色 外→にぶい黄橙色	砂若干混入 わりと密	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.0 4.1	6.2		図版6 30
	坏	第77 図9	BⅠa	不明	7/20	内→黒色、褐灰色、赤褐色 外→にぶい橙色、黒色	砂若干混入 わりと密	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.2 4..0	6.2		
	坏	第77 図10	BⅠa	ピット1埋土中	4/5	内→黒色 外→灰黄色、黒色	砂若干混入 わりと密	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	16.4 5.3	5.8		図版2 30
	坏	第77 図11	BⅠ	ピット5	1/7	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 わりと密	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔15.4〕 (4.1)			
	高台付坏	第77 図12	BⅠ2 ②	ピット5	2/5	内→黒色 外→灰白色、淡黄色	砂若干混入 やや密	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	ヘラミガキ	〔15.4〕 5.35	〔 6.6〕 1.2	高台径 7.5	
	甕	第78 図1	BⅠ1 (2)(i)	埋土中	1/10	内→にぶい橙色、灰黄褐色 外→灰褐色、橙色	砂少量混入 やや密	かすかに軟	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ			〔30.4〕 〔12.1)		〔27.0〕 〔30.9〕	

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 測定値(cm) 〔 〕復元値 ( ) 現存値			写真番号
第22号住居跡	甕	第78図2	B I 2	ピット5	1/20	内→にぶい橙色、橙色 外→にぶい赤褐色、赤色	砂若干混入わりと密	やや軟					ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	口径 器高(2.25)	底径 7.8 脚高	頸径 脚径	
	甕	第78図3	B I 1	カマド付近	1/20	内→にぶい橙色、灰白色 外→浅黄橙色、橙色	砂少量混入やや密	やや軟					ヘラケズリ	〃	ヘラケズリ	〃	(7.25)	〔8.2〕		
	甕	第78図4	B I 1 (2)(ii)	ピット5	1/4	内→浅黄橙色、橙色、灰褐色 外→にぶい橙色、橙色、浅黄橙色	砂少量混入わりと密	かすかに軟	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	〃	ヘラナデ			(22.7) (21.9)		(21.3) (24.3)	図版14 30
	壺	第78図5	B I b	床面	1/10	内→にぶい黄橙色 外→にぶい黄橙色 にぶい橙色	砂少量混入わりと密	やや軟	〃	〃	〃	〃					(21.0) (8.0)		(19.6) (24.0)	
	坏	第78図6	B III	埋土中部	1/9	内→浅黄橙色 外→浅黄橙色	砂かすかに混入かなり密	かなり硬	〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			(15.2) (3.55)			
	坏	第78図7	B III	ピット1埋土中	1/5	内→浅黄橙色 外→浅黄橙色	砂若干混入わりと密	かなり硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	回転糸切り	ロクロナデ	14.8 4.25			
	坏	第78図8	B III	不明	1/5	内→にぶい黄橙色、褐灰色 外→にぶい橙色、灰白色 にぶい黄橙色	砂少量混入わりと密	かなり硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(14.8) 4.4	〔7.5〕		
	坏	第78図9	B III	カマド付近	1/6	内→にぶい橙色、浅黄橙色 外→浅黄橙色	砂若干混入わりと密	かなり硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(14.6) 4.8	〔7.0〕		
	坏	第78図10	B III	ピット1埋土中	完形	内→にぶい橙色、橙色 褐灰色 外→にぶい黄橙色 灰黄褐色	砂若干混入わりと密	かなり硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.9 4.9	6.1		図版7 30
	坏	第78図11	B III	床面直上	2/5	内→橙色 外→浅黄橙色	砂かすかに混入わりと密	かなり硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(14.7) (4.7)			図版4 30
	坏	第78図12	B III	ピット1埋土中	完形	内→にぶい橙色、浅黄橙色 外→浅黄橙色、灰白色、にぶい橙色	砂少量混入かなり密	かなり硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.8 455	6.8		図版8 30
	坏	第78図13	B III	ピット1埋土中	ほぼ完形	内→にぶい黄橙色 灰褐色、黒褐色 外→にぶい黄橙色 褐灰色、黒褐色	砂若干混入わりと密	わりと硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	15.0 4.6	(6.35)		図版5 30
	甕	第79図1	B I 2 (2)	ピット5	1/3	内→浅黄橙色、褐灰色 外→にぶい黄橙色 にぶい橙色	砂少量混入わりと密	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃			13.3 (12.1)		12.5 13.8	図版12 30
	甕	第79図2	B I 2 (2)	カマド付近	3/7	内→橙色 外→にぶい橙色、褐灰色	砂若干混入わりと密	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃			(15.7) (10.9)		(14.5) (16.2)	図版10 30
	甕	第79図3	B I 2 (1)	ピット5	4/5	内→にぶい橙色 外→灰黄褐色	砂若干混入わりと密	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	回転糸切り	ロクロナデ	13.9 13.8	5.8	12.6	図版11 30
	坏	第79図4	B III	ピット1埋土中	完形	内→にぶい黄橙色、褐灰色 外→にぶい黄橙色	砂少量混入わりと密	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	15.5 5.35	6.45		図版9 30

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 〔 〕復元値 ( ) 現存値 測定値(cm)			写真番号
第22号住居跡	坏	第79図5	BⅢ	ピット1埋土中	1/6	内→にぶい黄橙色、褐灰色 外→黒褐色	砂若干混入 かなり密	かなり硬	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			口径〔7.5〕 器高(3.35)	底径 脚高	頸径 胴径	
	坏	第79図6	BⅢ	ピット1埋土中	完形	内→にぶい黄褐色、褐灰色 外→にぶい橙色、褐灰色 にぶい黄橙色	砂若干混入 わりと密	かなり硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	回転糸切り	ロクロナデ	15.55 4.25	6.4		図版4 30
	坏	第79図7	BⅡ	カマド内	1/10	内→灰色 外→灰色	砂若干混入 わりと密	かなり硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔14.3〕 (2.6)			
	坏	第79図8	BⅡa	カマド付近	3/7	内→灰黄色 外→灰黄色、灰白色	砂若干混入 かなり密	かなり硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	回転糸切り	ロクロナデ	〔16.9〕 4.8	〔5.3〕		
第23号住居跡	坏	第81図1	BⅠa	床面	5/7	内→黒色 外→にぶい褐色、極暗褐色	砂少量混入 やや密	やや硬	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ	15.2 5.0	5.8		図版1 31
	坏	第81図2	BⅠa	カマド周辺	3/5	内→橙色、褐灰色 外→橙色	砂少量混入 著	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.4〕 5.0	6.6		図版2 31
	坏	第81図3	BⅠa	カマド周辺	4/5	内→黒色 外→にぶい橙色	砂少量混入 やや粗	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	17.6 5.3	6.5		図版3 31
	高台付坏	第81図4	BI1④ －W5	カマド周辺	8/9	内→灰白色、黒色 外→灰白色、浅黄橙	砂若干混入 やや密	やや軟	〃	〃	〃	〃	ヘラケズリ	〃	ロクロナデ	〃	17.3 7.7	1.0	高台径 8.8	図版4 31
	坏	第81図5	BⅢ	カマド周辺	完形	内→にぶい橙色 外→褐灰色、灰褐色	砂少量混入 やや粗	だいぶ硬	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	13.1 5.7	6.2		図版5 31
	坏	第81図6	BⅢ	不明	1/3	内→浅黄橙色 外→浅黄橙色	砂少量混入 だいぶ密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔13.6〕 (4.9)	〔5.3〕		
	坏	第81図7	BⅢ	カマド周辺	5/6	内→にぶい橙色 外→明赤灰色	砂少量混入 だいぶ密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	12.7 4.3	5.6		図版6 31
	甕	第82図1	BⅠ1 (2)(i)	カマド周辺	1/8	内→にぶい褐色、褐色 外→黒褐色、淡黄橙色	砂多めに混入 やや粗	やや軟	〃	〃	ヘラケズリ	〃	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	〔29.5〕 (35.8)	〔11.5〕	〔26.1〕 〔32.0〕	図7 版右 31左
	甕	第82図2	BⅠ1 (2)(i)	埋土中	1/10	内→明褐色灰色、暗褐色 外→褐灰色、黒色	砂少量混入 やや密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃					〔23.1〕 (10.7)		〔21.0〕 〔25.1〕	図版7 31上
	甕	第82図3	BⅠ1	カマド周辺	1/10	内→橙色 外→にぶい橙色	砂多めに混入 だいぶ密	だいぶ硬					ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	(10.6)	〔10.1〕		
	甕	第82図4	BⅠ2 (1)	カマド周辺	1/5	内→橙色 外→橙色	砂多めに混入 やや粗	やや軟	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	13.2 (13.4)	5.7	11.7 13.3	
第井1号戸	坏	第93図1	BⅠ	井桁内部	1/5	内→黒色 外→灰褐色	砂若干混入 やや密	やや硬	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ			〔15.0〕 (4.4)			

→

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部		体部上半		体部下半		底部		法量 〔 〕復元値 測定値(cm) ( )現存値			写真番号
第1号井戸	坏	第93図2	B I	井桁内部	1/3	内→黒色 外→にぶい橙色、黒色	砂若干混入 やや密	かすかに硬	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ			口径〔4.2〕 器高(4.5)	底径 脚高	頸径 脚径	
	坏	第93図3	B I	南北畦畔北半分	1/6	内→黒色 外→にぶい橙色	砂少量混入 普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔15.0〕 (4.2)			
	坏	第93図4	B I	第2層	1/6	内→黒色 外→にぶい橙色	砂微量混入 普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔14.7〕 〔4.2〕			
	坏	第93図5	B I	第4層	1/6	内→黒色 外→黒色、灰白色	砂少量混入 普	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔14.5〕 (3.6)			
	坏	第93図6	B I c −H 5	第4層	1/7	内→黒色 外→にぶい橙色	砂微量混入 やや密	やや硬			〃	〃	ヘラケズリ	〃	ヘラケズリ	ヘラミガキ		〔5.6〕 (2.8)		
	坏	第93図7	B I c −H 5	第7層	1/6	内→黒色 外→明褐灰色	砂少量混入 だいぶ密	だいぶ硬			〃	〃	〃	〃	〃	〃		〔5.4〕 (2.7)		
	坏	第93図8	B I c −H 1	井桁内部	1/3	内→黒色 外→明褐灰色	砂微量混入 やや密	硬					〃	〃	〃	〃		6.1 (2.0)		
	坏	第93図9	B I c −H 1	井桁内部	1/6	内→黒色 外→にぶい褐色	砂微量混入 だいぶ密	だいぶ硬			ロクロナデ	ヘラミガキ	〃	〃	〃	〃		〔5.5〕 (1.8)		
	坏	第93図10	B I e −H 1	第3層	1/6	内→黒色 外→にぶい橙色	砂微量混入 密	やや硬			〃	〃	〃	〃	〃	〃		〔5.1〕 (2.0)		
	坏	第93図11	B II a	第2層	1/4	内→灰黄褐色 外→灰黄褐色	砂若干混入 だいぶ密	だいぶ硬			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		4.9 (2.0)		
	坏	第93図12	B II	東西畦畔	1/8	内→灰オリーブ色 外→灰色、灰黄褐色	砂微量混入 だいぶ密	だいぶ硬	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	〃	〃	〃			〔14.0〕 (4.3)			
	坏	第93図13	B II	第2層	1/7	内→灰白色 外→灰色	砂若干混入 だいぶ密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔14.2〕 (3.8)			
	坏	第93図14	B II a	第3層	1/5	内→橙色 外→橙色、にぶい橙色	砂若干混入 普	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	回転糸切り	ロクロナデ	〔17.5〕 5.1	〔6.0〕		
	坏	第93図15	B II	第4層	1/4	内→橙色 外→橙色	砂若干混入 やや密	硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔16.8〕 (4.1)			
	坏	第93図16	B III	第1層	1/5	内→灰白色 外→灰白色	砂少量混入 普	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔14.5〕 (3.6)			
	坏	第93図17	B III	第1層	1/4	内→浅黄橙色 外→浅黄橙色	砂若干混入 やや粗	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	回転糸切り	ロクロナデ	〔11.0〕 (2.5)	(4.9)		

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 測定値(cm) 〔 〕復元値 ( ) 現存値			写真番号
第1号井戸	坏	第93図18	BⅢ	第7層	1/5	内→明褐灰色 外→灰白色	砂少量混入 やや粗	だいぶ軟	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			口径〔15.8〕 器高(3.9)	底径 脚高	類径 脚径	
	坏	第93図19	BⅢ	第2層	1/7	内→浅黄橙色 外→浅黄橙色	砂若干混入 かすかに粗	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔13.2〕 (3.4)			
	坏	第93図20	BⅢ	井桁内部	1/4	内→浅黄橙色 外→浅黄橙色	砂少量混入 やや密	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	回転糸切り	ロクロナデ	〔14.8〕 (5.0)	〔 6.7〕		
	坏	第93図21	BⅢ	南北畦畔内	1/5	内→浅黄橙色 外→浅黄橙色	砂若干混入 普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔15.9〕 (4.1)			
	甕	第94図1	BⅠ1 (1)	第2層	1/10	内→灰白色 外→灰白色	砂若干混入 普	硬	〃	〃	〃	〃					〔26.8〕 (4.7)		〔26.0〕	
	鉢	第94図2	BⅠ3	第2層	1/10	内→浅黄橙色 外→橙色	砂若干混入 やや密	やや硬	〃	〃	〃	〃					〔17.8〕 (4.5)		〔16.5〕	
	甕	第94図3	BⅠ2 (2)	第4層	1/10	内→にぶい褐色 外→にぶい橙色	砂多めに混入 普	硬	〃	〃	〃	〃					〔14.9〕 (5.6)		〔13.6〕	
	鉢	第94図4	BⅠ	第4層	1/4	内→黒色 外→橙色、黒色	砂若干混入 やや粗	普			〃	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転糸切り	ヘラミガキ		〔 6.2〕 (3.7)		
	鉢	第94図5	BⅠ	第3層	1/10	内→にぶい橙色、浅黄橙 外→にぶい褐色、灰褐色	砂少量混入 普	かすかに硬			〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ		〔 5.7〕 (4.3)		
	鉢	第94図6	BⅠ	南北畦畔南半分	1/4	内→にぶい橙色 外→にぶい橙色	砂微量混入 普	だいぶ軟			〃	〃	〃	〃	〃	〃		〔 5.0〕 (3.4)		
	鉢	第94図7	BⅠ	第3層	1/10	内→にぶい橙色 外→浅黄橙色	砂少量混入 普	だいぶ軟			〃	〃	〃	〃	〃	〃		〔 7.0〕 (3.2)		
	壺	第94図8	BⅡ	第4層	1/10	内→灰色 外→灰色	砂微量混入 だいぶ密	だいぶ硬			タタキ目	〃	〃	〃					〔13.4〕 (8.7)	
	甕	第94図9	BⅡ	南北畦畔南半分	1/10	内→灰色 外→灰色	砂若干混入 だいぶ密	だいぶ硬	ロクロナデ	ロクロナデ							〔18.9〕 (4.0)			
	甕	第94図10	BⅡ	第2層	1/10	内→灰色 外→灰色、暗灰色	砂若干混入 だいぶ密	だいぶ硬	〃	〃							〔20.2〕 (3.3)			
	甕	第94図11	BⅡ	井桁内部	1/10	内→灰色 外→灰色	砂少量混入 だいぶ密	だいぶ硬			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					〔12.9〕 (8.5)	〔16.4〕
	壺	第94図12	BⅡ	井桁3枚目以下	1/10	内→灰色 外→灰色	砂微量混入 だいぶ密	だいぶ硬			ロクロナデ	〃	〃	ロクロナデ						〔17.4〕

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 〔 〕復元値 測定値(cm) ( )現存値			写真番号
第1号井戸	壺	第94図13	BII	東西畦畔	1/10	内→灰色 外→灰色	砂若干混入 だいぶ密	だいぶ硬					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	口径 器高(3.6)	底径〔 7.9〕 脚高〔 1.2〕	頸径〔 7.7〕 胴径	
	甕	第94図14	BII	第4層	1/4	内→灰色 外→灰色	砂若干混入 やや粗	だいぶ硬					〃	〃	回転糸切り	〃	(3.2)	〔 7.0〕		
	甕	第94図15	BII	第4層	1/10	内→灰色 外→暗灰色	砂少量混入 密	だいぶ硬			ロクロナデ	ロクロナデ	〃	〃	回転糸切り	〃	(8.3)	〔 7.4〕		
	甕	第94図16	BII	第4層	1/10	内→灰色 外→灰色	砂微量混入 だいぶ密	だいぶ硬					ヘラケズリ	〃	ヘラケズリ	〃	(10.0)	〔 6.5〕		
第2号井戸	坏	第98図1	A2	東側石組下 No21層	1/2	内→黒色 外→黒色、にぶい褐色	砂若干混入 かすかに密	やや硬	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	〔 9.5〕 4.1	〔 4.3〕		図版32 1
	坏	第98図2	A2	第7層	1/5	内→黒色 外→灰白色、黒色	砂若干混入 普	だいぶ軟	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	〃	〃	〃	〃	〃	〔11.0〕 4.9	〔 5.5〕		
	坏	第98図3	A2	第8層	1/3	内→黒色 外→灰褐色、黒色	砂若干混入 普	かすかに硬	ヘラミガキ	ヘラミガキ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔10.7〕 4.1	5.5		図版32 9
	坏	第98図4	A2	第8層	1/5	内→黒色 外→灰白色、黒色	砂若干混入 かすかに粗	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	刷毛目 ヘラケズリ	〃	〃	〃	〔13.1〕 5.1	〔 7.4〕		図版32 2
	坏	第98図5	A2	第8層	1/2	内→黒色 外→浅黄橙色、黒色	砂若干混入 やや密	だいぶ軟	横ナデ ヘラミガキ	〃	〃	〃	ヘラミガキ	〃	〃	〃	〔12.9〕 4.0	6.5		図版32 10
	坏	第98図6	A	第6層	1/8	内→黒色 外→黒色、橙色	砂若干混入 かすかに密	やや硬	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	〃					〔18.7〕 (3.7)			
	坏	第98図7	BIc−H1	第1層	1/2	内→黒色 外→にぶい橙色、黒色	砂微量混入 かすかに粗	軟	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	〃	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	〔14.0〕 4.8	5.3		
	坏	第98図8	BIc−H1	第2層	1/2	内→黒色、 外→にぶい橙色	砂微量混入 普	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.1〕 4.8	6.0		
	坏	第98図9	BIc−H1	東畦畔 第1層下部	ほぼ完形	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 かすかに密	普	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.2 4.9	5.2		図版32 11
	坏	第98図10	BIc−H1	第1層	5/6	内→黒色 外→にぶい褐色、黒色	砂若干混入 かすかに粗	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.4 5.0	5.5		図版32 3
	坏	第98図11	BIc−H1	第2層	1/6	内→黒色 外→にぶい橙色、黒色	砂微量混入 普	軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔13.9〕 5.0	〔 5.4〕		
	坏	第98図12	BIc−H1	第1層	5/6	内→黒色 外→にぶい橙色、黒色	砂若干混入 普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.4 5.1	5.8		図版32 4

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 〔 〕復元値 測定値(cm) ( ) 現存値			写真番号
第2号井戸	坏	第98 図13	BIc −H1	北畦第1層	3/5	内→黒色 外→にぶい橙色	砂微量混入 普	だいぶ軟	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	口径 14.3 器高 5.3	底径 5.3 脚高	頸径 脚径	図版3212
	坏	第98 図14	BIc −H1	第1層	2/3	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 かすかに粗	軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.6 5.3	5.6		図版325
	坏	第98 図15	BIc −H1	第1層	ほぼ完形	内→黒色 外→橙色	砂若干混入 普	かすかに軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.2 5.2	5.6		図版3213
	坏	第98 図16	BIc −H1	第2層	ほぼ完形	内→黒色 外→橙色、黒色	砂若干混入 普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	15.3 5.2	4.4		図版326
	坏	第98 図17	BIc −H1	第1層	3/5	内→黒色 外→にぶい褐色	砂微量混入 かすかに粗	だだいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.8 5.2	5.2		図版3215
	坏	第98 図18	BIc −H1	第1層	2/3	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 普	かすかに軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.6〕 5.5	4.7		図版327
	坏	第98 図19	BIc −H1	第1層	2/3	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 普	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.7 5.3	6.4		図版3214
	坏	第99 図1	BIc −H1	第1層	3/5	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 普	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.7 5.2	6.4		
	坏	第99 図2	BIc −H1	不明	2/3	内→黒色 外→浅黄橙色	砂微量混入 普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.7 5.0	5.3		図版3224
	坏	第99 図3	BIc −H1	第1層	2/3	内→黒色 外→にぶい橙色、黒色	砂若干混入 かすかに粗	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.0 5.1	6.0		図版3217
	坏	第99 図4	BIc −H1	第1層	1/4	内→黒色 外→にぶい橙色、黒色	砂微量混入 普	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.6〕 4.9	〔6.4		
	坏	第99 図5	BIc −H1	第1層	4/5	内→黒色 外→にぶい橙色、黒色	砂若干混入 普	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.5 5.4	5.5		図版3218
	坏	第99 図6	BIc −H1	第2層	1/3	内→黒色、にぶい橙色 外→にぶい橙色	砂若干混入 普	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.9〕 5.5	〔6.0〕		
	坏	第99 図7	BIc −H1	第3層	4/5	内→黒色 外→橙色、黒色	砂若干混入 普	軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.5 4.7	6.3		図版3219
	坏	第99 図8	BIc −H1	第1層	ほぼ完形	内→黒色 外→にぶい橙色	砂微量混入 普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.4 4.8	5.1		図版328
	坏	第99 図9	BIc −H1	第2層	1/3	内→黒色 外→にぶい橙色、黒色	砂若干多め混入 かすかに粗	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔15.9〕 4.7	〔6.1〕		

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 〔 〕復元値 測定値(cm) ( )現存値			写真番号
第2号井戸	坏	第99 図10	BIc −H1	第2層	1/5	内→黒色、にぶい橙色 外→にぶい橙色	砂若干混入 普	だいぶ軟	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	口径〔15.6〕 器高 4.6	底径〔6.9〕 脚高	頸径 脚径	
	坏	第99 図11	BIc −H1	第1層	1/3	内→黒色 外→にぶい橙色	砂微量混入 かすかに粗	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔16.1〕 5.0	〔6.8〕		
	坏	第99 図12	BIc −H1	第1層	1/2	内→黒色 外→にぶい橙色	砂微量混入 普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔15.6〕 5.0	6.4		
	坏	第99 図13	BIc −H1	第1層	1/4	内→黒色 外→浅黄橙色	砂若干混入 普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔15.6〕 4.3	〔8.0〕		
	坏	第99 図14	BIc −H1	第1層	1/4	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	17.2 5.2	6.2		
	坏	第99 図15	BIc −H2	第1層	4/5	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 かすかに粗	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	13.6 5.0	4.8		図版3216
	坏	第99 図16	BIc −H5	第1層	1/2	内→黒色 外→灰白色	砂少々多め混入 かすかに粗	軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	回転糸切り	〃	13.8 4.5	5.2		
	坏	第99 図17	BIc −H5	東畦畔1層下部	ほぼ完形	内→黒色 外→にぶい褐色	砂若干混入 かすかに粗	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.1 4.9	5.0		図版3220
	坏	第99 図18	BIc −H5	第3層	4/7	内→黒色 外→にぶい橙色	砂微量混入 普	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	4.5 5.0	5.6		図版3223
	坏	第100 図1	BIc −H5	第1層	5/6	内→黒色 外→灰白色、黒色	砂若干混入 かすかに密	普	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	13.1 4.5	6.6		図版3331
	坏	第100 図2	BIc −H5	第1層	4/5	内→黒色 外→浅黄橙色	砂若干混入 かすかに密	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.1 5.2	7.2		図版3221
	坏	第100 図3	BIc −H5	第2層	1/4	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 普		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.2〕 5.0	〔7.9〕		
	坏	第100 図4	BIe −H1	第1層	3/5	内→黒色 外→にぶい橙色	砂微量混入 かすかに粗	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ヘラケズリ	〃	14.6 5.1	5.4		図版3222
	坏	第100 図5	BIc −W1	第1層	1/2	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.3〕 5.0	〔5.0〕		
	坏	第100 図6	BIe −W1	第1層	3/5	内→黒色 外→灰白色、黒色	砂微量混入 かすかに粗	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.0〕 4.7	5.3		
	坏	第100 図7	BIe −W1	第1層	1/2	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 かすかに粗	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	15.0 4.9	6.0		

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 測定値(cm) 〔 〕復元値 ( ) 現存値			写真番号
第2号井戸	坏	第100図8	BIe-W1	第1層	5/6	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入かすかに粗	だいぶ軟	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	口径 16.3 器高 5.7	底径 6.1 脚高	類径 脚径	図版32 33
	坏	第100図9	BIe-W1	第1層	3/4	内→黒色 外→にぶい橙色、黒色	砂若干混入普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	16.7 6.0	6.4		図版39 33
	坏	第100図10	BIe-W1	第1層	2/3	内→黒色 外→にぶい橙色、灰色	砂若干混入かすかに粗	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	19.1 6.2	7.6		図版26 33
	坏	第100図11	BIa	東畦第1層	3/4	内→黒色 外→灰白色	砂若干混入かすかに粗	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ	〃	回転糸切り	〃	14.9 4.3	5.5		
	坏	第100図12	BIa	第1層	2/5	内→黒色 外→灰褐色、黒色	砂若干混入普	かすかに軟	〃	〃	〃	ヘラミガキ	〃	〃	〃	〃	〔15.5〕 4.6	〔7.7〕		
	坏	第100図13	BIa	第1層	5/6	内→黒色 外→にぶい橙色、黒色	砂微量混入普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.2 4.9	7.0		図版25 33
	坏	第100図14	BIa	第1層	1/4	内→黒色 外→褐灰色	砂若干混入普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔15.1〕 5.0	〔6.5〕		
	坏	第100図15	BIa	第1層	1/4	内→黒色 外→にぶい橙色	砂微量混入普	やや軟	〃	横ナデ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.6〕 5.1	〔5.2〕		
	坏	第100図16	BIa	第1層	1/3	内→黒色 外→にぶい褐色	砂若干混入かすかに粗	軟	〃	ヘラミガキ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.4〕 5.4	〔6.2〕		
	坏	第101図1	BIII	第1層	3/5	内→淡赤橙色 外→淡橙色	砂ほとんど無密	だいぶ軟	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	13.2 4.2	5.0		
	坏	第101図2	BIII	第1層	1/5	内→浅黄橙色 外→浅黄橙色	砂若干混入やや粗	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔15.4〕 (5.4)			
	坏	第101図3	BIII	第1層	完形	内→浅黄橙色 外→浅黄橙色	砂若干混入密	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	14.0 4.8	6.5		図版33 33
	坏	第101図4	BIII	第1層	ほぼ完形	内→灰白色 外→灰白色	砂若干混入普	普	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.5 4.7	6.6		図版27 33
	坏	第101図5	BIII	東西畦畔	1/2	内→にぶい橙色、浅黄橙色 外→浅黄橙色、にぶい橙色	砂若干混入やや粗	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.2〕 3.8	5.7		図版34 33
	坏	第101図6	BIII	第1層	1/2	内→灰褐色 外→灰褐色	砂少々多め混入かすかに粗	やや硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔18.5〕 5.8	6.9		図版28 33
	坏	第101図7	BIII	第1層	1/2	内→灰白色 外→灰白色	砂若干混入普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.8〕 4.6	6.3		

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 測定値（cm） 〔 〕復元値 （ ）現存値			写真番号
第2号井戸	坏	第101図8	BⅡ	第1層	1/5	内→にぶい橙色、灰色 外→にぶい黄橙色、灰色	砂若干混入 かすかに混入	硬	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			口径〔14.7〕 器高(4.5)	底径 脚高	頸径 脚径	
	坏	第101図9	BⅡ	第1層	2/5	内→灰白色 外→灰白色	砂若干混入 密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔14.9〕 (4.6)			
	坏	第101図10	BⅡa	第1層	1/2	内→灰色 外→灰色	砂若干混入 密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	回転糸切り	ロクロナデ	〔14.2〕 4.9	〔 6.6〕		
	坏	第101図11	BⅡa	第2層	2/5	内→灰白色 外→灰白色	砂若干混入 密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔13.4〕 4.6	〔 5.7〕		
	坏	第101図12	BⅡa	第1層	3/4	内→浅黄橙色、にぶい橙色 外→淡橙色、浅黄橙	砂若干混入 だいぶ密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.3 4.6	〔 5.6〕		図版29 33
	坏	第101図13	BⅡa	第1層	1/2	内→灰白色 外→灰白色	砂微量混入 だいぶ密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.6 4.9	5.7		図版35 33
	坏	第101図14	BⅡa	第1層	2/3	内→灰白色 外→灰白色	砂若干混入 密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.4 4.8	6.2		図版30 33
	坏	第101図15	BⅡa	第1層	3/4	内→灰白色 外→灰白色、灰色	砂若干混入 密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.6 5.2	5.1		図版36 33
	坏	第101図16	BⅡ	第1層	1/3	内→灰色 外→灰色、暗灰色	砂微量混入 だいぶ密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〔14.2〕 (5.1)			
	坏	第101図17	BⅡa	第1層	9/10	内→灰白色 外→灰白色、灰色	砂微量混入 だいぶ密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	回転糸切り	ロクロナデ	14.2 5.2	5.4		図版37 33
	坏	第101図18	BⅡa	第2層	1/3	内→灰色 外→灰色	砂若干混入 やや粗	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔15.6〕 3.9	5.5		
	盤	第101図19	BⅡ	第5層	4/5	内→灰白色 外→灰白色、灰色	砂若干混入 密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	15.3 4.4	11.3		図版38 33
	高台付坏	第102図1	BⅠ	畦畔第1層	1/3	内→黒色 外→にぶい橙色、黒色	砂微量混入 普	軟	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ			〔13.3〕 (3.0)			
	高台付坏	第102図2	BⅠ1 ①-(3)	第1層	4/5	内→黒色 外→にぶい橙色	砂微量混入 普	軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	菊花状ヘラ刻み	ヘラミガキ	13.2 (3.3)			
	高台付坏	第102図3	BⅠ1 ①-(3)	第2層	5/6	内→黒色 外→にぶい褐色	砂若干混入 普	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	13.3 4.0	5.7	高台径 6.2	図版43 34
	高台付坏	第102図4	BⅠ1 ①-(3)	第1層	1/2	内→黒色 外→橙色、黒色、浅黄橙色	砂若干混入 やや密	かすかに硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔13.5〕 3.7	6.0 0.9	高台径 6.4	図版41 34

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 測定値(cm) 〔 〕復元値 ( ) 現存値			写真番号
第2号井戸	高台付坏	第102図5	BI1 ①-(3)	第1層	2/3	内→黒色 外→にぶい赤褐色、黒色	砂若干混入 かすかに粗	軟	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	菊花状 ヘラ刻み	ヘラミガキ	口径〔14.1〕 器高 4.2	底径 5.9 脚高 0.8	頸径高台径6.5 脚径	図版44 34
	高台付坏	第102図6	BI1 ①-(3)	第1層	2/5	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 普	普	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔14.0〕 4.2	〔 6.0〕 1.0	高台径〔6.3〕	
	高台付坏	第102図7	BI1 ①-(3)	第1層	1/2	内→黒色、にぶい橙色 外→にぶい橙色	砂若干混入 やや粗	軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.3 4.0	6.5 0.8	高台径 6.5	図版45 34
	高台付坏	第102図8	BI1 ①-(3)	第1層	1/3	内→黒色 外→にぶい黄橙色、灰色	砂若干混入 やや密	かすかに硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.8 (3.4)	6.0		
	高台付坏	第102図9	BI1 ①-(3)	第2層	4/5	内→黒色、灰色 外→橙色	砂若干混入 普	だいぶ軟	〃	ヘラミガキ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.9 4.6	6.5 0.8	高台径 6.6	図版46 34
	高台付坏	第102図10	BI2 ①-(2)	第1層	1/5	内→黒色 外→淡橙色	砂微量混入 普	だいぶ軟			〃	〃	〃	〃	〃	〃	 3.1	6.1 1.1	高台径 7.3	
	高台付坏	第102図11	BI1 ④-(3)	第1層	1/2	内→黒色 外→にぶい褐色	砂若干混入 やや密	かすかに硬	ロクロナデ	ヘラミガキ	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ	〃	〔14.2〕 4.0	5.2 0.7	高台径 5.0	
	高台付坏	第102図12	BI1 ④-(3)	第1層	ほぼ完形	内→黒色 外→にぶい褐色	砂若干混入 普	かすかに硬	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.1 4.2	5.7 0.5	高台径 5.7	図版42 34
	高台付坏	第102図13	BI1 ①-(1)	第1層	5/6	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 普	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	菊花状 ヘラ刻み	〃	15.7 5.9	6.3 0.7	高台径 6.6	図版47 34
	高台付坏	第102図14	BI1 ①-(1)	第2層	5/6	内→黒色 外→明褐灰色	砂若干混入 やや密	普	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	15.0 6.7	6.2 0.7	高台径 6.9	図版48 34
	高台付坏	第102図15	BI1 ①-(1)	第1層	1/2	内→黒色 外→にぶい褐色	砂若干混入 普	かすかに軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	15.7 (5.7)	〔 6.9〕		
	高台付坏	第102図16	BI1 ①-(2)	第1層	1/3	内→褐灰色 外→にぶい褐色	砂若干混入 かすかに粗	だいぶ軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔16.0〕 (5.6)	6.4		
	高台付坏	第102図17	BI1 ①-M (1)	第1層	1/2	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 普	かすかに軟	〃	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ	〃	〃	〃	〔15.3〕 6.4	〔 6.8〕 1.0	〔 7.3〕	図版40 34
	高台付坏	第102図18	BII	第2層	1/6	内→灰白色 外→灰白色、にぶい褐色	砂若干混入 密	だいぶ硬	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り痕 ロクロナデ	ロクロナデ	 (2.5)	〔 7.6〕 0.5	〔 7.6〕	
	甕	第103図1	A1① (1)(i)	第7層	1/20	内→浅黄橙色 外→にぶい橙色	砂若干混入 かすかに粗	かすかに硬	横ナデ	横ナデ	刷毛目 ヘラミガキ	横ナデ					〔22.6〕 (4.9)	〔19.6〕		図版49上 34
	甕	第103図2	A1① (1)	井筒内	ほぼ完形	内→明褐灰色 外→明褐灰色、橙色	砂若干混入 やや密	硬			刷毛目 ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	木葉底	ナデ	 (25.0)	10.3	16.3 17.0	図版50 34

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 〔 〕復元値 測定値(cm) ( ) 現存値			写真番号
第2号井戸	甕	第103図3	手担土器(甕)	第7層	1/2	内→橙色 外→褐灰色	砂若干混入 やや粗	やや硬	ロクロナデ		オサエ	オサエ	ヘラケズリ	オサエ	ヘラケズリ	オサエ	口径 器高(1.9)	底径 3.5 脚高	頸径 胴径	図版49中 34
	甕	第103図4	B I 2 (1)	第1層	1/10	内→橙色 外→にぶい橙色	砂少々多め混入 普	普	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			〔14.9〕 (6.3)		〔13.0〕	図版49上 34
	甕	第103図5	B I 1 (2)	第1層	1/10	内→浅黄橙色 外→浅黄橙色、にぶい橙色	砂少々多め混入 やや粗	軟	〃	〃	〃	〃					〔18.3〕 (7.2)		〔16.5〕	
	壺	第103図6	B II	畦畔西第1層	1/10	内→暗青灰色、灰色 外→灰色、暗青灰色	砂若干混入 密	だいぶ硬	〃	〃	〃	〃					21.1 7.7		15.5 16.1	
溝	坏	第107図1	B I a	第1号溝西端	1/4	内→黒色、灰黄色、浅黄橙色 外→浅黄橙色、灰白色	砂若干混入 かなり密	軟	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転糸切り	ヘラミガキ	〔13.9〕 4.55	〔6.1〕		
	坏	第107図2	B III	第1号 溝畦畔埋土	2/5	内→にぶい橙色、灰白 外→にぶい橙色	砂若干混入 わりと密	やや軟	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	〔12.5〕 3.45	4.5		
	坏	第107図3	B II	第1号 溝西端1層	3/7	内→にぶい橙色 外→にぶい橙色、黒色	砂若干混入 かなり密	やや軟	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〔13.4〕 4.55	6.1		
	甕	第107図4	B I	第1号溝西端	1/20	内→褐灰色、灰白色 外→灰白色、褐灰色	砂若干混入 わりと密	軟	〃	〃	〃	〃					〔19.4〕 (4.4)		〔17.9〕	
	坏	第107図5	B II a	第2号溝	1/4	内→にぶい橙色、灰黄色 外→浅黄橙色、にぶい橙色	砂若干混入 わりと密	だいぶ硬			〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	(3.35)	6.6		
	甕	第107図6	B I 1 (1)	第3号溝	1/10	内→灰白色、灰褐色 外→灰白色、灰褐色	砂若干混入 だいぶ密	やや硬	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	〃					〔25.0〕 (7.1)		〔21.9〕	
	甕	第107図7	B I 1 (1)	第3号溝	1/9	内→にぶい橙色 外→にぶい橙色	砂若干混入 わりと密	やや軟	〃	〃	〃	〃	ヘラケズリ	ロクロナデ			〔33.2〕 (12.25)		〔30.3〕	
	坏	第107図8	B II	第4号溝	2/5	内→灰色 外→灰色	砂若干混入 かなり密	相当硬い	〃	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	〃	回転糸切り	ロクロナデ	〔1405〕 4.5	〔5.6〕		
	鉢	第107図9	B I	第8号溝	1/20	内→黒色 外→にぶい橙色	砂若干混入 かなり密	やや軟					〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ	(3.15)	〔11.5〕		
	甕	第107図10	B I 1 (1)	第9号溝	1/20	内→灰白色、黒褐色 外→灰褐色、にぶい黄橙色	砂若干混入 かなり密	やや軟	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					〔27.4〕 (4.8)		〔25.0〕	
	甕	第107図11	B II	第10号溝	1/20	内→明緑灰色 外→灰色	砂若干混入 かなり密	相当硬い	〃	〃	〃	〃					〔20.5〕 (2.95)		〔19.0〕	
	甕	第107図12	B I 2 (1)	第11号溝	1/20	内→灰白色、褐灰色 外→明褐灰色、褐灰色	砂若干混入 わりと密	やや軟	〃	〃	〃	〃					〔16.8〕 (3.8)		〔15.3〕	

遺構名	器種	図版番号	分類番号	出土状況	遺存	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量 測定値(cm) 〔 〕復元値 ( ) 現存値			写真番号
ピット	坏	第113図1	BI	No.3ピット	1/8	内→黒色、灰黄色 外→にぶい橙色	砂若干混入 密	やや軟	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ			口径〔14.4〕 器高(4.05)	底径 脚高	頸径 胴径	
	坏	第113図2	BIIa	No.3ピット	1/4	内→にぶい褐色、灰色 外→暗青灰色	砂若干混入 かなり密	相当硬い	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	〔14.6〕 4.6	〔6.0〕		
	鉢	第113図3	BIIa	No.3ピット	1/10	内→黒色、にぶい黄橙色 外→にぶい黄橙色	砂かすかに混入 密	若干軟	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ			〔18.4〕 (2.0)		〔16.1〕 〔16.7〕	
	甕	第113図4	BII(1)(i)	No.3ピット	1/20	内→淡黄色 外→灰白色、にぶい黄橙色	砂かすかに混入 密	やや硬	〃	ロクロナデ							〔23.1〕 (3.5)		〔19.7〕	
	坏	第113図5	A2	第16号住ピット10	1/4	内→黒色 外→褐灰色、にぶい黄橙	砂若干混入 かなり密	やや軟	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	〔13.8〕 4.0	〔7.2〕		
	甕	第113図6	A2b	No.5ピット埋土	1/10	内→にぶい黄橙色、灰黄褐 外→にぶい黄橙色 にぶい橙色	砂若干混入 わりと密	やや硬	横ナデ	横ナデ							〔19.0〕 (3.75)		〔16.1〕	
	壺	第113図7	BIc	No.7ピット	3/7	内→にぶい橙色、橙色 外→にぶい橙色	砂若干混入 かなり密	やや軟	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ			〔14.8〕 (9.15)		〔13.6〕 〔16.4〕	
	甕	第113図8	BI1(1)	No.6ピット	1/2	内→褐灰色、灰褐色 外→明褐灰、にぶい褐色	砂若干混入 やや粗	かすかに軟	〃	〃	〃	ヘラナデ	〃	ヘラナデ			〔26.7〕 (23.0)		〔23.9〕 〔24.4〕	図版43
	坏	第113図9	BIII	No.8ピット	3/7	内→浅黄橙色 外→浅黄橙色	砂若干混入 かなり密	かすかに軟					ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	(11.5)	〔5.2〕		
表土	壺	第114図1	BII	BH03グリッド	9/10	内→灰黄色、青灰色 外→暗青灰色、灰黄色	砂若干混入 かなり密	相当硬い			ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	〃	ヘラケズリ	〃	(19.3)	19.6	6.0 17.1	図版51 34
	鉢	第114図2	BI	CE03グリッド	1/2	内→黒色、明赤褐色 にぶい橙色 外→にぶい褐色、橙色	砂若干混入 わりと密	やや軟			〃	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転糸切り	ヘラミガキ	(5.1)	7.0		
	坏	第114図3	BIa	FA59グリッド	3/4	内→黒色、橙色 にぶい黄橙色 外→にぶい橙色、橙色	砂若干混入 かなり密	やや軟	ロクロナデ	ヘラミガキ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	13.7 4.95	6.0		
	坏	第114図4	BIe-H1	FD-56グリッド	1/2	内→黒色 外→にぶい黄橙色、 にぶい橙色	砂微量混入 かなり密	やや軟	〃	〃	〃	〃	ヘラケズリ	〃	ヘラケズリ	〃	13.9 4.55	5.75		
	坏	第114図5	BIII	GE50グリッド	1/2	内→赤橙色、にぶい橙色 外→浅黄橙色、黄灰色、 にぶい橙色	砂若干混入 かなり密	かすかに軟	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	〔13.3〕 3.6	5.25		
	高台付坏	第114図6	BI①	FD-56グリッド	3/5	内→黒色、にぶい黄橙色 外→にぶい橙色 にぶい黄橙色	砂若干混入 かなり密	やや軟	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ	菊花状ヘラ刻み	ヘラミガキ	〔16.0〕 (6.7)	〔6.7〕		
	蓋	第114図7	BII	GE-53グリッド	1/5	内→灰黄褐色 外→黄灰色	砂微量混入 かなり密	相当硬い	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	〔7.5〕 1.95	〔14.1〕		

実測図番号	出土遺構名	器種（推定したものを含む）	測定値 長さcm	巾 cm	厚さcm	横断面形	備考
第68図 3	第18号 住号跡	銛	9.2	0.6	0.7	正方形	
〃 4	〃	鋤の刃先	5.4	1.9	0.8	二等辺三角形	基の一部のみ残す
〃 5	〃	錐	4.0	1.7	0.5	長方形	
〃 6	〃	釘	3.0	0.6	0.6	楕円形	両端を欠く
〃 7	〃	鉸具	5.3	4.3	0.9	円形	刺鉄の部分は付着したまま錆化
〃 8	〃	丸のみ	3.7	1.6	0.2	横C字形	のみの一部だけ
〃 10	〃	はばき金具	3.6	1.1	0.2	長方形	
〃 11	〃	はばき金具	4.0	1.2	0.4	長方形	鉄地金銅製
第73図 8	第20号 住居跡	木工具の基部	16.1	2.2	1.1	長方形	
〃 9	〃	釘	12.2	0.7	0.6	正方形	
〃 10	〃	釘	10.0	0.8	0.7	正方形	
〃 11	〃	釘	5.1	0.7	0.6	正方形	
第75図 6	第21号 住居跡	釘	8.9	0.7	0.8	方形	頭部も残存する
〃 7	〃	釘	6.3	0.7	0.7	方形	
〃 8	〃	釘	4.5	0.7	0.8	方形	
第81図 8	第23号 住居跡	刀子	現存23.1 刃 16.2	刃部 2.1 茎1.1～1.6	背 0.6	二等辺三角形	刃部と茎の先端欠く
第95図 1	第1号 井戸	不明	10.6	0.4	0.5	円形	U字形の細長い棒、両方とも先端を欠く
〃 2	〃	平のみ	15.4	1.9	1.7	正方形	先端やや薄い
〃 3	〃	釘	8.0	0.5	0.6	正方形	ほぼ完形品
〃 4	〃	釘	5.9	0.6	0.7	正方形	両端を欠く
第103図 7	第2号 井戸	丸のみ	全長 5.6 身部 4.2	刃部 1.2	背 0.6	二等辺三角形	
第108図 1	第1号方形溝状遺構	釘	3.8	0.8	0.8	正方形	
〃 2	第2号方形溝状遺構	不明	4.2	1.2	0.8	長方形	細長い棒状のもの
〃 3	〃	釘	3.5	0.7	0.7	正方形	頭部が欠けている
〃 4	第1号 溝	釘	3.2	0.7	0.6	正方形	両端が欠けている
〃 5	〃	釘	2.8	0.6	0.6	正方形	先端が欠けている
〃 7	第6号 溝	釘	3.7	0.8	0.6	正方形	先端が欠けている
〃 11	第9号 溝	鎌	2.6	2.5	背 0.6	二等辺三角形	一端を欠いている
〃 12	〃	刀子	5.7	1.3	背 0.5	二等辺三角形	刃部の一部
〃 9	第10号 溝	釘	5.0	1.0	1.1	正方形	先端が欠けている
〃 15	〃	不明	3.9	大径 1.9 小径09～1.2	0.6	環形	把元と考えられる
〃 13	No.3 ピット	刀子	15.2	刃部 1.3	背 0.5	二等辺三角形	刃部端を欠く
第115図 1	出土地不明	鉄鏃	10.5	7.4	1.0	長方形	4面とも加工痕みられず
〃 3	〃	釘	6.9	1.0	0.9	長方形	角釘の完形品
〃 4	〃	刀子	5.5	0.9	背 0.4	二等辺三角形	刃部片である

土 製 品

実測図番号	出土遺構名	器種	測定値 長さcm	測定値 巾cm	測定値 孔径cm	形状	備考
第11図 5	第1号 住居跡	土錘	5.4	2.1	0.7	中央部がやや脹らむ管状	両先端の一部が欠けている
第28図 8	第8号 住居跡	〃	5.0	2.5	0.4	〃	部分的にミガキが入る
第35図 14	第10号 住居跡	〃	3.1	1.9	0.5	〃	全体の$\frac{2}{3}$が欠けている
第39図 8	第11号 住居跡	土玉	0.6	1.0	0.1	球形	
第39図 9	〃	〃	0.9	1.0	0.1	〃	
第39図 10	〃	〃	0.8	1.0	0.1	〃	
第39図 11	〃	〃	1.0	1.2	0.1	〃	
第52図 12	第13号 住居跡	〃	2.1	2.5	0.3	〃	部分的にミガキが入る
第52図 14	〃	紡錘車	1.7	4.9	0.6	截頭円錐形	部分的にミガキが入る
第60図 12	第16号 住居跡	土錘	5.7	2.2	0.4	中央部がやや脹らむ管状	部分的にミガキが入る
第62図 10	第17号 住居跡	〃	3.5	1.6	0.3	〃	ほぼ中央より先かけている
第79図 9	第22号 住居跡	〃	5.7	2.2	0.4	〃	
第81図 9	第23号 住居跡	〃	6.1	2.4	0.4	〃	部分的にミガキが入る
第95図 5	第1号 井戸	〃	4.9	2.0	0.5	〃	部分的にミガキが入る
第108図 6	第5号 溝	〃	4.0	1.7	0.3	〃	部分的にミガキが入る
第108図 8	第10号 溝	〃	3.5	1.5	0.3	〃	
第108図 10	第10号 溝	〃	5.2	2.2	0.4	〃	先端の一部が欠けている
第108図 14	No.5 ピット	〃	5.0	2.1	0.3	〃	

石 製 品

実測図番号	出土遺構名	器種	測定値 長さcm	測定値 巾cm	測定値 厚さcm	形状（平面形・断面形）	石質	備考
第18図 3	第4号 住居跡	砥石	7.9	6.0	4.4	四角形	斜長流紋岩質凝灰岩	四面を使用している
第28図 9	第8号 〃	〃	8.3	7.7	3.7	四角形	中粒質アルコース砂岩	二面を使用している
第32図 4	第9号 〃	〃	5.2	3.9	2.4	四角形	凝灰質の砂岩	四面を使用している
第40図 12	第11号 〃	〃	6.7	5.4	3.2	四角形	淡緑色石質凝灰岩	二面を使用している
第45図 2	第12号 〃	〃	7.2	5.3	2.1	五角形	淡緑色石質凝灰岩	三面を使用している
第52図 13	第13号 〃	紡錘車	2.3	2.5	(1.0)	截頭円錐形	安山岩の多孔質溶岩	
第53図	〃 〃	砥石	16.1	6.9	5.9	四角形	輝石安山岩の多孔質溶岩	四面を使用している
第60図 11	第16号 〃	棒状筆記具	2.0	0.8	0.6	細棒	長石	両先端に使用痕有り
第62図 11	第17号 〃	紡錘車		11	5.5	截頭円錐形	複輝質安山岩の多孔質溶岩塊	
第68図 9	第18号 〃	切子玉	1.4	1.3	(0.3)	算盤玉	水晶	上下で12面をもつ
第95図 6	第1号 井戸	勾玉	5.9	1.1	0.7	C字形	フリント	
第115図 2	不明	砥石	7.1	2.8	1.1	長方形	細粒凝灰岩	四面を使用している

V　遺構と遺物に関する予察と問題点

〔1〕検出遺構

1　竪穴住居跡

検出された住居跡25棟のうち23棟を精査している。以下、項目ごとに各住居の構造を比較して簡単にふれてみたい。

〔平面形〕

いずれの住居跡も方形を基調としており、ほぼ正方形のものと長方形のものとが認められる。

（1）正方形：7号・9号・11号・12号・15号・16号・17号・19号・21号の9棟の住居跡

（2）長方形：1号・2号・3号・4号・5号・6号・8号・10号・13号・14号・18号・20号22号・23号の14棟の住居跡

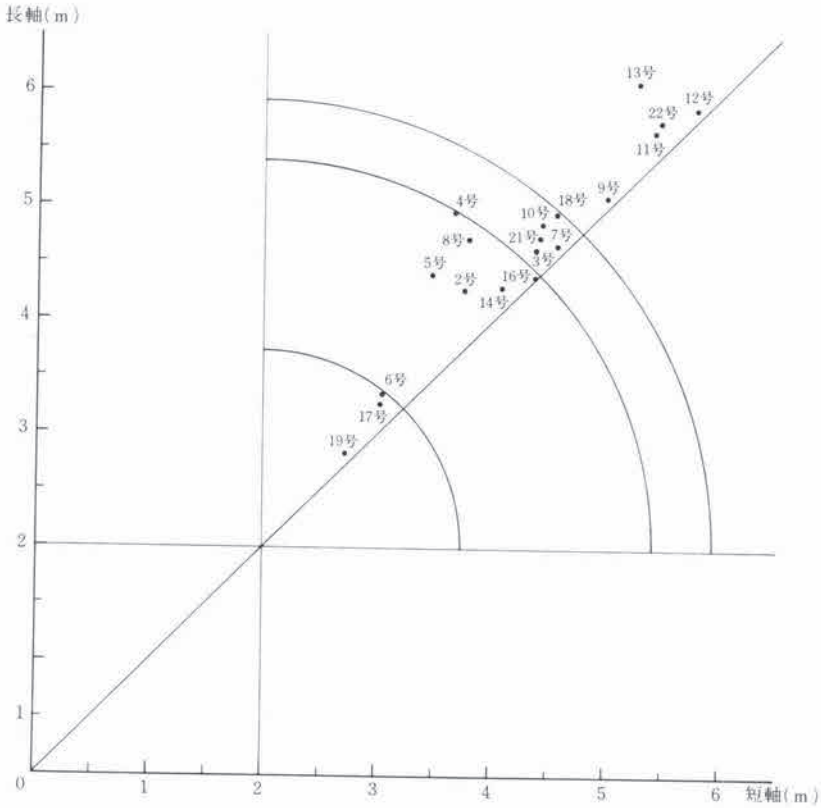
〔規模〕（第116図）

床面積がほぼわかるものについて規模を比較すると、ある程度の類似性がみられる。

（1）床面積が10m²未満のもの：6号・17号・9号の各住居跡

（2）床面積が10～17m²±のもの：2号・4号・5号・8号・14号・16号の住居跡

（3）床面積が



第116図　住居跡の規模

17～21㎡±のもの：３号・７号・10号・18号・21号の住居跡

（４）床面積が23㎡以上のもの：９号・11号・12号・13号・22号の住居跡

以上の４分類のうち、（１）を小規模、（２）・（３）を中規模、（３）を大規模の住居跡として大別してある。

〔壁〕

壁は床よりわずかに外傾して立ちあがり、床と接する部分では、やや丸くなっている。すべて地山をそのまま壁としており、壁に伴う施設は検出されていない。

〔床〕

地山をそのまま床面としているものと床面下に掘り方を有し、上部を埋め戻して整地しているものとがある。後者には床面の高さが砂層の部分に相応し、床面の強化のため掘削地形を行なう必然性を持つものが多い。

地山をそのまま床面とするもの：２号・３号・４号・５号・７号・８号・10号・23号住居跡

床面下に掘り方を有するもの　：１号・６号・９号・11号・12号・13号・14号・15号・16号・17号・18号・19号・20号・21号・22号住居跡

地山をそのまま床面とするもののなかで、23号住居跡はやや特異である。Ｅ区以南の住居跡がすべて床面下に掘り方をもつものに対し、南端に位置する当住居のみが掘り方をもたない。これは、Ｅ区以南の他の住居が床面のレベルをⅢa層のシルト質の砂層にもつものに対し、23号住居跡が位置する付近ではⅢa層薄くてやや低くなることに起因するものと推定される。

床面下に掘り方を有するもののなかで、１号・６号・９号・11号・12号・13号の各住居跡は床面の高さが砂層に達しないものである。これは、住居の構築法そのものに掘削地形を行なうべき要因が存在したものと思われるが、なかでも、９号・11号・12号・13号の４棟の住居跡にみられる掘り方は、該期の普遍的な通例として行なわれたものである可能性が強い。また、掘り方には全面的に行なうものと部分的に行なうものとに分けられるが、前者がほとんどを占め、後者は第22号の１例を数えるにすぎない。

床面は、カマドの周辺などでやや堅くしまっているが、ほとんどの住居跡が、全体に柔かく平坦な面をなすものである。間仕切りに伴う施設とか周溝は一切検出されていない。

〔柱穴〕（第117図）

柱穴を明確に確認できた住居跡は全体の約半数である。柱穴を確認できなかった住居跡は、住穴状のピットは検出されているものの、配置の規則性や規模の斉一性から大きくはずれるため柱穴として断定できないものと、全く検出されなかったものとがある。

明確な柱穴、ないしは柱穴となりえるピットを有する住居跡に限って、その配置形態をみると以下のように類別される。

A類：4個の柱穴が各壁よりほぼ等距離に置かれ、住居の方形プランのおよそ対角線上に乗るもので、住居の平面形・柱穴の配置形とも正方形を呈する。（2棟）

B類：4個の柱穴が住居跡の短辺にほぼ等間隔で寄るもの。

B_1類―短辺との間にやや距離をおくもので、住居の平面形・柱穴の配置形とも長方形を呈する。（2棟）

B_2類―短辺と2個がほぼ接するもので、柱穴の配置形が台形に近い形を呈する。（1棟）

C類：4個の柱穴のうち、2個が壁際に近接あるいは密着するもの。

C_1類―密着する壁が住居の長辺の一方にあり、柱穴の配置形が正方形を呈するもの。（1棟）

C_2類―密着する壁が住居の短辺の一方にあり、柱穴の配置形が長方形を呈するもの。（2棟）

D類：4個の柱穴のうち、2個が壁の1辺から大きくはなれるもの。

D_1類―大きく離れる壁がカマド構築壁と相対するもの。（1棟）

D_2類―大きく離れる壁がカマド構築壁と同一のもの。（1棟）

E類：4個の柱穴が住居の2辺に近接するもの。（1棟）

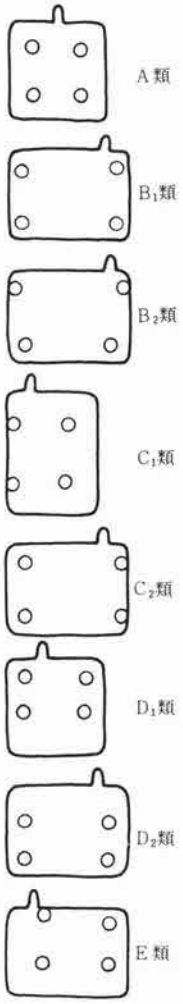
A類には、11号・12号の各住居跡が該当する。これらの住居跡は床面積が30m²前後で比較的規模が大きく、北壁にカマドが付設されるものである。12号住居跡は、掘り方状の掘り込み地形をもつもので、明確な柱あたりを確認できた。

B_1類には、3号・23号の住居跡がある。柱穴の配置形が住居の長方形プランと相似形とはならず、相対的にやや長軸の長い長方形を呈するものである。カマドの付設位置はそれぞれ異なるが、いずれも長辺の左寄りに設置されており、中程度の規模をもつ。

B_2類には、22号住居跡がある。B_1類とはやや異なり、2個の柱穴が住居の両短辺に近接するものである。カマドは東辺の右寄りに付接されている。床面積が30m²弱の大形のものである。

C_1類には13号住居跡がある。2個のピットが西辺に密着し、柱穴の配置形が正方形を呈するものである。カマドは北壁のやや左寄りに付設されている。床面積が30m²を超える大形のものである。

C_2類には10号・21号の住居跡がある。いずれも南北に長い長



第117図
柱穴類別模式図

方形を呈し、南辺に２個の柱穴が接するものである。東辺の右寄りにカマドが付設され、中程度の規模をもつ。

D_1類には９号住居跡がある。２個の柱穴がカマド構築壁の対辺である南壁から大きく離れるもので、柱穴の配置形は長方形を呈する。カマドは北壁のやや左寄りに付設されており、床面積が24㎡で比較的大形のものである。

D_2類には18号住居跡がある。２個の柱穴がカマド構築壁である東壁から大きく離れるもので柱穴の配置形は長方形を呈する。カマドは東壁の右寄りに付設されており、床面積が20㎡強の中程度の規模をもつ。

Ｅ類には14号住居跡がある。４個のピットが東壁と南壁に寄るもので、柱穴の配置形がおおむね正方形に近くなる。カマドは東壁の東寄りに設置されている。

以上の分類に含まれないものは、規模の斉一性・配置の規則性などから柱穴とは断定できないものの、いくつかの柱穴状のピットを有する住居跡がほとんどである。このなかで、第19号住居跡からは柱穴状ピットが全く検出されていない。当住居跡は極めて小形のものであり、他の住居跡とはやや性格が異なるものと思われる。

〔カマドの付設位置〕（第118図）

カマドの付設位置は、住居跡の北辺・東辺・南辺の３部位に分けられ、西辺に付設されるものは検出されていない。ここでは、北辺に付設されるものをＡ群・東辺のものをＢ群・南辺のそれをＣ群として大別した。

Ａ群：Ａ群に属す住居跡には９号・11号・12号・13号の各住居跡がある。なかでも、９号・11号・13号の住居跡はＮ－21°～13°－Ｗの間に方位をもち、ほぼ主軸方向が一定する。12号住居跡はやや東に偏し、Ｎ－7°－Ｅの方位をもつ。カマドの付設位置は、11号住居跡が北壁の中央で、９号・12号・13号の住居跡はいずれも北壁中央やや西寄りに位置する。

これらの住居跡は辺長が５ｍを超え、床面積が24～33㎡になる大形のもので、遺跡のほぼ中央に位置する。

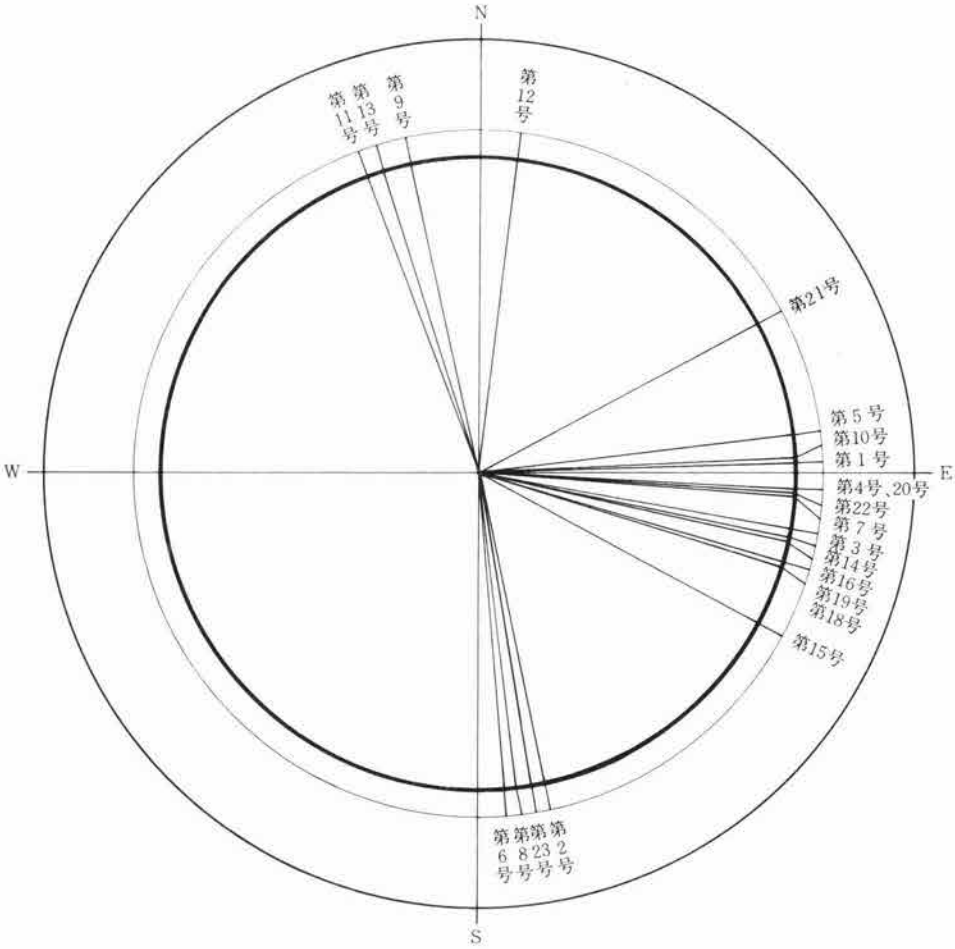
Ｂ群：Ｂ群に属す住居跡には、３号・４号・５号・７号・10号・14号・15号・16号・17号・18号・19号・20号・21号・22号の各住居跡があり、東壁のなかでの付設位置の違いによって次のように細分される。東壁のほぼ南端に位置するもの：16号住居跡、東壁の南寄りに位置するもの：４号・５号・10号・18号・20号・22号の各住居跡、東壁のやや南寄りに位置するもの：１号・15号・21号住居跡、東壁のほぼ中央に位置するもの：７号・19号住居跡、東壁の北寄りに位置するもの：３号・14号住居跡

これらの住居跡は、22号住居跡が大規模で19号住居跡が極端に小規模になるのを除けば、長軸長が５ｍ未満の中程度の規模をもつ。15号と21号住居跡を除き、Ｅ－7°－Ｎ～Ｅ－17°－Ｓの

間に軸方位をもつ。15号住居跡はやや南に偏り、E－28°－S、21号住居跡は北に偏りE－29°－Nの軸方位をもつ。

C群：C群に属す住居跡には2号・6号・8号・23号の住居跡があり、南壁の東寄りに位置するものと南壁の西寄りに位置するものとがある。前者には2号･6号･23号の住居跡が該当し、後者には8号住居跡がある。6号住居跡は床面積が9㎡弱の小規模なものであるが、他の3棟は長軸長が4mを超える中程度の規模をもつ。主軸方向はいずれも近似しており、すべてS－5°～12°－Eの間に入る。

以上の分類に含まれないものに第17号住居跡があり、カマドが検出されていない。未調査部



第118図　カマドの主軸方向

分をも含んでいるため、南壁ないしは西壁にもつことも考えられるが、カマドをもたないものである可能性が強い。

〔カマドの構築方法〕

〈燃焼部側壁〉　側壁の構築方法にはつぎの３つのタイプに分類される。側壁はいずれも壁につくりつけたものである。

１．地山のシルトを積み上げて構築するもの

２．部分的に石を芯材として利用し、地山のシルトを積み上げて構築するもの

３．土器を芯材として利用し、地山のシルトを積み上げて構築するもの

１は大部分の住居跡にみられる構築法で、IIa層ないしIIb層のシルト質土をそのまま転用しており、異質の粘土等を利用した痕跡は一切認められない。２は焚口部分に利用するものと、煙道部との接続部分に利用するものとに分けられる。前者には３号・22号の住居跡があり、後者には11号住居跡がある。３には12号・13号の住居跡があり、甕を倒位ないしは正位の状態に据えて芯材としている。左右の側壁に２～３個づつ据えている。

〈燃焼部〉　燃焼部の構築法には、底面下に床面下の掘り方とは異なる掘り方地形を施すものと、そのまま床面を燃焼部としているものとがある。前者が圧倒的に多く、後者は少ない。掘り方は燃焼部に限らず側壁部分をも含めて掘られている。掘り方の有無が不明のものは、燃焼部の立ち割りを行なわなかったものがほとんどである。

燃焼部下に掘り方をもつもの：１号・３号・４号・６号・11号・12号・13号・15号・16号・18号・22号住居跡

床面をそのまま燃焼部とするもの：２号・５号・７号・８号・10号・14号・19号住居跡

掘り方の有無が不明のもの：９号・14号・21号・23号住居跡

また、燃焼部の形態には床面より若干掘り凹められているものと、床面とほぼ水平になるものとがある。後者には３号・５号・８号・16号・21号・23号住居跡があり、前者が卓越する。さらに、前者の燃焼部を掘り凹めてあるもののなかには、燃焼部が極端に長くて、煙道部入口に向ってゆるく上昇するものもみられ、１号・18号・20号の住居跡がこれに該当する。

〈煙道部〉　煙道部の平面的な形態には、**A**―溝状のもの・**B**――部くり抜きのもの・**C**―煙道をもたないものとに３分される。

Ａの形態を示すものがほとんどを占めており、煙道部の判明する18棟中15棟がこれに類別される。燃焼部から煙出部をも含めた細部の形態によって以下のように細分される。

ＡＩ類：燃焼部が極端に長くて煙道部入口に向かってゆるく上昇し、火床面は床面より若干掘り下げてあるもの。煙道部の形態によって、水平に移行して煙出部と段差をもって接続するもの（ＡＩ１類―18号・20号住）と、燃焼部から煙道部中央付近まで連続して立ちあがり、いった

第5表　住居跡一覧表

	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 床面積(m²)	主柱穴	カマド 付設場所	カマド 方向	カマド 燃焼部	カマド 燃焼部側壁	カマド 煙出部ピット	カマド 支脚	カマド 燃焼部から煙出部にかけての形態	掘り方の有無	貯蔵穴状ピット(長径×短径×深さ)cm	重復関係
1号住居跡	長方形	南北6.62×東西不明		不明	東壁やや南寄り	E－ 2°－N	かなり長く上方へ向って傾斜する。掘り方有。	地山のシルトの積み上げ。	有	有(?)ピットのみ		有	178×152×58 75× 75×32 178×152×58	第1号溝、第3号住居跡より旧い。
2号 〃	長方形	東西 4.3×南北 3.7	15.35	不明	南壁の東寄り	S－12°12′－E	掘り方 無	〃	不明	無	不明	無	45×45×30	第1号溝より旧い。
3号 〃	長方形	東西4.37×南北4.63	18.79	4	東壁の北寄り	E－ 9°50′－S	〃 有	部分的に石を芯材として利用し地山のシルトを積み上げる。	有	有(石)		無	なし	第1号住居跡より新しい。
4号 〃	長方形	南北4.93×東西3.65	16.46	不明	東壁の南寄り	E－ 2°30′－S	〃 有	地山のシルトの積み上げ。	有	無		無	72×64×30	第1号溝より旧い。
5号 〃	長方形	南北4.40×東西3.46	14.24	不明	東壁の南寄り	E－ 7°15′－N	〃 無	〃	有	有(石・土器)		無	68.5×54.5×30	第6号住居跡より新しい。
6号 〃	長方形	東西3.35×南北3.03	8.83	不明	南壁の東寄り	S－ 5°10′－E	〃 有	〃	有	有(石・土器)		有	41×41×31	第5号住居跡より旧い。
7号 〃	正方形	東西4.66×南北4.54	20.83	不明	東壁ほぼ中央部	E－ 3°30′－S	〃 有	〃	有	無		無	114×110×55	第9号住居跡より新しく2号溝より旧い。
8号 〃	長方形	東西4.71×南北3.76	16.12	不明	南壁の西寄り	S－ 7°10′－E	〃 無	〃	不明	無	不明	無	87×82×40	
9号 〃	正方形	南北5.08×東西4.99	23.91	4	北壁やや西寄り	N－12°30′－W	〃 無	〃	有	無	不明	有	不明	第7号住居跡、第2号溝より旧い。
10号 〃	長方形	南北4.85×東西4.42	19.14	4	東壁の南寄り	E－ 3° －N	〃 無	〃	有	有(石)		無	95×89×37	第3号溝より旧い。
11号 〃	正方形	南北5.68×東西5.40	28.03	4	北壁の中央部	N－20°30′－W	〃 有	石を芯材として利用し、地山のシルトを積み上げる。	有	無		有	なし	第3号溝より旧い。
12号 〃	正方形	南北5.88×東西5.76	33.06	4	北壁やや西寄り	N－ 7° －E	〃 有	土器を芯材として利用し、地山のシルトを積みあげる。	有	有(石)		有	なし	
13号 〃	長方形	南北6.07×東西5.25	31.06	4	北壁やや西寄り	N－17°30′－W	〃 有	土器を芯材として利用し、地山のシルトを積みあげる。	有	無		有	なし	
14号 〃	長方形	南北4.30×東西4.08	16.14	4	東壁の北寄り	E－11°30′－S	〃 無	地山のシルトの積み上げ。	有	無		有	140×83×19 157×67×20	第16号住居跡より新しい。
15号 〃	正方形	不明	不.明	不明	東壁やや南寄り	E－28° －S	〃 有	〃	有	無		有	85×85×63	第17号住居跡より旧い。
16号 〃	正方形	南北4.38×東西4.32	17.02	不明	東壁の南端	E－12° －S	〃 有	〃	無	無		有	不明	第14号住居跡、第18号住居跡より旧い。
17号 〃	正方形	東西3.24×南北3.01	9.05	なし								有	95×88×40.5	第15号住居跡より新しい。
18号 〃	長方形	南北4.95×東西4.53	21.22	4	東壁の南寄り	E－16°50′－S	かなり長く、やや上方へ傾斜している。掘り方有。	地山のシルトの積み上げ。	不明	無		有	76×74×60 不明×70×39 94×不明×40.5	第16号住居跡より新しい。
19号 〃	正方形	東西2.82×南北2.73	7.12	なし	東壁ほぼ中央部	E－16° －S	床面より高い壇の上に構築される。掘り方無。	〃	無	有?(石)		有	不明	
20号 〃	長方形	?	?	不明	東壁の南寄り	E－ 2°30′－S	かなり長く、上方へ向って傾斜。掘り方有。		有	無		有	103×103×26	第5号溝より旧い。
21号 〃	正方形	南北4.74×東西4.40	19.20	4	東壁やや南寄り	E－28°30′－N	掘り方の有無不明。	地山のシルトの積み上げ。	有	無		有	76×61×18	
22号 〃	長方形	南北5.74×東西5.44	29.40	4	東壁の南寄り	E－ 8° －S	掘り方 有	部分的に石を芯材として利用し地山のシルトを積み上げる。	無	有(石)			100×73×32 108×89×20	
23号 〃	長方形	東西3.73×南北不明		4	南壁の東寄り	S－10° －E	掘り方の有無不明。	地山のシルトの積み上げ。	有	無	不明		23×21×17	第9号溝、第10号溝より旧い。

ん急激に下ってそのまま水平に進んで煙出部と段差をもって接続するもの(ＡＩ２類―１号住)とに分けられる。

ＡⅡ類：燃焼部が床面より若干掘り下げており、煙道部に立ちあがってつながるもの。煙道部の形態によって、水平に移行して煙出部と段差をもって接続するもの（ＡⅡ１類―４号・10号・14号・15号住)、ゆるく上昇して煙出部と段差をもって接続するもの（ＡⅡ２類―７号住)、ゆるく下降して煙出部と段差をもって接続するもの（ＡⅡ３類―６号住)、およびやや急激に下降して煙出部と段差をもたずに接続するもの（ＡⅡ４類―13号住）などに分けられる。

ＡⅢ類：燃焼部が床面より若干掘り下げており、煙道部とはなめらかにつながるもの。煙道部は、水平に移行して煙出部と段差をもって接続するもの（ＡⅢ１類―12号住）に限られる。

ＡⅣ類：燃焼部が床面とほぼ水平になっており、煙道部とは下ってつながるもの。煙道部は、水平に移行して煙出部と段差をもって接続するもの（ＡⅣ１類―21号住）に限られる。

ＡⅤ類：燃焼部が床面とほぼ水平になっており、煙道部とは立ちあがってつながるもの。煙道部の形態によって、ほぼ水平に移行して煙出部と段差をもって接続するもの（ＡⅤ１類―４号住)とやや急激に上昇して煙出部が検出されないもの（ＡⅤ２類－16号住）とに分けられる。

ＡⅥ類：燃焼部が床面とほぼ水平になっており、煙出部とはなめらかにつながるもの。煙道部は、水平に移行して煙出部と段差をもって接続するもの（ＡⅥ１類―３号住）である。

Ｂ類：Ｂの形態を示すものは１例を数えるのみである（11号住)。 壁より中途までは半円状に掘り込んで中央を溝状に掘り下げたあと、地山をトンネル式に掘って煙出部で開口するものである。煙道部底面はほぼ水平になっており、煙出部と段差をもたない。

Ｃの形態は２つの住居跡で確認されている。燃焼部の形態はそれぞれかなり異なっている。

ＣＩ類：燃焼部が床面とほぼ水平になっており、壁の部分で急激に立ちあがるもの(22号住)。

ＣⅡ類：燃焼部（火床部）が床面より高い壇の上に構築され、側壁と火床部を除いては床面と同じ高さになって壁の部分で急激に立ち上がるもの（19号住)。

以上のカマドの類別に含まれないものは、すべて遺構の重複関係によって破壊を受け、詳細な分類が不可能のものである。なお、燃焼部において支脚が検出されているものと支脚が検出されなかったものとがある。前者は８棟の住居跡で確認されており、石と土器とを併用するものと石だけのものとに分けられる。

〔貯蔵穴状ピット〕

貯蔵用の施設であると断定できるものは検出されていないが、比較的規模が大きく配置個所に規則性をもつものを貯蔵穴状のピットとした。

貯蔵穴状のピットはほとんどの住居跡で検出されている。同種のピットが全く検出されなかった住居跡は数棟にすぎず、そのほとんどが北壁にカマドをもつ住居跡であるというきわだっ

た特徴を示している。配置場所はカマドの両脇、ないしはカマド構築壁のコーナー部分にあるものがほとんどを占める。

2　井戸跡

井戸跡は２基検出されている。地下施設の構築方法はそれぞれ異なり、出土遺物からみて時期も区分されうるものであり２基の併存は認め難い。

１号井戸跡は地下設備が井籠組の横側板で構築されるものである。井戸の掘形は円形を呈し、２段に分けて掘り込まれている。底には厚さ約10cmの砂を敷いて井戸枠を据えている。井戸枠は底部に横板で方形の基底部を作り、その外側に上部の側板を井籠組にして積み上げているもので、側板は基底部をも含め５段残存する。基底部を除く上部の４段の側板は両端の上下端部を相欠きにして上下を重ねたものである。また、側板の一部には柄穴や刳り込み等の仕口が認められるものもあり、以前に建築部材として利用されたものと推定される。

これに対し、２号井戸跡は地下施設が刳抜式の井筒で構築されるもので、巨木の内部を円形に刳抜いて作られる。掘形は上段が隅丸方形・中段・下段が円形の３段掘りによっており、上段と中段には掘り方が検出されている。底部は砂礫層になっており、上部に薄く砂を敷いて井筒を据えている。井筒の残存状況は不良で、最大現存高でも32cmを計るにすぎずほとんどが約15cmほどの高さでしか遺存しない。内外両面に手斧痕が観察される。

以上の２基の井戸跡はＤ区のやや南寄りの場所に近接して位置し、集落（南北の範囲に限る）のほぼ中央部にあたる。井戸の周囲は住居跡の分布密度が比較的希薄であり、集落内における広場的な〝場〟の形態を示している。これは、とくに第１号井戸の使用時において顕著にみられ、当井戸跡と併存するものと思われる各住居跡はかなり距離をおいて南北に配置される。こうした配置形態は、井戸の使用が個々の住居に居住する人間にかかわるものではなく、集落内において共同運営されていたことを窮わせるものである。

次にこれらの井戸の使用年代についてであるが、その出土遺物からかなりその時期を限定することが可能である。まず、第２号井戸跡は、井筒内の最底部よりＡ類の甕、およびＡ類の平底坏が出土している。とくに甕は汲水用に使用したと推定されるものであり、これらの遺物が編年される時期に当井戸の廃止年代を考えたい。当然のことながら、井戸構築時にかかわる掘り方の人為的堆積層からはＡ類の土器以外は出土しない。埋土の最上層よりは坏ＢＩｃ類が坏ＢＩａ類を少量混えて集中的に出土する。

第１号井戸跡では、井戸を構築する際に人為的に積んだものである井戸枠外の礫層内より坏ＢⅡｂ類・坏ＢＩｃ類が小片で出土している。当井戸の構築時期はこれらの土器と併行関係にあるものと思われる。また、堆積土内から出土する土器は細片に限られるが、下層よりは坏ＢＩａ

類・坏BⅡc類・坏BⅡa類・坏BⅢ類、甕BⅠ1類・甕BⅡ類などが出土し、最上層からは須恵系土器と思われる極端に器高の低い坏BⅢ類が出土する。

以上のことから、第2号井戸はBⅠ類土器の製作にロクロ技術が導入されるころには確実に廃止され、ロクロ技術が普及した直後に第1号井戸が構築されるという関係を指摘することが可能であり、第2号井戸から第1号井戸へはあまり長い間隙を置かずに移行したものと推定される。

岩手県下で該期の集落に伴う井戸跡の発見例は非常に少なく、数例を数えるにすぎない。北上川対岸の水沢市胆沢城跡では2基検出されており、1基は横板を5段にして井籠組した井戸枠をもつもので、11世紀代のものとされている。他の1基は半截した丸太材を組んで井戸枠としたものである。(注1) 水沢市林前遺跡は9世紀初頭～中葉に中心をおく集落であり、地下施設を伴わない地山井筒の井戸跡が1基検出されている。(注2) また、本遺跡と同じ江刺平野上の微高地面に立地する落合Ⅲ遺跡では9基の井戸跡が検出されており、地山をそのまま井筒としたもの4基、隅柱を立てて横桟をわたした後に縦板を方形に組み込んだ井戸枠を2段に重ねあわせたもの1基、曲げ物井筒と前記の方形井戸枠を組み合わせたもの2基の3形態に分けられる。所属時期は不明なものが多く、中世にわたる可能性を示唆している。(注3)

最後に、本遺跡において井戸跡が検出されたことの意味について簡単にふれておきたい。既に、平安時代の集落を構成する要素に井戸跡が加わったものとする指摘があり、(注4) このことは一応蓋然性をもつものと言える。ただ平安時代に中心をおく集落のすべてに井戸を伴うものではなく、むしろそうした例は少ない。本遺跡の場合は、集落の立地する地形環境にその要因を求めたい。第Ⅰ章で既述したごとく、本遺跡は旧河川の洗流に残された沖積台地の微高地面に立地する。こうした微高地面は、旧河川の氾濫によって造成された二次堆積の微高地面よりも構成層が古くなっており、地下水位が深く、しかもその水質は劣悪なものである。(注5) このことが深さ3m±というかなり深い井戸を必要とした第1の要因と思われる。

注1　水沢市教育委員会　1978　『胆沢城跡―昭和52年度発掘調査概報―』

注2　水沢市教育委員会　1979　『林前遺跡―区画整理に伴なう範囲確認調査―』

注3　岩手県埋蔵文化財センター　1979　「落合Ⅲ遺跡」『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』

注4　前出注2『林前遺跡』

注5　昭和50年度の発掘調査中、飲用水の必要から専門の試錐会社に委託してDA06グリッド付近に井戸を掘っている。この際、飲用に耐える水を得るために4m弱のボーリングを必要としており、隣接する微高地面と明確な違いがあることを指摘されている。

〈参考文献〉山本　博　1970　『井戸の研究』　綜芸社

3　溝跡

溝跡は合計11条検出されている。特にG区に集中しており11条中6条を数える。2号溝を除き、すべて調査区外に延びており、その首尾が明らかにはなっていない。したがって、これらの溝の性格・機能にまで言及するには多少の無理が生じるが、若干の説明を加えてみたい。

規模：形能　溝の規模（幅・深さ）からは、大形のもの（1号溝・10号溝）、中形のもの（4号溝・6号溝・9号溝）、および小形のもの（2号溝・3号溝・5号溝・7号溝・8号溝・11号溝）とに3分される。

平面的な形態には、直線状のものがほとんどを占めるが、なかにはやや蛇行するもの（4号溝）、「く」の字状に屈曲するもの（8号溝）などがみられる。溝の走行軸は、西―東のもの（1号・3号・9号・10号溝）、北西―南東のもの（2号溝）、西北西―東南東（4号溝）、北北東―南南西のもの（5号溝）西南西―東北東のもの（6号・7号溝）、西南西―東北東～南南西―北北東のもの（8号溝）、南南東―北北西のもの（11号溝）などに分けられる。

性格　大形の1号・10号溝は集落の北端と南端に配置され、走行軸、規模とも類似している。集落の外郭を区切る一種の境界溝とか排水溝としての機能が考えられる。ただ、溝底面の起伏状態や堆積土の観察から排水溝とする積極的な根処に乏しく、ここでは濠として外郭を囲繞する区画線と考えたい。それに排湿の機能を補助的に負わせたものであろう。

中形の溝のうち、9号溝は10号溝に近接して位置し、走行中軸も一致しており1号溝・10号溝と有機的な関連をもつものと思われる。4号溝は位置、走行軸が他の溝と異なり、やや蛇行する特異な形態を示している。性格を規定する資料は明らかではないが、1号・9号・10号溝と時間的に平行関係にある可能性が強い。

小形の溝のうち、2号・3号・5号の溝跡は深さ・埋土等からみて後世の掘り込みであると考えられる。ほかの6号・7号・8号・11号の溝はG区に集中しており、走行軸は、平行ないしは直交の極めて共通した関係にあり、規模も類以する。ただ、それぞれは互いに重複しており、7号溝が最も旧く、11号→6号・8号溝という関係にある。これらの溝の性格は排水溝、ないしは何らかの地境溝など考えられるものの判然としない。

先後関係　以上の11条の溝跡を重複関係、配置形態等から一定の推測を混えて先後関係を検討すると次のような関係を指摘できる。まず、G区に検出された4条の溝跡は重複関係から、7号→11号→6・8号の推移が判明しており、9号・10号溝は11号溝より新しい。6・8号溝と9・10号溝の先後関係は不明であるが、前述のごとく、6～8・11号の各溝跡は空間的には有機的な関連性を有しており、時間的にも近接した関係にあったことが予想される。したがって6・8号→9・10号の先後関係が想定でき、さらには1号・4号溝跡は9号・10号の溝跡と併行関係にある可能性が強い。以上のことから、遺構として断定できる8条の溝は、7号→11

号→6・8号→1・4・9・10号の先後関係が推測される。

本地方において、集落内に大溝を伴う遺跡としては水沢市石田遺跡[注1]・北上市尻引遺跡[注2]などが知られており、大溝跡が竪穴住居跡群や掘立柱建物群と密接に関連する性格をもって配置されている。所属時期は奈良時代末ないしは平安時代初期とされており、本遺跡の1号・10号の大溝よりも旧いものである。

注1　岩手県教育委員会　1975　『石田遺跡現地説明会資料』

注2　北上市教育委員会　1977　『尻引遺跡調査報告書』

4　方形溝状遺構

方形溝状遺構は独立したものではなく、東西方向に2基が連って検出されており、方形溝の1辺を共用している。内部の平場内からは付属施設と思われる遺構が一切検出されておらず、上部構造を想定されるものも発見されていない。この2基の方形溝が同時存在であるのか、後にどちらかの一方を取り付けたものであるのかが問題となるが、少なくとも溝の堆積土の状況からは重複関係を指摘できない。ただ、追設した場合に前設の溝に堆積した崩壊土を取り上げて復元したならば、これと同様の埋土状況を示すことも考えられ、一概に同時存在とは規定できない。平面的には2号方形溝とした遺構の方が形が整っており、一応1号方形溝がそれに取り付いた状況を示している。

方形溝の性格に関しては不明な点が多い。岩手県下で同種の遺構が検出された例としては水沢市南矢中遺跡[注1]、二戸市上里遺跡[注2]などがあげられる。とくに南矢中遺跡は北上川対岸の中位段丘（福原段丘）上に立地するもので、独立するものを1基含むが、5基・7基と東西方向に連続して検出されている。規模、形態とも本遺跡の遺構と極めて類似する。上里遺跡では6基の円形周溝に混って4基方形溝が検出されている。いずれも独立するものであるが、溝以外の遺構を併わない点では一致する。両遺跡とも性格は明確にはしていないが南矢中遺跡では周溝墓としての機能を推測している。本遺跡の方形溝も墓祉となる可能性を有するものの直接的な根拠に欠ける。ここでは単に、可能性を指摘するにとどめたい。

つぎに、方形溝の所属時期であるが、第1号方形溝は8号溝跡を破壊して作られている。これは、前項の溝跡の先後関係と比較すると1号・4号・9号・10号溝が開さくされた時期に比定されうるものであり、二基の方形溝の方向軸は1号・9号・10号溝のそれと一致する。なお、前記の南矢中遺跡、上里遺跡の方形溝はいずれも平安時代に属するものとしているが、その詳細は不明である。

注1　岩手県教育委員会　1976　「南矢中遺跡」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査略報』
注2　岩手県埋蔵文化財センター　1979　『上里遺跡現地説明会資料』

〔2〕出土土器の分類

分類に際して(注1)は、器種を優先させ、それらを成形・焼成技法を主体にして分類し、再調整の技法や器形上の特徴などからさらに細分を試みている。器種優先の分類方法にはいくつかの先例があり、特に坏形土器の場合のように、従来の土師器・須恵器という範疇のいずれに該当するのかを明確にしえない土器群の存在が前提となっている。ここではむしろ、同一器種における種別ごとの数量的比率の変遷・調整技法の差異などが、それぞれの時間的な変化や地域性・遺跡の特性などを反映しているものと考えられることによっている。

本遺跡で出土した土器の器種には、坏・高台付坏・蓋・鉢・盤・鍋・甕・壺などがある。このなかで、出土量の多い坏・高台付坏・鉢・甕・壺などは技法・器形などによって分類することが可能である。出土量が僅少である蓋・盤・鍋などの分類は行なわなかった。なお、坏・高台付坏としたもののなかには埦や皿と呼ばれうるものも含んでいる。

〔坏〕　坏はその製作に際しロクロを使用していないものと使用しているものとに大別される。

坏A類：ロクロを使用していないもの。

坏B類：ロクロを使用しているもの。

さらに、B類の坏は焼成技法の差異と、二次調整（ヘラミガキ・黒色処理）の有無とによって分類される。

坏A類：ロクロ未使用で、酸化炎で焼成して内面に黒色処理が施されているもの。

坏BⅠ類：ロクロ使用で、酸化炎で焼成して内面に黒色処理が施されているもの。

坏BⅡ類：ロクロ使用で、還元炎で焼成したもの。

坏BⅢ類：ロクロ使用で、酸化炎で焼成して内面に黒色処理が施されていないもの。

〈坏A類〉　A類の坏は器形の特徴によって丸底を呈するものと平底を呈するものとに2分される。前者は体部に段が巡るもの、体部に沈線が巡るもの、および体部に段・沈線をもたないものとに3分される。後者はいずれも体部に段・沈線をもたないものである。

A1類：丸底を呈するもの　A1a類：体部に段が巡るもの。
　　A1b類：体部に沈線が巡るもの。
　　A1c類：体部に段、沈線をもたないもの。

A2類：平底を呈するもの　（体部に段、沈線をもたない。）

坏A1類　丸底で体部に段の巡るA1a類の坏は、段の位置が体部のやや下部にある。口径

に比べて器高の高いものと器高が底くなるものとに分かれる。段より上部は口縁部に向かってややふくらみをもって外傾するものとやや外反ぎみになるものとがある。体部に沈線の巡るＡ１b類の坏は、沈線の位置が体部のやや下にあるもので、体部はやや直線的に外傾して口縁端で内弯ぎみに立ちあがる。段・沈線のもたないＡ１c類の坏は体部より口縁部までやや丸味をもってゆるやかに外傾するものである。器面調整はＡ１c類の坏を除きほぼ共通しており、内外面ともヘラミガキで整えており、段より下の部分では前段階の調整であるヘラケズリが観察されるものもある。ＢＩc類の坏は外面がナデに近い軽いヘラケズリ、内面がヘラミガキで調整している。

坏Ａ２類　すべて体部に段、沈線をもたない。器形的には各種みられ、体部より口縁部まで大きく開いて外傾するもの、あまり開かず直線的に外傾するもの、丸味をもって内弯ぎみに立ちあがるものなど多種多様である（第６表）。　器面調整は、外面は全面にヘラミガキが施されるものと体部下半より底部にヘラケズリが施されているもの、および全面ヘラケズリによるものなどがある。体部上半がヘラミガキされるものは、前段階の調整である横ナデが口縁部に施されているものが多い。内面は上半が横方向、下半が放射状のヘラミガキを施し、黒色処理されている。

〈坏ＢＩ類〉　製作に際してロクロを使用しているもので、酸化炎で焼成しており、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されているものである。底部の切り離し技法および再調整の有無とで以下のように分類される。

ＢＩa類：底部の切り離しが回転糸切りで無調整のもの。

ＢＩc類：底部の切り離しが回転糸切りで、後に再調整が加えられているもの。

ＢＩe類：再調整が加えられており、底部の切り離し技法が不明のもの。

ＢＩc類・ＢＩe類の坏の再調整には、手持ちヘラケズリによるもの、ロクロ回転を利用した回転ヘラケズリによるもの、およびヘラミガキによるものとに３分される。それぞれを以下のように呼称する。

手持ちヘラケズリによるもの—**Ｈ**手法

回転ヘラケズリによるもの　—**Ｗ**手法

ヘラミガキによるもの　　—**Ｍ**手法

これは再調整を施す範囲によっても細分され、**1**：体部下端より底部全面に施すもの、**2**：体部下端より底部周縁に施すもの、**3**：底部全面、**4**：底部周縁、**5**：体部下端、**6**：体部より底部にかけての全面の６種類がある。それぞれ、H_1・W_1などと組合わせて呼ぶことにする。

ＢＩ類の坏は体部より口縁部まで丸味をもって外傾するものが大半を占めるが、個々土器によって法量値や器形の特徴にかなりの差異がみられる。器高の高低や体部の形態によりいくつ

かに細分される（第６表）。器面調整は外面がロクロ調整、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されており、ヘラミガキの方向は体部下端から底部では放射状、他の部分では斜位か横方向のものが圧倒的に多い。

〈坏ＢⅡ類〉　製作に際してロクロを使用しており、還元炎で焼成したものである。底部の切り離し技法および再調整の有無とで以下のように分類される。

ＢⅡa類：底部の切り離しが回転糸切りで無調整のもの。

ＢⅡb類：底部の切り離しが回転ヘラ切りで無調整のもの。

ＢⅡd類：底部の切り離しが回転ヘラ切りで、後に再調整が加えられているもの。

ＢⅡe類：再調整が加えられており、底部の切り離し技法が不明のもの。

ＢⅡd類、ＢⅡe類の坏の再調整には、手持ちヘラケズリによるものとロクロ回転を利用した回転ヘラケズリによるものとがあり、前者はＨ手法、後者をＷ手法とした。それぞれの手法と器体にヘラケズリを施す範囲との組合せの呼称は坏ＢⅠ類に準じた。

ＢⅡ類の坏は、体部より口縁部まで直線的に外傾するものが多いが、ＢⅠ類の坏と同様に法量値や細部の形態は多種多様である（第６表）。概してＢⅠ類の坏よりも器高が低くなる。なかでもＢⅡb類、ＢⅡd類の坏はＢⅡa類のものよりも器高が低くて底径が大きくなる。内外面ともロクロ調整である。

〈坏ＢⅢ類〉　製作に際してロクロを使用しているもので、酸化炎で焼成して内面に黒色処理の施されていないものである。(注２) いずれも、底部の切り離しが回転糸切りによるものであり、内外面とも再調整は認められない。

ＢⅢ類の坏は、体部より口縁部まで直線的に外傾するものが多い。外面にはロクロ水挽きの凸凹を明瞭に残し、器肉の歪みも強い。法量値や器形のばらつきが大きく、器高が極端に高いものから極端に低くなるものまでかなり変化に富んでいる。（第６表）

〔高台付坏〕　すべて、その製作にロクロを使用しているものである。坏Ｂ類に準じて同様の記号で大別した。

高台付坏ＢⅠ類：酸化炎焼成で、坏部内面にヘラミガキ、黒色処理が施されているもの。

高台付坏ＢⅡ類：還元炎焼成のもの。

高台付坏ＢⅢ類：酸化炎焼成で、坏部内面にヘラミガキ、黒色処理が施されていないもの。

〈高台付坏ＢⅠ類〉　高台部の形態、底部の調整手法、地部の形態等で以下のように細分した。

高台付坏**ＢⅠ１類**：高台部が短かく外傾するもの。

高台付坏**ＢⅠ２類**：高台部が長く外傾するもの。

ＢⅠ１類、ＢⅠ２類とも底部の調整手法の差異によって分けられ、①底部に菊花状のヘラ刻みを施して周縁をロクロ調整するもの、③底部周縁をロクロ調整するもの、④底部全面をロク

ロ調整するものなどがある。これらは高台部の形態と組合せてＢＩ１①類などと呼称する。

また、坏部の形態からも大きく３分され、埦形を呈するものと坏形を呈すもの、および皿形を呈するものとがある。これらは、以下の記号で分類した。

(1)類：器高が高くて、体部が丸味をもって立ちあがる埦形のもの。

(2)類：器高が普通で、体部が外反、ないし外傾する坏形のもの。

(3)類：器高が極端に低くて、体部が大きく開いて外傾する皿形のもの。

ＢＩ類の高台付坏は、坏部の外面に再調整が施されないものが大半を占めるが、なかには再調整の施されているものも出土している。この再調整の手法等は坏ＢＩ類に準じて記号化した。器面調整は外面がロクロナデ、内面がヘラミガキ・黒色処理によるものを基本としている。

〈高台付坏ＢII類〉　１点出土している。体下部に稜をもって屈折するもので、稜埦と呼ばれるものに該当する。高台部は極端に短く、底部中央に糸切り痕を残す。

〈高台付坏ＢIII類〉　ＢＩ類の高台付坏と同じ基準で分類した。

ＢIII **2類**：高台部が長く外傾するもの。

ＢIII **3類**：高台部が極端に長く外傾するもの。

ＢIII類の坏は、高台部接合の際の調整手法の差異によって３分される。②底部にナデを施して周縁をロクロ調整するもの、③底部周縁をロクロ調整するもの、④底部全面をロクロ調整するものなどがある。これらは高台部の形態と組合せてＢIII２②類などと呼称する。

なお、坏部の形態はすべて体部が外反、ないしは外傾する坏形を呈するものである。高台付坏ＢＩ類で類別した(2)類に相当する。器面調整は内外面ともロクロナデによっている。

〔鉢〕　鉢は、その製作にロクロを使用していないものと使用しているものとに大別される。なお、ロクロを使用しているものはすべて酸化炎で焼成したものに限られる。

鉢Ａ類：製作に際してロクロを使用せず、酸化炎で焼成したもの。

鉢ＢＩ類：製作に際してロクロを使用し、酸化炎で焼成したもの。

〈鉢Ａ類〉：Ａ類の鉢は器形の特徴によって以下のように分けられる。

鉢Ａ１類：頸部にくびれをもち、体部と口縁部と区画されているもの。

鉢Ａ２類：体部より口縁部までなめらかに移行するもの。

Ａ１類の鉢は、いずれも頸部に段を有するもので、体部最大径を上端にもつものである。相対的に器高が低く、体部が大きく開いて外傾するものと、相対的に器高が高く体部が外傾して立ちあがる甕形のものとがある。前者をＡ１ａ類、後者をＡ１ｂ類とした。

鉢Ａ１ａ類　Ａ１ａ類の鉢は頸部に形式的な段をもち、口縁部は長くゆるく外反する。体部はほとんど脹まずそのまま底部へと移行する。Ａ１ｂ類に比べて体部の傾きがゆるい。器画調整は外面はヘラミガキによっているが、前段階の調整である横ナデが口縁部に、刷毛目が体部に

施されている。内面はヘラミガキ・黒色処理で整えている。

鉢Ａ１b類　Ａ１b類の鉢は頸部に形式的な段をもち、口縁部は短くゆるく外反する。体部は直線的であるが、Ａ１a類より傾きがきつい。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面が刷毛目、内面がヘラナデによっている。

また、Ａ２類の鉢は体部の形態によって細分され、体部より口縁部まで大きく開いて外傾するものと、体部より口縁部までふくらみをもって立ちあがり、埦形に近い形を呈するものとに分けられる。前者をＡ２a類、後者をＡ２b類とした。

鉢Ａ２a類　Ａ２a類の鉢には、器高が高くて口縁部まで直線的に外傾するものと器高が低く体部がややふくらみをもって外傾するものとがある。前者をＡ２a①類、後者をＡ２a②類とした。Ａ２a①類の鉢には大形のものと小形のものとがみられる。器面調整は小形のものを除いて内外面ともヘラミガキ・黒色処理で整えているが、体部外面にはヘラミガキの前段階の調整であるヘラケズリが観察されるものもある。小形の鉢は体部外面に刷毛目、内面にヘラナデが施され、底部外面はナデによっている。

鉢Ａ２b類　Ａ２b類の鉢は体部より口縁部までかなり丸味をもって内弯ぎみに立ちあがるものと、ややふくらみをもって立ちあがるものとがある。前者をＡ２b①類、後者をＡ２b②類とする。Ａ２b①類の鉢は器形の大小によって２分される。器面調整は、小形のものを除いて内外両面ともヘラミガキによっている。体部外面には前段階の調整である刷毛目やヘラケズリの痕跡をとどめており、口縁部には横ナデが施されている。内面は黒色処理が加えられ、なかには外面にも黒色処理が施されるものがある。小形のものは、体部が内外面ともヘラナデ、底部外面がナデで調整している。

〈鉢ＢＩ類〉　ＢＩ類の鉢はすべて器高より口径が大きなもので、形態上の特徴によって以下のように大別される。

鉢ＢＩ１類：口縁部は短く強く外反し、体部があまり脹まずに底部へと移行するもの。

鉢ＢＩ２類：口縁部は短く強く外反し、体部が上半付近でやや張り出すもの。

鉢ＢＩ３類：口縁部はゆるく外反し、体部が直線的にそのまま底部へと移行するもの。

鉢ＢＩ４類：口縁部はゆるく外反し、体部が上半付近でやや張り出すもの。

鉢ＢＩ１類　ＢＩ１類の鉢には、内面にヘラキガキ・黒色処理を施すものと、全面ロクロ調整によるものとに分けられる。前者をＢＩ１a類、後者をＢＩ１b類とした。ＢＩa類の鉢は大形のものと小形のものとがあり、いずれも口縁部が短く強く外反し、口唇部は弱く上方へ挽き出している。ＢＩb類の鉢は口唇部を弱く上方へ挽き出すものと、強く上方へ挽き出すものとに分けられる。器面調整は、ＢＩ１a類が外面はロクロナデ、内面はヘラミガキ・黒色処理を 基本とするが、外面にもヘラミガキが施されているものもある。ＢＩ１b類の鉢は全面ロクロ調整

である。

鉢ＢＩ２類　ＢＩ２類の鉢にも大形のものと小形のものとがあり、いずれも体部の上半に体部最大径をもつ。大形のものは口唇部を上方へ強く挽き出している。全面ロクロ調整である。

鉢ＢＩ３類　ＢＩ３類の鉢は器形の大小によって２分され、いずれも体部が直線的で上端に体部最大径をもつ。口縁部はそのまま丸めてあるものと上方へ挽き出すものとがある。全面ロクロナデで整えている。

鉢ＢＩ４類　ＢＩ４類の鉢は１点のみで、体部の上半付近でやや張り出すものである。器高がかなり低い。体部より底部にかけて外面にはヘラケズリが施され、体部下半内面にはヘラナデが施されている。

〔甕〕　甕はその製作に際しロクロを使用していないものと使用しているものとに大別される。

甕Ａ類：製作にロクロを使用していないもの。

甕Ｂ類：製作にロクロを使用しているもの。

甕Ａ類には、ロクロ使用土器と供伴し、当然ロクロ技術が導入されているにもかかわらずロクロ使用していないものも含まれており、ロクロ導入以前のそれとを区別した。甕Ｂ類は他の器種の場合と同様に焼成技法の差異によって分類した。

甕Ａ類　：ロクロ未使用で、酸化炎焼成したもの。

甕Ａ′類：ロクロ不使用で、酸化炎焼成したもの。

甕ＢＩ類：ロクロ使用で、酸化炎焼成したもの。

甕ＢII類：ロクロ使用で、還元炎焼成したもの。

〈甕Ａ類〉　Ａ類の甕は、すべて口径より器高が大きく、最大径を口縁部にもつものに限られる。まず、器形の大小によって３分した。

甕Ａ１類：大形で、器高が24cm以上のもの。

甕Ａ２類：中形で、器高が17～20cm±のもの。

甕Ａ３類：小形で、器高が15cm未満のもの。

これらの土器は形態上の特徴によって細分が可能であり、頸部に段を有し口縁部と体部とを区画するものと、段をもたずに体部から口縁部へなだらかに移行するものとがある。

ａ類：頸部に段を有するもの。

ｂ類：頸部に段を持たないもの。

さらに体部最大径の位置が体部の中央付近にあるものと、上端付近にあるものとがあり、前者を**(1)類**、後者を**(2)類**として分類した。また、口縁部の形態には大きく外反するものと直立ぎみにゆるく外反するものとがあり、前者を**(i)類**、後者を**(ii)類**とした。体部最大径の位置では(1)類が多く、口縁部の形態は(i)類が主体的である。

器面調整は、外面が刷毛目、ヘラケズリ、ミガキに近いヘラケズリ、ヘラミガキなどにより、内面は刷毛目、ヘラナデ、ナデなどによっている。外面の調整は数種の手法を組み合わせたものが多い。

〈甕A′類〉　A′類の甕は器形の大小によって(甕A類に準ずる)2分される。すべて口径より器高が大きく、最大経の位置を体部にもつものである。

器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面がヘラケズリ、内面がナデによっている。器面には凸凹がみられ、かなり粗い調整である。

〈甕BⅠ類〉　BⅠ類の甕は口径より器高が大きなもので、器形の大小によって大別される。

甕BⅠ1類　大形のもの

甕BⅠ2類　小形のもの

BⅠ1類、BⅠ2類とも、最大径の位置を口縁部にもつものと体部にもつものとがある。

(1)類：口縁部に最大径をもつもの

(2)類：体部に最大径をもつもの

さらに、口縁部の長さによっても分けられ、口縁部が短く外反するものと、極端に短く外反するものとがある。前者を**(i)類**、後者を**(ii)類**として分類した。

口縁部の形態も多様で、頸部から強く外反するものとゆるやかに外反するものとがあり、口唇部を上方へ挽き出すもの、下方へ挽き出すもの、上下に挽き出すもの、単純に丸めてあるものなどがある。体部の脹みの強弱によっても区別され、丸味をもって脹むもの、やや丸味がみられるもの、ほとんど脹みをもたず直線的に底部へと移行するものなどに分けられる。

器面調整は、BⅠ1類のものは粘土巻き上げ後、体部上半から口縁部まではロクロ調整により、体部下半は縦方向のヘラケズリを施すものがほとんどである。BⅠ2類のものは、僅かな例外を除いてロクロナデのみで仕上げている。底部の切り離しは右回転糸切りによるもので、底部に糸切り痕をそのまま残しているものが多い。

〈甕BⅡ類〉　BⅡ類の甕は完形品が1点も出土していない。そのほとんどが図化不能の細片である。器形には大小がみられる。体部に最大径をもち、口縁部が長く外反し、肩部で外へ張り出すものが多い。大形のものでは頸部にヘラ書き波状文を施したものもある。器面調整は、外面にはロクロ痕、横ナデ痕、叩き目文、ヘラケズリ痕が、内面にはロクロ痕、横ナデ痕、アテ工具痕などが観察される。厚手のものと薄手のものとがある。いずれも破片に限られるため共通した特徴を描出することが困難であり、分類作業は行わなかった。また、体部片が大半を占めており、壺のそれと区別しにくく、他の器種を含んでいる可能性もある。

〔壺〕　壺はその製作に際しロクロを使用していないものと使用しているものとに大別される。

壺A類：製作にロクロを使用していないもの。

壺Ｂ類：製作にロクロを使用しているもの。

壺Ｂ類は、甕と同様に焼成技法の違いによって２分される。

壺Ａ類：ロクロを使用せず、酸化炎で焼成したもの。

壺ＢⅠ類：ロクロを使用し、酸化炎で焼成したもの。

壺ＢⅡ類：ロクロを使用し、還元炎で焼成したもの。

〈壺Ａ類〉　Ａ類の壺は、器高が口径より大きく体部の中央付近に最大径をもつものである。分類基準は甕Ａ類とほぼ同様であり、最初に器形の大小で分類し、形態上の特徴によってさらに細分した。

壺Ａ１類：大形のもの　　**壺Ａ２類**：中形のもの　　**壺Ａ３類**：小形のもの

Ａ類の壺はすべて頸部に段を有し、口縁部と体部とを区画するものである（**ａ類**）。段の強弱は一定しないが一括してとり扱った。

体部の形態は、**(1)**ほぼ真球に近い形を呈し最大径を体部中央にもつもの、**(2)**やや肩の張る球形を呈し最大径を体部の上半にもつもの、**(3)**横長の球形を呈し、最大径を体部中央付近にもつものなどがあり、上記の記号で細分した。また、口縁部の形状は、大きく外反するものと直立ぎみにゆるく外反するものとがあり、前者を**(i)類**、後者を**(ii)類**とした。

器面調整はほぼ共通しており、口縁部が横ナデ、体部外面が刷毛目＋ヘラミガキ、体部内面がヘラナデ、ないし刷毛目によるものが多い。また、丹塗りのものも１点出土しているがほとんど剝落しており、文様等の確認は不能である。

〈壺ＢⅠ類〉　ＢⅠ類の壺は出土量が少なく６点を数えるにすぎない。したがって、共通した特徴を描出することは困難であり、ここでは口頸部の特徴を中心とした大雑把な分類に留めた。

壺ＢⅠａ類：口頸部が、肩部より直立ぎみに外傾し口縁端で外反するもの。

壺ＢⅠｂ類：口頸部が、肩部より直立ぎみに内傾し口縁端で外反するもの。

壺ＢⅠｃ類：口頸部が、単純に短く外反するもの。

壺ＢⅠｄ類：口頸部が、極端に短く直立するもの。

壺ＢⅠａ類　ＢⅠａ類の壺は大形のものが２点出土している。体部は丸味をもって大きく脹み、中央付近に最大径をもつ。器面調整は外面が頸部に平行叩き目痕が観察される点に特徴がある。内面は体部上半に刷毛目状ロクロナデを施すものと刷毛目を施すものとに分かれる。

壺ＢⅠｂ類　ＢⅠｂ類の壺は大形のものが１点出土している。体部は丸味をもって脹み、中央付近に最大径をもつものと推定される。器面調整は体部下半外面にヘラケズリ、体部内面がナデで整えている。

壺ＢⅠｃ類　ＢⅠｃ類の壺は、体部の形状の横長の球形を呈する大形のものと、ほぼ真球を呈する小形のものとに分かれ、それぞれ１点づつ出土している。器面調整は体部下半外面がヘラ

ケズリによっており、大形のものには体部上半内面に刷毛目状ロクロナデを施している。

壺ＢＩｄ類　ＢＩｄ類の壺は、壺ＢII類にみられる短頸壺の模倣品とみられる。体部は肩の張った球形を呈し、上半付近に最大径をもつ。極端に小形のものである。器面は内外ともヘラミガキ・黒色処理で整えており、体部下半には前段階の調整であるヘラケズリの痕跡が観察される。底部外面には右回転糸切り痕をそのまま残す。

〈壺ＢII類〉　甕ＢII類と同様に全体の器形を知りえるものはほとんど出土していない。図化したものはほとんどが口頸部の破片であるが、破片が小さいため甕の口縁部と区別しにくい。また、個々に様相を異にしており、通常使用されている長頸壺、広口壺、短頸壺等の器形の概念を基準にして分類するに留めた。

〔蓋〕　２点出土している。いずれも成形にロクロを使用して還元炎で焼成しており、ＢII類に類別される。１点は極端に高い宝珠形のつまみをもつもので、実用化されたものではなく、祭祀用に利用されたものと思われる。体部はなだらかにのびて口縁端で丸味をもって強く折りまげられている。ほかに１点はつまみの部分を欠損しており全体の器形は不明である。体部はなだらかにのびて端部が下方へ折り曲げられて口縁部が作り出されたものである。天井部外面には、回転ヘラケズリによる再調整が加えられている。

〔盤〕　１点出土している。ロクロを使用して成形し、還元炎で焼成したものでＢII類に類別される。器高が低く体部がかなり内弯ぎみに立ちあがるものである。底部は回転ヘラ切りで切り離し、再調整は施されていない。

〔埚〕　１点のみである。製作にロクロを使用し酸化炎で焼成したもので、ＢＩ類に類別される。口縁部、体部の形態は甕のそれを外に寝かせた感じで、器面調整は体部上半が刷毛目状ロクロナデ、体部下半がヘラケズリで整えている。

注１　分類基準を作成するに際しては、高橋信夫氏が設定した基準（高橋：1979）を多く参考にした。これは、高橋氏が対象とした遺跡が本遺跡と近接し、その年代も重なる部分が多いことから、両者を比較可能なものにしようとした意図によるものである。しかし、大筋の基準（種別の記号など）は揃えたものの、遺跡によって土器組成の内容が相違していることにも起因して、結果的には細部がかなり異なっている。

高橋信雄「Ⅵ．⑵奈良・平安期の土器」『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』　1979　(財)岩手県埋蔵文化財センター

注２　本書において、坏ＢIII類としたものは、酸化炎で焼成して内外両面とも再調整の施されないものである。この種の坏は、赤焼き土器、土師質土器などの名称を与えらかている土器群に比定されうるものであるが、概念的には土師質土器に近いとらえ方をしており、広義の意味で所謂須恵系土器をも包括している。ただ、後述する〔４〕〔５〕〔６〕節においては、個々の土器で区別されうるものに限って、赤焼き土器と須恵系土器とに区別して記述している。

第６表　出土土器分類基準表

坏形土器

A、ロクロ未使用	(酸化炎焼成 / 黒色処理)	1．丸底	a．段あり b．沈線あり c．段・沈線なし
		2．平底	(段・沈線なし)
B、ロクロ使用	I、酸化炎焼成 黒色処理	(平底)	a．糸切り無調整 b．ヘラ切り無調整 c．糸切り再調整 d．ヘラ切り再調整 e．不明再調整
	II、還元炎焼成	(平底)	
	III、酸化炎焼成 黒色処理なし	(平底)	(糸切り無調整)

ＢＩ・ＢII類のｃ・ｄ・ｅ類は手法上この違いにより、以下のように細分される。
- 回転ヘラケズリ――W
- 手持ヘラケズリ――H
- ヘラミガキ――M

再調整の部位
1 底部全面＋体部下端
2 底部周縁＋体部下端
3 底部全面
4 底部周縁
5 体部下端
6 体部全面＋底部全面
ex ＢＩｃ類－Ｈ１手法

付表１　坏Ａ２類形態分類基準表

	器高：底径		体部
a	器高低く底径大きい	a_1	直線的に外傾する。
		a_2	ややふくらみをもって外傾する
		a_3	ややふくらみをもって立ちあがる
b	器高低く底径小さい	b_1	大きく開いて直線的に外傾する
		b_2	ややふくらみをもって外傾する
		b_3	ややふくらみをもって外傾し、口縁端で立ちあがる
		b_4	ややふくらみをもって外傾し、口縁端で外反する
		b_5	底部との境にくびれをもち、ややふくらみをもって外傾する
		b_6	直線的に外傾し、口縁端で立ちあがる
		b_7	やや丸味をもって外傾する
c	器高が中・底径大きい	c_1	直線的に外傾する
		c_2	やや丸味をもって立ちあがる
d	器高が中・底径小さい	d_1	ややふくらみをもって立ち上がる
		d_2	やや丸味をもって立ちあがる
		d_3	底部との境にくびれをもち、大きく開いて直線的に外傾する
		d_4	底部との境にくびれをもち、ややふくらみをもって立ちあがる
		d_5	底部との境にくびれをもち、やや丸味をもって立ちあがる
e	器高高く底径大きい	e_1	直線的に立ちあがる
f	器高高く底径小さい	f_1	直線的に立ちあがる
		f_2	底部との境にくびれをもち、直線的に立ちあがる
		f_3	ややふくらみをもって立ち上がる
		f_4	ややふくらみをもって外傾し、口縁端で立ちあがる

付表２　坏ＢＩ類形態分類基準表

	器高：底径		体部
a	器高低く底径小さい	a_1	ややふくらみをもって外傾する
		a_2	やや丸味をもって外傾する
b	器高低く底径小さい	b_1	ややふくらみをもって外傾する
		b_2	やや丸味をもって外傾する
		b_3	大きく開いて直線的に外傾する
c	器高が中・底径大きい	c_1	ややふくらみをもって立ちあがる
		c_2	直線的に外傾する
		c_3	かなり丸味をもって立ちあがる
d	器高が中・底径小さい	d_1	ややふくらみをもって外傾する
		d_2	やや丸味をもって外傾する
		d_3	直線的に外傾する
		d_4	かなり丸味をもって立ちあがる
e	器高高く底径大きい	e_1	ややふくらみをもって立ちあがる
		e_2	やや丸味をもって立ちあがる
f	器高高く底径小さい	f_1	ややふくらみをもって立ちあがる
		f_2	やや丸味をもって立ちあがる
		f_3	かなり丸味をもって立ちあがる

付表３　坏ＢII類形態分類基準表

	器高：底径		体部
a	器高が中・底径大きい	a_1	直線的に外傾する
		a_2	ややふくらみをもって外傾する
b	器高が中・底径小さい	b_1	直線的に外傾する
		b_2	やや膨みをもって外傾する
		b_3	大きく開いて直線的に外傾する
		b_4	やや丸味をもって外傾する
c	器高低く底径大きい	c_1	直線的に外傾する
		c_2	ややふくらみをもって外傾する
d	器高低く底径小さい	d_1	直線的に外傾する
		d_2	ややふくらみをもって外傾する
e	器高高く底径大きい	e_1	直線的に外傾する
		e_2	直線的に立ちあがる
f	器高高く底径小さい	f_1	直線的に外傾する
		f_2	ややふくらみをもって外傾する
		f_3	やや丸味をもって外傾する

付表４　坏ＢIII類形態分類基準表

	器高：底径		体部
a	器高低く底径大きい	a_1	ややふくらみをもって外傾する
		a_2	やや丸味をもって外傾する
b	器高低く底径小さい	b_1	ややふくらみをもって外傾する
		b_2	やや丸味をもって外傾する
		b_3	大きく開いて直線的に外傾する
c	器高が中・底径大きい	c_1	ややふくらみをもって立ちあがる
		c_2	直線的に外傾する
		c_3	かなり丸味をもって立ちあがる
d	器高が中・底径小さい	d_1	ややふくらみをもって外傾する
		d_2	やや丸味をもって外傾する
		d_3	直線的に外傾する
f	器高高く底径小さい	f_1	ややふくらみをもって立ちあがる
		f_2	やや丸味をもって立ちあがる
		f_3	直線的に外傾する
g	器高低く底径が極端に小さい	g	体部が大きく開いて直線的に外傾する
h	器高中・底径が極端に小さい	h	やや丸味を持って立ちあがる
i	器高低く底径小さい	i	大きく開いて直線的に外傾する

高台付坏形土器

		高台部	底部	坏部の形態
B、ロクロ使用	I 酸化炎焼成 黒色処理	1.短く直立ぎみに外傾 2.長く外傾 3.極端に長く外傾	①菊花状のヘラ刻み＋周縁ロクロ調整 ②ナデ＋周縁ロクロ調整 ③周縁ロクロ調整 ④全面ロクロ調整	(1)器高が高くて、体部が丸味をもって立ちあがる埦形のもの (2)器高が普通で体部が外傾するもの (3)器高が極端に低くて、体部が大きく開いて外傾する皿形のもの
	III 酸化炎焼成 黒色処理なし			

鉢形土器

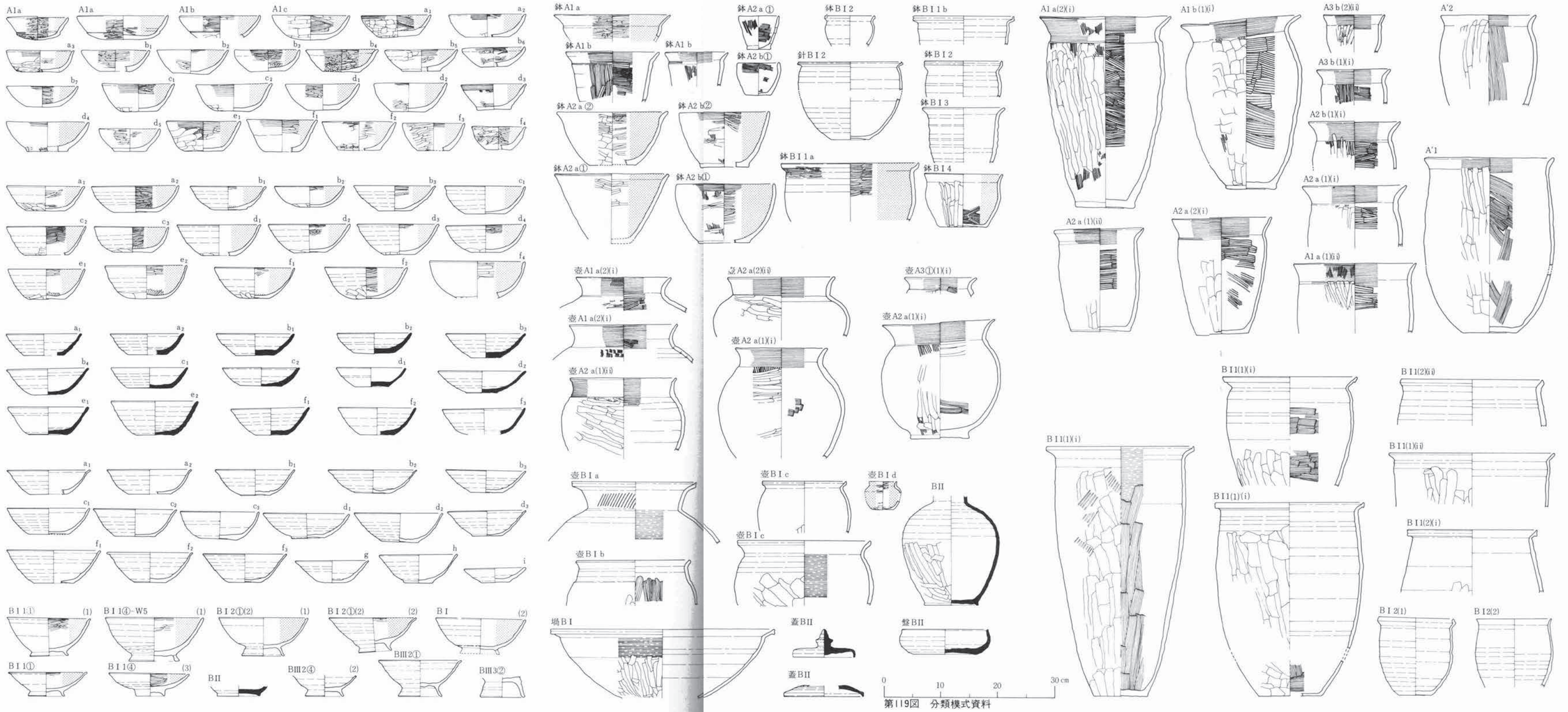
		頸部段の有無	形態上の特徴
A、ロクロ未使用	(酸化炎焼成)	1.段あり	a口径に比べて器高の低いもの b口径に比べて器高の高いもの
		2.段なし	a体部より口縁部まで大きく開いて外傾するもの b体部より口縁部までふくらみをもって立ちあがるもの
B、ロクロ使用	I酸化炎焼成	(段なし)	1.口縁部は短く強く外反し、体部はあまり張まずに底部へと移行するもの 2.口縁部は短く強く外反し、体部が上半付近でやや張り出すもの 3.口縁部はゆるく外反し、体部が直線的に底部へと移行するもの 4.口縁部はゆるく外反し、体部が上半付近でやや張り出すもの

甕形土器

		大きさ	頸部段の有無	最大径の位置	体部最大径の位置	口縁部の形態
A ロクロ未使用	(酸化炎焼成)	1.大形 2.中形 3.小形	a段あり b段なし	(口縁部)	(1)中央付近 (2)肩部付近	(i)大きく外反するもの (ii)直立ぎみにゆるく外反するもの
B ロクロ使用	I、酸化炎焼成	1.大形 2.小形	(段なし)	(1)口縁部 (2)体部		(i)短く外反するもの (ii)極端に短く外反するもの
	II、還元炎焼成					
A' ロクロ不使用	(酸化炎焼成)					

壺形土器

		大きさ	頸部段の有無	最大径の位置	体部の形態と最大径の位置	口頸部の形態
A ロクロ使用	(酸化炎焼成)	1.大形 2.中形 3.小形	(段あり)	(体部)	(1)ほぼ真球を呈し、中央付近にもつもの (2)やや肩の張る球形を呈し、体部の上半にもつもの (3)横長の球形を呈し、体部の中央付近にもつもの	(1)大きく外反するもの (2)直立ぎみにゆるく外反するもの
B ロクロ未使用	I、酸化炎焼成		(段なし)	(体部)	(中央付近)	a.肩部より直立ぎみに外傾し、口縁端で外反するもの b.肩部より直立ぎみに内傾し、口縁端で外反するもの c.単純に短く外反するもの d.極端に短く直立するもの
	II、還元炎焼成					



第119図　分類模式資料

〔3〕住居跡における土器のあり方

前項において、本遺跡の出土土器の分類を行なった。この分類に基づき、各住居跡の土器出土状況を表わしたのが第7表である。これにみられるように、各住居より出土した土器は一様なものではなく、一定のまとまりをもって偏在している。こうした状況は、本遺跡が空間的にある程度のまとまりをもち、特定の時間的な幅のなかで営まれてきたことを示しており、ここでは、出土土器を通してみた住居跡相互の関連について言及する。

まず、各住居跡出土の土器の組合せを比較検討し、その先後関係を想定する場合、その成形技法はロクロを使用しないものからロクロを使用するものへと移行し、底部の切り離し手法はヘラ切り技法から糸切り技法へと転換すること、さらに、調整技法からは大勢として再調整のあるものから無調整のものへと推移することを前提としている。

〔第Ⅰ群〕

ロクロ未使用土器である坏A類、甕A類、壺A類を主体にし、ロクロを使用する坏BⅡ類を伴うもので、住居跡によっては壺BⅡ類をもつ。これらは、坏・高台付坏・壺などのBⅠ類土器を全く含まないものと、僅少ながら混入するものとで2分した。

〈Ⅰ―a群〉 BⅠ類土器をまったく含まず、A類土器と坏BⅡ類とで構成されるものである。この組合わせをもつ住居跡には第11号住居跡があり、坏はA1類6点・A2類7点・BⅡb類6点・BⅡd類4点・BⅡe類1点、鉢A類4点、甕はA1a類2点・A2a類1点、壺はA2a類・A3a類が各1点・BⅡ類1点となっている。

〈Ⅰ―b群〉 A類土器と坏BⅡ類とで構成され、住居跡ごとにBⅠ類の坏・高台付坏・壺などを僅かに混入するものである。この組合わせをもつ住居跡には第9号・第12号・第13号の3棟の住居跡がある。なかでも、多量の遺物を出土した第13号住居跡では、坏はA2類18点・BⅡa類1点・BⅡb類3点・BⅡd類1点、鉢A類6点、甕はA1a類5点・A2a類6点・BⅡ類3点、壺はA2a類1点・BⅠa類1点、蓋BⅡ類1点となり、ほかに小形手捏土器4点などがみられる。

a群とb群の違いを要約すると次のようになる。a群の坏は、A類では丸底のものが約半数を占め、BⅡ類では再調整のものをも含みヘラ切りのものに限られるのに対し、b群の坏は、A類では平底のものになり、BⅡ類では糸切りのものとヘラ切りのものとが混在する。甕は、a群では頸部と明瞭な段を有するものに限られるのに対し、b群ではやや形式的なものや段をもたないものも混在する。また、混入するBⅠ類の土器は、それぞれの住居で器種が異なり第9号住居跡が坏BⅠe類―H_3手法1点、第13号住居跡が壺BⅠa類1点、第12号住居跡が坏BⅠc類

—H_1手法とH_3手法が各１点、高台付坏ＢＩ２①類１点からなっている。第12号住にやや多い。

〔第II群〕

土器製作に際してロクロ未使用からロクロ使用に移行する過度的段階からロクロ技術が本格的に取り入れられた時期にかけてのものである。坏Ａ類・ＢＩ類・ＢII類・ＢIII類・甕Ａ類・ＢＩ類・ＢII類、壺Ａ類・ＢＩ類・ＢII類の他に、鉢Ａ類・ＢＩ類、堝ＢＩ類などがみられる。各住居跡によってそと構成内容は異なる。そこで、主な組合せを３つに分けた。

〈II—a_1群〉 坏Ａ類・ＢＩ類・ＢII類、甕Ａ類、壺Ａ類・ＢＩ類からなり、Ａ類の土器が主体を占めるが、ＢＩ類もかなり含まれるものである。この組合わせをもつものは第16号住居跡１棟だけである。坏はＡ２類３点・ＢＩc類—W_1手法１点・ＢIIa類２点、甕Ａ２a類１点、壺はＡ１a類１点・ＢＩa類１点からなる。このように、Ｉ—ｂ群の構成内容と共通する要素がみられ、断続することなくそのまま移行したことを示している。壺Ａ類が朱彩されていること、壺ＢＩ類の頸部に平行叩き目痕が認められることなどが注目される。

〈II—a_2群〉 坏Ａ類・ＢＩ類・ＢII類、甕Ａ類・ＢＩ類、鉢Ａ類・ＢＩ類などからなり、ＢＩ類土器がＡ類土器よりやや多くなる。坏ではＢＩ類がＢII類に比べて僅少となる。この組合わせをもつものには第４号住居跡がある。作図したものは、坏がＢＩa類１点・ＢII類６点、鉢がＡ類・ＢＩ類各１点、甕がＢＩ１類１点、壺がＢＩ類・ＢII類各１点で構成されるが、坏Ａ類・ＢＩc類・甕Ａ類・ＢＩ類が破片でかなり含まれる。甕ＢＩ１類、壺ＢII類(長頸壺）には体部上半に平行叩き目痕が観察される。また小形のＢＩ類壺はＢII類の短頸壺の模倣品と思われ、内外両面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。

〈II—ｂ群〉 坏はＢＩc類、甕はＢＩ類を主体に構成され、鉢ＢＩ類、壺ＢII類を共伴するものが多い。住居跡によっては坏Ａ類・ＢＩa類・ＢII類・ＢIII類、甕Ａ類・ＢII類などをもつ。この組合わせに該当する住居跡には、第６号・第８号・第10号・第14号・第19号・第21号の６棟の住居跡があり、第６号住居跡は、坏ＢＩc類４点、鉢ＢＩ類１点、甕ＢII類１点、壺ＢII類１点、堝ＢＩ類１点で構成され、第10号住居跡は坏がＢＩc類３点・ＢＩe類１点・ＢＩa類１点・ＢII類１点、鉢ＢＩ類１点、甕ＢＩ１類３点・ＢＩ２類５点、壺ＢII類１点で構成される。坏では、ＢＩc類が大半を占めるが、第14号住居跡ではＡ２類が含まれ、第10号・第14号・第19号・第21号の住居跡ではＢＩa類が１～２点混るし、第10号・第14号住居跡ではＢIIa類が１点づつ含まれる。また、第８号・第14号住跡ではＢIII類が既に共伴している。ＢＩ類の坏の再調整の手法は、回転ヘラケズリによるものが第６号住居跡に１点みられるほかはすべて手持ちヘラケズリによるものである。両手法の時間的差異は指摘できないが、概して器高の高い大形のものに回転ヘラケズリによる再調整を施すものが多い。鉢はＢＩ類に類別されるものが第14号住居跡を除く全住居跡から出土しており、内面黒色処理したものもみられる。甕はＢＩ類がそ

第7表　図示遺物集計表（鉄製品のなかで鉄片・鉄滓としたものは図化していない）

	坏										高台付坏								
	A		BⅠ			BⅡ				BⅢ	BⅠ					BⅡ	BⅢ		
	1	2	a	c	e	a	b	d	e		1(1)	1(3)	2(1)	2(2)	2(3)		1	2	3
第1号住居跡			13	4						12	1		1					2	1
第2号住居跡			2		1	1				2									
第3号住居跡				1			1			2									
第4号住居跡			1			6													
第5号住居跡			2	2						6	1(?)			2			1		1
第6号住居跡				4															
第7号住居跡			5	1		2				6							1		
第8号住居跡				4						2									
第9号住居跡	1	4			1	4	2												
第10号住居跡			1	3	1	1													
第11号住居跡	6	7					6	4	1										
第12号住居跡		15		2		1							1						
第13号住居跡		18				1	3	1											
第14号住居跡		1	2	1		1(?)				1									
第15号住居跡			3							2	1			1			1	1	
第16号住居跡		3		1		2													
第17号住居跡										7									
第18号住居跡			16	6	1	3				13	1(?)			2	1				1(?)
第19号住居跡			1	3															
第20号住居跡			4	1						4			1	1					
第21号住居跡			1	2															
第22号住居跡			5	2		1				9				1					
第23号住居跡			3							3	1								
第1号井戸跡			1	5		2				2									
第2号井戸跡		5	6	35	6	8				7	5	11		1		1			

	鉢									甕																
	A				BⅠ					A								A′		BⅠ						BⅡ
	1a	1b	2a	2b	1a	1b	2	3	4	1a(i)	1a(ii)	1b	2a(i)	2a(ii)	2b(i)	2b(ii)	3b	1	2	1(1)(i)	1(1)(ii)	1(2)(i)	1(2)(ii)	2(1)	2(2)	
第1号住居跡							1	2												1	1	2	1	4		1
第2号住居跡																							1	1		
第3号住居跡				1(?)															1	1						
第4号住居跡	1								1											1						
第5号住居跡						1																1	1			
第6号住居跡							1																			1
第7号住居跡					1			1												2		1				1
第8号住居跡					1																					
第9号住居跡										2																
第10号住居跡							1													2		1		5		
第11号住居跡			4							2			1													
第12号住居跡		1								2		2			2	1	2									
第13号住居跡		1	1	4						3	2		5	1												3
第14号住居跡																								1		
第15号住居跡																		1		1		1				
第16号住居跡													1											1		
第17号住居跡																								1(?)		
第18号住居跡						1		1												1				1		2
第19号住居跡						1														1				1		
第20号住居跡						1		1												2	1	1	1	3		
第21号住居跡						1																				
第22号住居跡																				3		1	1	1	2	
第23号住居跡																						2		1		
第1号井戸跡					1(?)			1													1				1	4
第2号井戸跡										2												2				

	壺											蓋	盤	堝	鉄製品	土製品・石製品等
	A					BⅠ				BⅡ		BⅡ	BⅡ	BⅠ		
	1a(1)	1a(2)	2a(1)	2a(2)	3a	a	b	c	d	広口壺	長頸壺				鉄片 2	土錘－1
第1号住居跡															鎌(？)－1、鉄片－1	
第2号住居跡															鉄滓－2	
第3号住居跡																砥石－1
第4号住居跡									1		1(?)				刀子－1、鎌(？)－1、鉄滓－3	
第5号住居跡										3					鉄滓－2	
第6号住居跡										1				1	刀子－1、釘－1、不明－1	
第7号住居跡															鉄滓－1	土錘－1、砥石－1
第8号住居跡															刀子－1、釘－1、不明－1	砥石－1
第9号住居跡	1	1	4	1											刀子－1、釘－2、鉄滓－2	土錘－1
第10号住居跡										1(小)	1				刀子－1、鎌－1、釘－3、飾金具－1、不明－1、鉄片－1	土玉－4、砥石－1
第11号住居跡			1		1					1(極小)					刀子－1	砥石－1
第12号住居跡	1(?)														刀子－1、鎌－1、釘－1、鉄金族－1	小形手捏土器－4、土玉－1、砥石－1、石製紡錘車－1、土製紡錘車－1
第13号住居跡			1			1						1			不明－1	
第14号住居跡										1(小)					鉄滓－1、鉄片－1	
第15号住居跡								1		1						細棒状石製品－1、土錘－1
第16号住居跡		1				1									紡錘車－1	土錘－1
第17号住居跡															刀子－1、鋤－2、釘－1、はばき金具－2、鋲－1、錐(？)－1、丸のみ(？)－1、鉸具－1、鉄片－1	土錘－1
第18号住居跡																
第19号住居跡											1				釘－3、木工具の基部(？)－1	
第20号住居跡															釘－4	
第21号住居跡										1					鉄滓－1	土錘－1
第22号住居跡							1								刀子－1	土錘－1
第23号住居跡															平のみ(？)－1、釘－2、不明－1	石製勾玉－1、土錘－1、
第1号井戸跡										1(?)	1(?)				鉄片－2	小形手捏土器－1
第2号井戸跡										1			1			

の大半を占めるが、A類の甕が破片ながらもほとんど住居跡で共伴する。壺はＢII類の広口壺・長頸壺が第８号・第19号住居跡を除く全住居跡で出土している。高台付坏はまったく出土していない。

〔第III群〕

坏ＢＩa類・ＢIII類、甕ＢＩ類を中心に構成され、坏ＢＩc類、高台付坏ＢＩ類・ＢIII類を共伴するものである。住居跡によっては坏ＢII類、甕ＢII類、壺ＢII類、鉢ＢＩ類が混入する。この組合わせをもつものには第１号・第２号・第５号・第７号・第15号・第18号・第20号・第22号・第23号住居跡の９棟が該当し、第３号住居跡がこの群に含まれる可能性をもつ。

１号住居跡は、坏ＢＩa類13点・ＢＩc類４点・ＢIII類12点、高台付坏ＢＩ類２点・ＢIII類３点、鉢ＢＩ類３点、甕ＢＩ１類５点・ＢＩ２類４点・ＢII類１点で構成され、18号住居跡は、坏ＢＩa類16点・ＢＩc類６点・ＢＩe類１点・ＢIIa類３点・ＢIII類13点、高台付坏ＢＩ類４点・ＢIII類１点、鉢ＢＩ類２点、甕ＢＩ１類１点・ＢＩ２類１点・ＢII類２点で構成される。坏ＢII類は破片で出土したものも加えれば、ほとんどの住居跡に含まれるが、１～２点と数は少ない。ＢＩc類・ＢＩe類の坏は第15号住居跡を除く全住居跡でかなり混入する。坏ＢIII類は坏のなかでの割合がおおよそ半数近くを占めており、第５号・第22号住居跡では半数をやや越えている。高台付坏ＢＩ類・ＢIII類が共伴するものもこの群の特徴で、ＢＩ類に属すものは全住居跡で出土しており、坏部が埦形を呈するものが圧倒的に多い。高台付坏ＢIII類は相対的に出土量が少なく、第20号・第22号住居跡には認められない。ＢＩ類の甕では、口縁部が極端に短くなるものもみられ、第１号・第２号・第５号・第20号・第22号住居跡より出土し、ロクロ不使用のA′類の甕が第15号住居跡で１点認められる。ＢＩ類の鉢は第15号・第20号住居跡以外の住居跡で共伴する。

このほか、この群に属すものと思われる住居跡に第３号住居跡がある。第１号住居跡と重複関係にあり、第１号住居跡より新しい。当住居跡の組合わせは坏ＢＩc類１点・ＢIIb類１点・ＢIII類２点、鉢A類１点、甕ＢＩ１類１点・甕A′類１点で構成される。このように遺物は新旧のものが混在し、所属群を明確にし難いものであるが、第１号住居跡との重複関係からみて第III群以前には溯りえないことは明白である。ここでは一応第III群に包括する。

〔第IV群〕

坏はＢIII類のみで構成されるもので、甕はＢＩ類が少量混入する。この組合せをもつものは第17号住居跡１棟に限られ、坏ＢIII類７点、甕ＢＩ２類１点をもつ。ＢIII類の坏は第II－b群、および第III群にみられるものと色調・焼成が若干異なり、赤味が強くやや硬質である。ただ、器形そのものからは明確に区別できない。

〔4〕　出土土器に関する問題点

〔第Ⅰ群土器〕

第Ⅰ群土器はロクロ未使用の土師器を主体とし、ヘラ切り、および糸切りの須恵器坏を共伴するものである。Ⅰ－b群の住居跡ではロクロ使用の土師器坏・高台付坏・壺などを1～2点混入する。

本地方（北上川中流域をさす―以下同じ）における、成形にロクロを使用しない土師器については、近年の発掘例の増加によって資料が整い、器種・形態・調整技法などから何期かに分けうるものであることが分かってきた。(注1) 本遺跡の坏形土器の場合、すべて口径が15cm内外の小形のものであること、体部外面に段・沈線の痕跡をかすかにとどめるものが数例みられるものの、それ以外のほとんどのものがまったく段・沈線をもたないこと、底部が体部との境に画然とした綾をもった平底を呈すること、などからロクロ未使用土師器の最末期に位置づけられるものであろう。とくに、Ⅰ－b群の坏は、平底のものがほとんど占めており、先年対馬式として理解され、(注2) 最近では国分寺下層式の一範疇として論じられている(注3) 宮城県対馬遺跡出土のものと極めて類似する。共伴する須恵器坏は、Ⅰ－a群がヘラ切り再調整のものと無調整のもの、Ⅰ－b群がヘラ切り無調整のものと糸切り無調整のものというあり方を示している。本地方における遺跡で、ヘラ切り技法による須恵器坏に伴う土師器坏の内容をみた場合、ロクロ未使用坏に限られるものから、ロクロ未使用坏と使用坏が共伴するもの、ロクロ使用坏に限られるものまでかなりの相違がみられ、(注4) 集落の形式要因の違いを考えるとしても、ヘラ切り須恵器それ自体にかなりの時間的な幅をもっているものと思われる。このなかで、とくにⅠ－a群にみられるようなロクロ未使用土器と共伴するヘラ切り須恵器坏の生産地の検討は、本地方における窯業生産開始の年代、およびロクロ未使用土師器終末の年代と密接にかかわる問題である。この問題には諸説があるもの(注5) の決め手に欠けるためここでは触れない。ただ、土器の製作技法の共伴関係・組成内容は遺跡の性格が色濃く反映されるであろうし、まして土師器と須恵器の共伴比率の問題に至っては単に時間的な面からの検討のみでは解決されえないと考える。

また、Ⅰ－b群にみられるロクロ使用土師器は、第9号住居跡が切り離し技法が不明の再調整坏1点、第13号住居跡が頸部に平行叩き目痕をもつ大形壺1点、第12号住居跡が糸切り再調整の坏2点と埦形の坏部をもつ高台付坏1点とそれぞれ異なっている。とくに第13号住居跡にみられるように、大形の器形（壺）も坏と同時に出現していることに注目しておきたい。

〔第Ⅱ群土器〕

土器の製作にロクロが本格的にとり入れられた段階の土器群であるが、その進行過程によっ

て３つに細分してある。

II—a_1群はロクロ未使用土師器とロクロ使用土師器がほぼ均等に出土するものである。これは、ロクロ未使用からロクロ使用に移行する過渡的様相を示すもので、I—b群と共通する要素をもちながら断続することなく移行している。こうした転換期の様相を呈する代表的な遺跡例には、江釣子村猫谷地遺跡(注6)、北上市尻引遺跡(注7)、藤沢Ic遺跡(注8)、金ヶ崎町高谷野原II遺跡(注9)、および江刺平野上の沖積微高地面に立地する力石II遺跡(注10)などがあげられる。これらの諸遺跡では、ロクロ土師器坏・小形甕・長胴甕がロクロ未使用小形甕・長胴甕を混えて同時に出現し、共伴する須恵器坏はヘラ切りのものと糸切りのものの双方がみられる。本遺跡の第16号住居跡の場合は、ロクロ未使用の坏・甕・壺に伴ってロクロ土師器坏・小形甕・大形壺が出土している。ロクロ土師器坏は、I—b群にみられたものとは器形・再調整の手法が異なり、やや大形で回転ヘラケズリを施したものである。大形壺は第13号住居跡(I—b群)出土のものと同一であり、本遺跡では大形の器形へのロクロの導入が甕より壺が優先していたことを窮わせている。ロクロ未使用壺は口頸部に朱彩を施したものであり、本地方においてもロクロ未使用土器最末期の遺跡に多くの類例がみられる(注11)。須恵器坏は糸切り無調整のものに限られる。

II—a_2群の土器は、a_1群の土器群よりややロクロ使用土器の占める割合が増加し、坏では土師器より須恵器の方が多い。土師器坏はロクロ未使用のものとロクロ使用のものとが混在し、後者には再調整を施すもの（破片）に混って無調整のものもみられる。須恵器坏は糸切り無調整のものに限られる。土師器甕はロクロ未使用の長胴甕がかなり出土しているが、ロクロ調整のものもみられ、体部上半には平行叩き目痕を有する。須恵器の短頸壺の器形を模倣した内外黒色処理の土師器壺も出土している。

II—a_2群の土器はII—a_1群のそれとほぼ共通した内容をもっており、一括されうるものとも思われるが、ロクロ未使用坏・甕の占める割合の減少、須恵器坏の多量出土、ロクロ未使用壺の消滅等の新しい要素を勘案して２分した。

II—b群の土器では、ほとんどの器種にロクロ技術が本格的に取り入れられている。土師器坏はすべてロクロを使用したもので、再調整を施すものが大半を占める。この再調整の手法は手持ちヘラケズリによるものと回転ヘラケズリによるものとが混在する。両者の前後関係は不明であるが、I—b群の坏は前者に限定され、II—a群は後者のものがほとんどを占めるというような漠然とした傾向を窺うことができ、共伴遺物の検討、出土絶対量からみれば、回転ヘラケズリによる再調整は特定の時間的な幅に包括されうる手法といえる．甕はロクロ未使用の長胴甕が少量含まれるものの、多くはロクロ調整によるものに移行している。ロクロ成形の鉢がかなりの割合で出土し、内面ヘラミガキ・黒色処理のものもみられる。一方、高台付坏がまったく土器組成に加わっていないこともこの群の特徴として指摘できる。

また、赤焼き土器坏も少量含まれる。このような酸化炎焼成の坏は、所謂須恵系土器[注12]とか、太田方八丁遺跡であかやき土器[注13]とした須恵器の時代的変化として把えられうるものとは異なり、軟質無調整のもので、器形も土師器のそれと共通するもの（第28図等参照）が多い。なお、第6号住居跡より出土した堝は（第23図8）はやや特異であり、一般に次の第Ⅲ群土器と共伴するものとされている[注14]。形態上の特徴としては、江釣子村猫谷地遺跡・北上市相去遺跡出土のそれよりも口縁部が長く、体部も丁寧な刷毛目状ロクロナデで調整されるものである。

〔第Ⅲ群土器〕

土師器坏が糸切り無調整のものを主体とし、赤焼き土器坏がかなりの割合で共伴するものである。再調整を施す土師器坏も出土しているが、その出土比率はⅡ－b群に比べて極端に小さくなる。これは、製作技術の簡略化と大量生産に直接結びついたものと思われ、住居跡1単位内の土器の出土量が著しく多くなる。一方、須恵器坏の出土量は僅少であり、完形品ではほとんど出土していない。大形の長胴甕は、口縁部がやや短かくなっており、少量ではあるが極端に短くなるものもみられる。体部の形態はやや丸味が強くなり、体部に最大径をもち大きく脹むものが多くなる。体部下半に施されるヘラケズリも他のものに比べて粗い点に特徴がある。新しい要素として高台付坏が出現し、種別には土師器と赤焼き土器の双方がみられる。土師器高台付坏は高台部分が短くて坏部が器高の高い椀形を呈するものと、高台がやや長く坏部が普通の坏形を呈するものとに分かれるが、前者の出土量が多く、内外両面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。鉢も共伴するが、口縁部がゆるく外反して、直線的な体部を持つものが多くなる。

この群に多量に出土する糸切り無調整の赤焼き土器坏は、Ⅱ－b群のなかにも既にみられるように、ロクロ技術導入後あまり時間をおかずに出現しており、須恵器生産の系譜下のもとに出現したものと簡単に割り切ることができない。焼成方法のよりどころとされる黒斑の有無にもその双方がみられるし、黒斑がみられないものでも、赤褐色で硬質のものはほとんど認められず、燈色系統の軟質のものが目につく。ただ、第Ⅲ群土器は、本地方において本格的に須恵器生産が行なわれ、それが普及した時期に想定される可能性が強く、土器組成の内容からは赤焼き土器坏が須恵器坏を補完するかたちで出土していることに注目しておきたい。

また、第Ⅲ群土器は、坏形土器全体のなかでの赤焼き土器坏の占める割合、須恵器坏の共伴（いずれにしても量的には少ない）の有無、土師器高台付坏の形態、土師器長胴甕の口縁部の形態等を基準にして細分される可能性をもつが、こうした基準のすべてを充足させる共通の特徴を抽出し難いため一括してある。今後の課題としたい。

〔第Ⅳ群土器〕

坏が赤焼き土器坏のみで構成されるものであるが、これは第Ⅱ～第Ⅲ群にみられたものとは

異なり、赤褐色を呈する硬質の土器群である。これは桑原氏らのいう(注15)須恵系土器と同類のものと思われ、比較的器高の高い大形のものである。この群の土器を出土する住居跡は1棟と数が少く、遺物の絶対量も少い。このほか、須恵系土器と思われるものは他の遺構にも少量ながら認められ、第9・第10号溝の上層、第1号井戸の最上層（第93図17）などから小形の皿形を呈するものが出土している。

注1　高橋信雄　1979　「北上川中流域の古代集落」　日本考古学協会昭和54年度大会研究発表(予定)

注2　氏家和典　1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

注3　桑原滋郎　1976　「東北北部および北海道の所謂第1型式の土師器について」『考古学雑誌』第61巻4号

小井川和夫・高橋守克　1977　「宮城県対馬遺跡出土の土器」『宮城史学』5号

注4　ヘラ切り須恵器杯に伴う土師器坏が、ロクロ未使用坏に限られる住居跡には、江釣子村猫谷地遺跡・北上市藤沢Ⅰc遺跡などにみられ、ロクロ未使用坏とロクロ使用坏が共伴する住居跡は、猫谷地遺跡・北上市尻引遺跡などにあり、ロクロ使用坏に限られる住居跡は、水沢市真城ヶ丘団地遺跡・盛岡市太田方八丁遺跡などにみられる。

沼山源喜治　1977　「2　ロクロ未使用土師器の終末とロクロ土師器の始現の問題」『尻引遺跡調査報告書』　北上市教育委員会

注5　伊藤博幸　1976　「岩手県の古代土器生産について―須恵器とロクロ土師器の素描―」『岩手史学研究』第61号

沼山源喜治　1972　「2　ロクロ未使用土師器の終末とロクロ土師器の始現の問題」『尻引遺跡調査報告書』　北上市教育委員会

佐久間豊　1978　「奈良・平安期土器の型式学的分析―岩手県猫谷地遺跡出土土器の分析を通して―」『考古学研究』第25巻第2号

注6　前出注5　『考古学研究』第25巻第2号

注7　前出注5　『尻引遺跡調査報告書』

注8　（財）岩手県埋蔵文化財センター　1977　『藤沢Ⅰc・藤沢Ⅰd遺跡発掘調査現地説明会資料』

注9　前出注5　『岩手史学研究』第61号

注10　（財）岩手県埋蔵文化財センター　1979　「力石Ⅱ遺跡」『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』

注11　北上市藤沢遺跡・北上市尻引遺跡・水沢市石田遺跡などにみられる。

注12　工藤雅樹・桑原滋郎　1972　「東北地方における古代土器生産の展開」『考古学雑誌』57巻3号

岡田茂弘・桑原滋郎　1974　「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『宮城県多賀城跡研究紀要―Ⅰ―』

桑原滋郎　1976　「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』

注13　盛岡市教育委員会　1979　『太田方八丁遺跡―昭和53年度発掘調査概報』

注14　前出注5　『考古学研究』第25巻第2号

注15　前出注12と同じ

〔5〕遺跡の構造

前項において、土器群の構成についてみてきたが、ここでは、これらの土器群の前後関係と、それら土器群を伴う各遺構の居住区の構成とを検討するなかで、本遺跡の村落としての構造(注1)について若干触れてみたい。ただ、調査区域幅が17m強と狭い範囲に限定されているため、遺跡全体の構造の解明に強い制約が加わっていることは否めず、ここでは、単に調査区内に現われた各時期の遺構の配置形態についてのみ記述する。

第Ⅰ～第Ⅳ群に大別された土器群はそのまま時間的差におきかえることが可能であり、第Ⅰ～第Ⅳ期として把えられる。また第Ⅰ群・第Ⅱ群の各小群も一応時間的先後関係をもつものと思われ、第Ⅰ期はa→b群、第Ⅱ期はa_1…a_2群→b群の関係にある。しかも、第Ⅱ—a群は第Ⅰ—b群と共通する特徴をもつし、第Ⅲ群は第Ⅱ—b群的要素を多くもつことから、第Ⅰ群～Ⅲ群は第Ⅰ期→第Ⅱ期→第Ⅲ期として大きく断続することなく移行したものと思われる。ただ、Ⅲ群土器からⅣ群土器への移行が、資料的に僅少であることも伴って、時間的な間隙性をもつものなのか直接推移するものなのかを明確にできなかった。

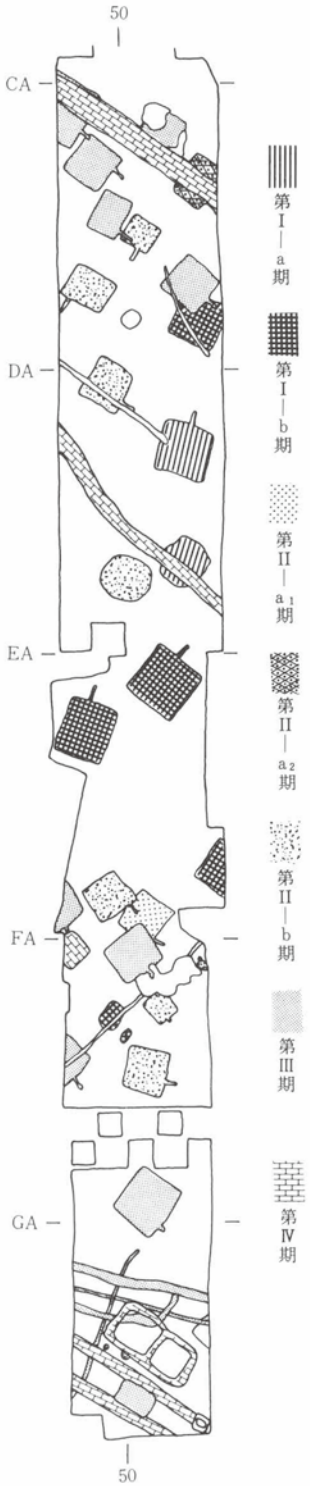
〔第Ⅰ期の集落構成〕

第Ⅰ期の遺構には、第9号・第11号・第12号・第13号の4棟の住居跡と第2号井戸跡が該当する。いずれも北辺にカマドを持つ住居跡で、Ⅰ—a期に相当する第11号住が北辺の中央部に付設され、Ⅰ—b期に相当する他の3棟が北辺やや西寄りに付設されている。Ⅰ—a期の11号住居跡はくり抜き式の煙道をもち、Ⅰ—b期の12号、13号住居跡のカマド側壁には土師器甕が芯材として利用されている。ほかに、第Ⅰ期の住居跡の特徴として、貯蔵穴状のピットをもたないことやほぼ明確な柱穴を確認できることなどがあげられる。また、竪穴の規模も大きく、床面積で24m²を越えるものに限られる。第2号井戸跡は第Ⅰ期の住居跡に伴うものであることは確実であり、構築年代はⅠ—a期に併行する時期と考えたい。

第Ⅰ期の遺構群は、発掘区のほぼ中央に位置し、井戸を間にして南北に2棟ずつ配置されている。井戸と住居との空間構成があまり顕著に現われておらず、第Ⅰ期の居住区が微高地中央の比較的狭い範囲に限られていたことを窺わせている。また、EG59住とした未調査の竪穴は検出作業時の出土遺物・規模などから第Ⅰ期に属すものと推定される。

〔第Ⅱ期の集落構成〕

第Ⅱ期の遺構には、第4号・第6号・第8号・第10号・第14号・第16号・第19号・第21号の8棟の住居跡と第1号井戸跡とがあげられる。このなかで先行するものと思われるⅡ—a期の遺構には第16号と第4号の2棟の住居跡があり、いずれも東辺南寄りにカマドが付設されてい



第120図
時期別遺跡構成図

る。第Ⅰ期の住居跡に比較してカマドの付設位置のみでなく、竪穴の規模もかなり縮少され、床面積が16.5～17㎡となる。Ⅱ—a期の2棟の住居跡にも若干の先後関係をもつものと思われ、a_1期の第16号住は平面形がほぼ正方形を呈し、後続するa_2期の第4号住は南北に長い長方形を呈する。

Ⅱ—a期の遺構群は第Ⅰ期の遺構群の居住区をそのまま継承することなく、その外側に位置している。第16号住は第Ⅰ期の居住区の南端と近接し、第4号住は北にややはずれて配置されている。

Ⅱ—b期の遺構には、第6号・第8号・第10号・第14号・第19号・第21号住居跡があり、カマドの付設位置によって、南辺にもつ第6号・第8号住居跡と、東辺にもつ第10号・第14号・第19号・第21号住居跡とに分けられる。竪穴の規模は床面積で7～19㎡と全体に小さなもので占められるが、個々の住居跡では、19号住・6号住の小規模のもの、14号住・8号住の中規模のもの、10号住・21号住の比較的大規模のものとに3分され、それぞれに斉一性が認められる。また、Ⅱ—b期の住居跡にみられる特徴として、明確な貯蔵穴状ピットを伴うようになることがあげられる。第1号井戸跡は第Ⅱ期の住居跡に伴うものであるが、いずれの小群に属すかは不明である。井桁最下部の出土遺物からみればⅠ—a期のものとも想定されるが、遺物が極めて僅少であることから確証に欠ける。すくなくても住居が増えるⅡ—b期には構築されていたことは確実である。

Ⅱ—b期の遺構群は、井戸を中央に据え、北側に3棟、南側にも同じく3棟の住居跡が位置し、竪穴の規模で3分されたものがそのまま南北に一棟づつ配置されている。その居住区は、Ⅱ—a期の居住区をそのまま重複して継続利用しているが、第Ⅰ期の居住区は空間として残される。こうした空間構成は、村落共同体成員の結集地点たる広場的な性格をもたせたものと思われる。したがって、共同生活の舞台となるべき空間の中央に位置する井戸は、当然のことながら共同体成

員の共同利用にかかわるものと把握するのが妥当であろう。

〔第Ⅲ期の集落構成〕

第Ⅲ期の遺構には、第1号・第2号・第3号・第5号・第7号・第15号・第18号・第20号・第22号・第23号の各住居跡があり、本遺跡では第Ⅲ期に入ってもっとも住居が増える。また、第7号→第11号→第6号・第8号の推移が想定できる4条の溝も第Ⅲ期に属するものと思われる。第2号・第23号住居跡が南辺の東寄りにカマドをもつ。それ以外の8棟の住居跡は東辺にカマドが付設されるもので、このなかには燃焼部の長い大形のカマドをもつものがみられるようになる。竪穴の規模は第Ⅲ期に入って大形化し、第1号・第7号・第18号・第22号住居跡など床面積で20㎡を超えるものが出現する。

第Ⅲ期の遺構群は、中央の空間をはさんで南北に5棟づつ配置される。Ⅱ—b期の居住区はほとんどそのまま継承して、その外側に拡大して占地している。このことは北側、南側ともいえ、とくに南側では微高地の縁辺部にまで拡がる。住居の増加がそのまま居住区の拡大につながったものと予想される。

多量の遺物を出土した第1号・第18号・第22号の大形住居跡はこのなかでも〝核〟となる住居とも想定でき、とくに農耕具をはじめとして多量の鉄器を伴出した18号住居跡は注目される。概して、第Ⅱ期にはほとんどみられなくなった鉄製品が第Ⅲ期に至って増加しており、新田開発をも含めた農業生産力の向上に大きく寄与したものであろう。

〔第Ⅳ期の集落構成〕

第Ⅳ期の遺構には第17号住居跡、第1号・第4号・第8号・第9号の4条の溝跡、第1号・第2号方形溝状遺跡がある。第17号住居跡は、竪穴の規模が小さく床面の高さも他の住居跡に比べてかなり高くなっている。カマドは検出されておらず、調査区外の南辺西寄り、ないしは西辺南寄りに付設されていることも考えられるが、むしろカマドをもたない住居となる可能性が強い。床面上には炉跡とも考えられる焼土面が数ヶ所認められる。

第Ⅳ期の遺構群は、住居跡が調査区南側に検出されたもの1棟に限られるため、遺跡全体における居住形態は不明である。ただ、調査区の北端と南端とに検出された大溝は、第Ⅳ期の集落を囲繞する区画溝としての機能が考えられ、居住区はこの内側に設定されていたことが予想される。また、南側大溝のやや北側に検出された2基の方形溝状遺構は、該期の埋葬形態を示す一形式とも想定できる。

以上の時期区分に入らなかった遺構に各種ピット類がある。出土遺物から時期がほぼ判明するものには、No.3ピット・No.6ピット・No.7ピットがあり、第Ⅱ—b期に属すものと思われる。No.2ピット・焼土遺構はNo.3ピットと有機的な関連をもつものと推定され同一時期に入れる。

このなかで、No.6ピット・No.7ピットは墓壙となる可能性もある。楕円形を呈する土壙であるNo.4ピット・No.5ピットは、その形態からみて墓壙となる蓋然性が強い。遺物がNo.5ピットの底面より出土したロクロ未使用甕の破片1点に限られることに疑問は残るが、一応第Ⅰ期に属すものと考えたい。もしNo.6ピット・No.7ピットも墓壙となるならば、第Ⅰ期・第Ⅱ期とも居住区の外方に墓域が設定されていることになる。なお、残るNo.1ピット・No.8ピットは所属時期が不明であり、No.8ピットは第9号溝に破壊されている。

注1　本地方における古代村落と律令制の関わりを検討したものに、最近では伊藤博幸氏の研究があり、本項での分析方法などはこれに啓発されるところが大きい。
伊藤博幸　1979　『奈良・平安時代の村落構造とその特質』考古学研究会岩手支部3月例会報告要旨

〔6〕遺跡の年代

前項において、土器の群別構成を検討し、それを伴出する遺構の先後関係を把握することによって遺跡の復元を試みた。これを通して得られた事柄をもとに、本遺跡の年代について述べ、まとめとしたい。

第Ⅰ期の遺構群は、ロクロ未使用土器の最末期の様相を呈するもので、最も古いものと思われる第11号住居跡でもヘラ切り須恵器坏を共伴する。第9号・第13号住居跡からはロクロ土師器が1点ずつ出土している。こうした土器組成は、一般集落において土師器製作にロクロ技術が導入される直前、直後の時期的段階を表わすものであり、ここでは、本地方の集落にロクロ技術が導入された時期が問題となる。9世紀の前半代、それも初頭に近い時期にロクロ土師器が出現することは、胆沢城跡（802年造営）、あるいは太田方八丁遺跡（志波城擬定地—803年造営）の出土遺物の内容からみてほぼ妥当な想定と思われ、胆沢城跡からわずか2.5kmの距離に位置する本遺跡には、こうした先進技術があまり時間をおかずに波及したであろうことは想像に難くない。ただ、Ⅰ—a期に属す第11号住居跡ではロクロ土師器をまったく含まず、ヘラ切り須恵器坏のみを混入する。本地方における窯業生産の開始は9世紀前半代の見分森窯業地の形成に始まるとされており[注1]、このヘラ切り須恵器坏が搬入品であるのか、それとも地元生産品によるものであるのかが問題となる[注2]。この問題に関しては明確な解答を提示できないが、第11号住居跡の竪穴の構造そのものは奈良時代的様相を色濃く残しているものと言える。ここでは一応、第Ⅰ期を9世紀の初頭、それもかなり早い時期に比定しておく。

第Ⅱ—a期は、土師器製作にロクロ技術が普及した段階のもので、ロクロ未使用土師器に混

って相当量のロクロ土師器を共伴する。一方、第II－b期の住居跡群においては、ロクロ土師器を主体とし、僅少のロクロ未使用土師器が付随するという点からみて土師器製作技法の転換期に属すとはいえ、ロクロ技術がほぼ定着した段階に位置づけられよう。第II期に属すロクロ土師器坏のほとんどに二次的なヘラ調整が施されていることもその特徴にあげられる。この時期的段階は第I期からそのまま移行するもので、第II期の遺構群は9世期前半代から中葉にかけてのものと考えられる。

第III期に属す遺構群と同様の土器を出土する代表的な遺跡には北上市相去遺跡(注3)がある。本遺跡で坏BIII類とした赤焼き土器は、相去遺跡でB_1土器としたものとほぼ共通しており、同集落内で須恵器生産が開始される以前の相去I期に属すものとされている。ただ、相去遺跡は集落内に登窯を伴った窯業集落的要素が強く、その土器組成の変遷が本地方のすべての集落にも該当するものとは考え難い。相去遺跡において、須恵器生産が本格的に展開される相去II期の段階では、B_1土器が消滅し、長胴甕は胴のふくらみが大きくなるものが多くなる。これに対して本遺跡の場合では、相去II期に相当するものと思われる口縁部が短くて体部が張り出す長胴甕を出土する住居跡でも、赤焼き土器坏が多量に伴出し、須恵器坏はほとんど含まれない。こうした事実からみれば、第III期にみられる酸化炎焼成の赤焼き土器坏が、いったんはすべて還元炎焼成に統一されたのちに須恵系土器へと質的転化をとげていく(注4)ものと考えるよりも、その焼成技法がそのまま主流を占めながら須恵器生産の衰退と期を一にして須恵系の赤焼き土器へと変遷していったものと解したほうが納得がいくようである。このことは、9世紀後半から10世紀の前半代にかけて隆盛期をむかえるとされる瀬谷子窯業地と極めて近接した距離にある本遺跡においてさえ、須恵器坏の共伴比率が極端に少ないという事実によっても裏付けられよう。ただ、こうした在り方は、遺跡のもつ特殊な性格・要因が反映した個別の事例となる可能性も否定できず、今後の類型化が可能な遺跡例の増加をまちたい。第III期は、第II期から断続することなく移行しており、その年代を9世紀後葉から10世紀中葉にかかる時期と理解しておく。

第IV期の遺構群に伴う出土遺物は極めて僅少であるため、その内容に関しては不明な点が多く、第III期とのつながりも明確にできない。前述したように、須恵系土器出現の契機を、須恵器生産の縮少化と、赤焼き土器にみられる酸化炎焼成の一般化とが結びついたものと考えることができるならば、本遺跡における第III群土器と第IV群土器との間にあまり長い時間的な間隙性をもつものとは思われない。第III期と第IV期の間に糸切り無調整の土師器坏を主体にし、須恵器坏が相当量共伴する土器群が介在する可能性を完全には否定できないが、この場合でも赤焼き土器坏が、須恵器との消長関係をみせながらも還元炎に統一されることなく、それらのなかに混入する条件が整っているものと考えたい。このように考えればこそ、本地方において、須恵器と赤焼き土器とが混在し、さらには須恵系土器と区別されうるような黒班をもつ赤焼き土

器と須恵系土器が混在するというような土器組成のあり方に一定の説明がつくのではなかろうか。絶対年代に関しては明確な根拠をもなたいが、第Ⅳ期を10世紀の後葉に比定しておく。

最後に、第Ⅰ期と第Ⅱ期との関連について若干気付いた点を提起しておきたい。第Ⅰ期の住居跡はすべて北辺にカマドをもつ大形のもので、住居の構造、カマドの構築法などからみて入念な配慮がみられるものである。これに対し、第Ⅱ期の住居跡は東辺、ないしは南辺にカマドを付設されるもので、住居の構造、カマドの構築法にも第Ⅰ期と比べてかなり簡略化が進められている。両者の違いは、出土土器そのものにも大きく反映しており、そこにはっきりとした文化的な差異を認めることができる。

さて、本地方において奈良時代のものとされる住居跡は、北辺にカマドをもち、4本の柱穴は方形プランのほぼ対角線上に位置するのが通例となっている。この北向きの煙道は、冬期に北西の季節風が強烈に吹きまくる本地方においては極めて不合理な実状と言わなければならず、東向き、ないしは南向きの煙道こそ合理的というものであろう。この問題に関しては極めて傾聴に値する見解（松本：1976）がある。(注5) それによると、北向きの煙道をもつことの合理性は、稲作にとって苛酷な自然環境にあった辺境地における、太陽に対する異常なまでの信仰に基づくものとし、こうした信仰は、村落共同体の規制に裏打ちされて長年の精神的な伝統として守られ続け、古代律令制の関与によって変換期をむかえたとするものである。ひるがえって、こうした変遷期における集落構成員の質的な変化（在地の人間→新興の移住者）にまで言及している。

前述したように、本遺跡は胆沢城跡と近接しており、こうした文化的な相違が、律令的収取体系の成立に影響されていることは疑いない。ただ、ここに人間の変化までを介在させることには問題がある。もちろん、和名類聚抄江刺郡の条にもみられるように、かなりの移住者が存在したであろうことは納得できるが、むしろ、このような異質の移住者は新たな土地を開拓して周囲に拡散したものと思われ、本遺跡のように既に一定の生産基盤が確立していたような集落では、先住者が文化形態を変質させてそのまま定着したものと考えたい。そして、さらに憶測をすすめるならば、古代北東北にある程度の余剰生産物を生み出す生産基盤が既に確立していたことこそが、(注6) 所謂蝦夷地への東征を引きおこす大きな要因なのであろうし、形成条件の異なる両者の集落の間には、須恵器と赤焼き土器の共伴比率などにみられる微妙な土器組成の違いが予想されうるものである。今後、こうした差異をみいだしていく視点も、集落構造の解明に必要なものと思われる。

（1979．9）

注1　伊藤博幸　1976「岩手県の古代土器生産について―須恵器とロクロ土器の素描―」『岩手史学研究』第61号

注2　前項〔4〕、注5参照

注3　岩手県教育委員会・北上市教育委員会　1974『相去遺跡群発掘調査現地説明会資料』
高橋信雄　1977「岩手県のロクロ使用土師器について」『考古風土記』第2号

注4　桑原滋郎　1976「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』

注5　松本安司　1976「江刺市宮地遺跡に関する若干の問題」『フィールド・ノート』第22号

注6　胆沢城跡周辺の遺跡において、8世紀後半代に中心をおくものと思われるロクロ未使用土器の最末期（東北南部の国分寺下層式類似）の様相を呈する遺跡は、それ以前のものとに比べて遺跡数が著しく増加し、立地面も大きく拡大する（低位段丘の縁辺部から段丘内部への浸透・中位段丘縁辺部および沖積地への新たな進出）。また、須恵器や鉄器の普及など新しい要素もみられるようになる。こうした変化は、当時宮城県大崎平野まで進出していた律令体制の関与によるというよりも、所謂蝦夷地における内的エネルギーの拡散と考えたい。

〔付記〕

各遺構の出土遺物のなかで、とくに記述しなかったものに骨片と足方（あしかた）があり、これらの遺物は、有識者の鑑定結果がでるまではその詳細を明確にできなかったために意識して記述をさけたものである。

骨片は、第2号井戸跡出土のものを除き、すべて細粒状ないしは粉状の微細なものである。これらは、図化はもちろんのこと写真撮影も不可能なものに限られるが、ほぼ形状が判明する第2号井戸出土の骨は写真のみを図版に掲載してある。なお、これらの骨片は岩手大学農学部の兼松教授に鑑定を委託しており、その結果は巻末に付した。出土遺構名、および出土地点はそちらを参照されたい。

足方㊟としたものは、細長の自然礫で、土錘と同じく漁獲用網の錘としての機能が想定できるものである。同形の石が3棟の住居跡よりまとまって出土しており、その出土形態からみて人為的にもちこまれたものと考えられる。図版38に出土遺構名・石質などを記載してある。

㊟　この種の石を遺物としたのは、前出の『主要地方道一関・北上線関連遺跡調査報告書』の考察によるものである。なお、「足方」という呼称は同書にならって佐島与四衛門氏の教えにしたがった。

分析・鑑定結果報告

本書を作成するに際しては、各種データの蓄積とその公開を考慮し、以下の資料について分析と鑑定を委託した。ただ、日程の関係でこのデータを本文の記述に利用できなかった。ここでは、その結果のみを記載する。

〔分析１〕　花粉分析

この分析には第１号井戸跡の井桁内最底部の粘土（№16～17層）を用いた。当井戸跡は、考古学的には平安時代の始めにその構築年代が与えられるもので、遺跡の古環境を知る手がかりを得ようとしたものである。

〔分析２〕　鉄滓の組成分析およびＸ線回析

この分析には、第８号住居跡より出土した鉄滓を用いた。同時に、ルツボと思われる土器の付着物とルツボ本体をも分析した。このルツボは今回の発掘調査によって出土したものではなく、江刺市教育委員会が調査した市道部分（第５図参照）の排土より表採したものである。これを同時に分析したのは、本遺跡より多量の鉄器が出土していることから、集落内に工房祉の存在が予想されたことによっている。

〔鑑定１〕　植物遺体

第１号・第２号井戸跡から多量の植物遺体が出土している。このなかで、種子を中心に鑑定を委託した。双方の井戸跡からは、種子のほかに樹皮・木葉などが出土しているが、これらは遺存状況が不良のため鑑定できなかった。

〔鑑定２〕　獣骨

第２号井戸跡を中心に多量の骨が出土しており、これらの骨の動物名・および部位の鑑定を委頼した。

分析・鑑定結果報告

本書を作成するに際しては、各種データの蓄積とその公開を考慮し、以下の資料について分析と鑑定を委託した。ただ、日程の関係でこのデータを本文の記述に利用できなかった。ここでは、その結果のみを記載する。

〔分析１〕　花粉分析

この分析には第１号井戸跡の井桁内最底部の粘土（№16～17層）を用いた。当井戸跡は、考古学的には平安時代の始めにその構築年代が与えられるもので、遺跡の古環境を知る手がかりを得ようとしたものである。

〔分析２〕　鉄滓の組成分析およびＸ線回析

この分析には、第８号住居跡より出土した鉄滓を用いた。同時に、ルツボと思われる土器の付着物とルツボ本体をも分析した。このルツボは今回の発掘調査によって出土したものではなく、江刺市教育委員会が調査した市道部分（第５図参照）の排土より表採したものである。これを同時に分析したのは、本遺跡より多量の鉄器が出土していることから、集落内に工房祉の存在が予想されたことによっている。

〔鑑定１〕　植物遺体

第１号・第２号井戸跡から多量の植物遺体が出土している。このなかで、種子を中心に鑑定を委託した。双方の井戸跡からは、種子のほかに樹皮・木葉などが出土しているが、これらは遺存状況が不良のため鑑定できなかった。

〔鑑定２〕　獣骨

第２号井戸跡を中心に多量の骨が出土しており、これらの骨の動物名・および部位の鑑定を委頼した。

宮地遺跡資料花粉分析報告書

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．試表

第1表

遺　跡　名　称	採　取　地　点	土　　質	微化石含有数 個/g
宮　地　遺　跡	第1号井戸No.16層	灰色・粘土（泥？）	6.8×10^3

2．分析方法

分析方法は下記の手順で行なった。

○試料を乾燥し、0.5mm以下に粉砕。

○試料15g秤量し、ポリビーカーにとる。

○HCℓ、HFを加え、湯煎器上にて加温する。(10～20分間)

○冷却後、遠心管に移し、遠心分離し、上澄液をすてる。

○水を加えよく攪拌し、遠心分離後、上澄液をすてる。2～3回くり返す。

○水洗をくり返す。

○重液を加えよく攪拌し、遠心分離、浮上物をていねいに採取する。

○水を加えよく攪拌し、遠心分離、上澄液をすてる。水洗2～3回。

○アセトリシス液を加え、湯煎器上にて加温する。(10～20分間)

○冷却後遠心分離し、上澄液をすてる。水洗2～3回。

○10%KOH液を加え、湯煎器上にて加温する。10～20分間。

○冷却後、遠心分離し、上澄液をすてる。(水洗上澄液がきれいになるまで)

○グリセリンゼリーを封入剤としてプレパラートを作製。

○顕微鏡下にて鑑定。

3．分析結果

花粉分析の結果は、鑑定した花粉と胞子化石の総数を基数にして百分率で表わし、付表に示した。その中から主な化石についてダイアグラムを作製し、付図に示した。同様に写真図版を作製した。(写真は編集の都合上、図版43に掲載した)

このたび分析によって検出された花粉と胞子化石には、次のものがあげられる。

ＡＰ－１［針葉樹花粉］

Pinus(マツ属)、Taxodiaceae(スギ科)、Cryptomeria(スギ属)

ＡＰ－２［広葉樹花粉］

Jaglans(クルミ属)、Pterocarya(サワグルミ属)、Alnus(ハンノキ属)、Betula(シラカンバ属)、Carpinus(クマシデ属)、Castanea(クリ属)、Fagus(ブナ属)、Cyclobalanopsis(アカガシ亜属)、Lepidobalanus(コナラ亜属)、Aphananthe(ムクノキ属)、Celtis（エノキ属）、Ulmus(ニレ属)、Zelkova(ケヤキ属)、Moraceae(クワ科)、Aesculus(トチノキ属)、その他

ＮＡＰ［草木花粉］

Polygonum(タデ属)、Chenopodiaceae(アカザ科)、Crusiferae(アブラナ科)、Cardnoideae(キク亜科)、Artemisia(ヨモギ属)、Gramineae(イネ科)、Cyperaceae(スゲ科)、Sagittaria(オモダカ属)、その他

ＦＧＰ［形態分類花粉］

Tricolporopollenites(三溝孔型花粉）その他

ＦＳ［シダ類胞子］

Polypodiaceae(ウラボシ科)、Monolete spore(単条溝型胞子)、Trilete spore(三条溝型胞子)

次に各試料の花粉構成、古環境等について証述する。

針葉樹花粉は全体の3.8％と少なく、マツ属0.9％、スギ科2.6％、スギ属0.4％、等が検出された。広葉樹花粉は全体の11.5％であり、クワ科6.0％のほかに、ニレ属、コナラ亜属、ブナ属、クリ属、ハシバミ属、ハンノキ属等が低率で検出された。草本花粉は全体の76.1％を占め、イネ科28.6％、ヨモギ属29.5％、アカザ科13.2％、オモダカ属1.1％、アブラナ科1.3％・スゲ科0.9％、等が検出された、形態分類とシダ類胞子は少ない。

古環境はイネ科、ヨモギ属、アカザ科、が主体となった草地と云えよう。又、オモダカ属の出現は水の影響を受けていたことを示している。草地をとりまく樹木は比較的少なく、マツ属、スギ科、スギ属、クワ属、クワ科、ニレ属、コナラ亜属、ブナ属、クリ属、ハシバミ属、ハンノキ属等が僅かに生育していたものと考えられる。

付図－Ⅰ　落合Ⅱ遺跡及び宮地遺跡主要花粉胞子化石ダイアグラム

（分析担当：パリノ・サーヴェイ株式会社調査部）

Pollen and Spores ＼ Sample No.	宮地第1号井戸跡	Pollen and Spores ＼ Sample No.	宮地第1号井戸跡
Taxodiaceae ＋ Crvptomeria		Artemisia	29.5%
Alnus	＋	Gramineae	28.6%
Castanea	＋	Cyperaceae	＋
Fagus	＋	Sagitaria	
Lepidobalanus	＋	Monolete spore	
Ulmus ＋ Zelkova		Trilete spore	＋
Moraceae		Σ AP－1	
Polygonum	＋	Σ AP－2	
Chenopodiaceae		Σ NAP	76.1%
Crusiferae		Σ FGP	
Carduoideae	＋	Σ FS	

0　30%　＋：1％未満の検出

付表　宮地遺跡試料花粉分析結果一覧表（単位%）

Pollen and Spores ＼ Sample No.		宮地第1号井戸跡	Pollen and Spores ＼ Sample No.		宮地第1号井戸跡
Pinus		0.9	Crusiferae		1.3
Taxodiaceae		2.6	Carduoideae		0.4
Cryptomeria		0.4	Artemisia		29.5
Σ AP－1	(N)	9	Cichorioideae		0.4
	(%)	3.8	Cramineae		28.6
Alnus		0.9	Cyperaceae		0.9
Corvlus		0.4	Sagittaria		1.7
Castanea		0.9	Σ NAP	(N)	178
Castanopsis		0.4		(%)	76.1
Fagus		0.4	Triporopollenites		1.3
Lepidobalanus		0.9	Tricolpopollenites		0.9
Ulmus		1.3	Tricolporopollenites		1.7
Moraceae		6.0	Inaperturopollenites		1.7
Hamamelidaceae		0.4	Σ FGP	(N)	13
Σ AP－2	(N)	27		(%)	5.6
	(%)	11.5	Monolete spore		2.6
Σ AP	(N)	36	Trilete spore		0.4
	(%)	15.4	Σ FS	(N)	7
Polygonum		0.4		(%)	3.0
Polygonum		0.4	Σ Pollen & Spores		234
Chenopodiaceae		13.2			

鉄滓の組成分析およびX線回析

岩手県工業試験場

1　鉄滓の組成分析

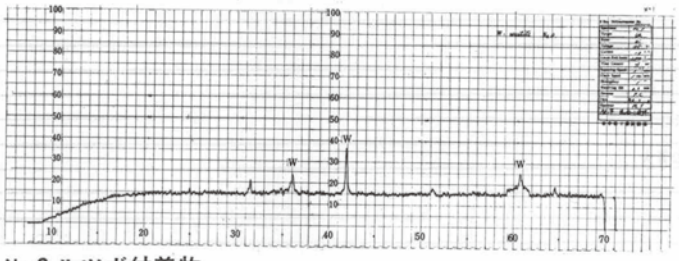
	X線回折	化学分析					蛍光X線	検出元素
	Wustite	FeO	MnO	SiO_2	TiO_2	C	分析	(LiF)
宮地遺跡 第8号住居跡	○	72.52	0.13	14.52	0.15	0.11	Cr.Ca.K	Al.Ba.Sr

宮地遺跡の試料は、砂鉄等の原料に木炭を混ぜて製鉄するタタラ吹法と呼ばれる方法で得られた鉱滓と思われる。X線回折によれば、その主成分はWustite(FeO)である。

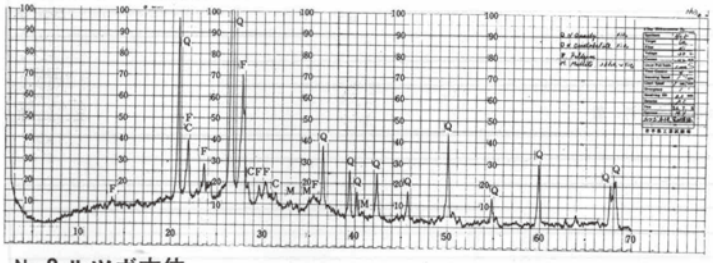
2　宮地遺跡のルツボおよび付着物

X線回折によれば、両者共、石英クリストバライト、長石、ムライト等、焼成された粘土鉱物の組成がみられ、石英長石等はルツボに多く、付着物にはムライトが多く認められる。付着物の黒い部分は不明である。

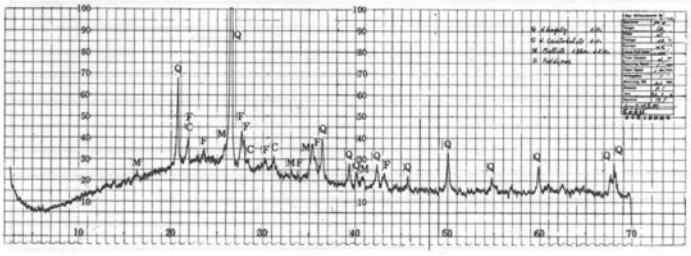
No. 1 第8号住居跡出土鉄滓



No. 2 ルツボ付着物



No. 3 ルツボ本体



No. 1 測定条件

Target	Cu
Filter	Ni
Voltage	35 KV
Current	10 mA
Count Full Scale	2,000%
Time Consant	2 sec
Scanning Speed	1°/min
Chart Speed	1cm/min
Divergency	1°
Receiving Slit	0.3 mm
Detector	P.C

No. 2・No. 3 測定条件

Target	Cu
Filter	Ni
Voltage	30 KV
Current	24 mA
Count Full Scale	1,000%
Time Consant	2 sec
Scanning Speed	1°/min
Chart Speed	1cm/min
Divergency	1°
Receiving Slit	0.3 mm
Detector	P.C

植物遺体鑑定一覧表

岩手県文化財審議会委員　農学博士　村　井　三　郎

No.	遺構名	出土地点	鑑定結果	No.	遺構名	出土地点	鑑定結果	No.	遺構名	出土地点	鑑定結果
1	第2号井戸跡	No.16層	ノモモ種皮	9	第2号井戸跡	No.12層	ノスモモ種皮	17	第2号井戸跡	No.12層	オニグルミ種皮
2	〃	No.16層	ノモモ種皮	10	〃	No.16層	マタタビ果肉(?)	18	第1号井戸跡	No.16層	ノモモ種皮
3	〃	No.15層	ノモモ種皮	11	〃	No.12層	不明種皮	19	〃	No.16層	ノモモ種皮
4	〃	No.14層	ノモモ種皮	12	〃	No.16層	オニグルミ種皮	20	〃	No.16層	ノスモモ種皮
5	〃	No.13層	ノモモ種皮	13	〃	No.15層	オニグルミ種皮	21	〃	No.16層	オニグルミ種皮
6	〃	No.12層	ノモモ種皮	14	〃	No.14層	オニグルミ種皮	22	〃	No.14層	オニグルミ種皮
7	〃	No.16層	ノスモモ種皮	15	〃	No.14層	オニグルミ種皮	23	第23号住居跡	床面直上	オニグルミ種皮
8	〃	No.16層	ノスモモ種皮	16	〃	No.12層	オニグルミ種皮	24	第16号住居跡	No.3層	ノモモ種皮

所　見

植物遺体はオニグルミ、ノモモ、ノスモモ、マタタビ？の4種のみである。パリノ・サーヴェイ社の花粉分析では、樹木にアカマツ、スギ、ハンノキ、クリ、コナラ、ハルニレ、ヤマクワが多く、草木にアカザ、アブラナ科、ヨモギ、イネ科、スゲ類、オモダカが多いようである。これを合計して推定するとオニグルミ、ノスモモ、マタタビ？、スギ、ハンノキ、ハルニレ、ヤマクワ、オモダカの存在することにより水辺に近在し、アカゲ、アブラナ科、ヨモギ、イネ科、スゲ類の存在により草原(田・畑など)にも近在したほか、周囲にはアカマツ、コナラ、クリなどの低山地林が存在していたことを示めしている。これらにより、現在の気候と殆んど同様であったものと推定される。

獣骨鑑定一覧表

岩手大学農学部教授　家畜解剖学教室　兼　松　重　任

No.	遺構名	出土地点	鑑定結果
1	第2号井戸	No.12層	鹿の角
2	〃	〃	馬の右前腕骨遠位端、No.4の骨の遠位端と思われる。骨幹の中間部はない。
3	〃	〃	牛左肋骨近位端。現代の牛とくらべると大型である。刀痕あり。
4	〃	〃	馬の右前腕骨近位端。尺骨肘頭は欠けている。前腕骨間隙下端の左右幅は43.7cmで現代馬の6頭の平均値±標準偏差は59.1±7.5mmと比べると、その7割大である。
5	〃	〃	牛肩甲骨中片。No.5とNo.6は同一の骨の一部である。
6	〃	〃	牛の右肩甲骨遠端。この肩甲頸前後幅は61.7mmで現代の牛の5頭の肩甲頸前後幅の平均値±標準偏差67.7±4.4mmと比べて小型ではあるが、品種差を考慮に入れると、それ程小さいとはいえない。
7	〃	〃	牛胸椎椎体
8	〃	〃	小型馬の頸椎関節突起
9	〃	〃	馬胸椎椎体前半分
10	〃	〃	小型馬肩甲骨遠位端
11	〃	〃	牛後位頸椎破片
12	〃	〃	牛頸椎関節突起
13	〃	〃	牛第3頸椎後関節突起
14	〃	〃	大動物要椎椎体
15	〃	〃	中型動物の腸骨である公算大
16	〃	〃	大動物頸椎関節突起
17	〃	〃	大動物腸骨破片
18	〃	〃	大動物骨片
19	〃	〃	大動物骨片
20	〃	No.14層	馬の肋骨
21	〃	No.12層	大動物骨片
22	〃	〃	大動物(牛と思われる)肩甲骨の一部
23	〃	〃	
24	〃	〃	
25	〃	〃	
26	〃	〃	
27	〃	〃	
28	〃	〃	馬の肋骨
29	〃	No.14層	大動物の骨片
30	第18号住居跡	Pit　4内	小動物の脛骨近位端
31	第10号　〃	No.2層	小動物の骨片
32	第16号　〃	床面直上	中型動物の長骨骨片
33	第18号　〃	カマド周辺	中型動物の上腕骨近位端
34	第18号　〃	カマド内	中型動物の長骨骨片
35	第13号　〃	Pit　11内	中型動物の頭蓋骨骨片
36	第1号井戸	No.16層	大動物頭蓋骨骨片
37	第1号　〃	〃	中型動物骨片
38	第1号　〃	〃	骨片
39	第1号　〃	No.17層	骨片
40	第13号住居跡	Pit　6内	小型動物長骨骨片
41	第13号　〃	床面直上	中型動物長骨骨片

写　真　図　版

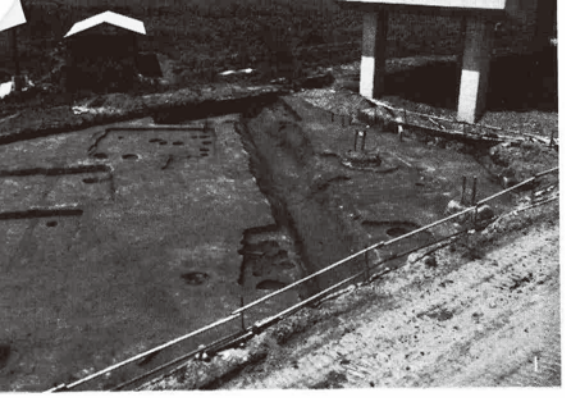
A．宮地遺跡　B．落合II遺跡　C．落合Ⅰ遺跡
D．力石遺跡　E．鴻ノ巣館遺跡　F．中屋敷遺跡

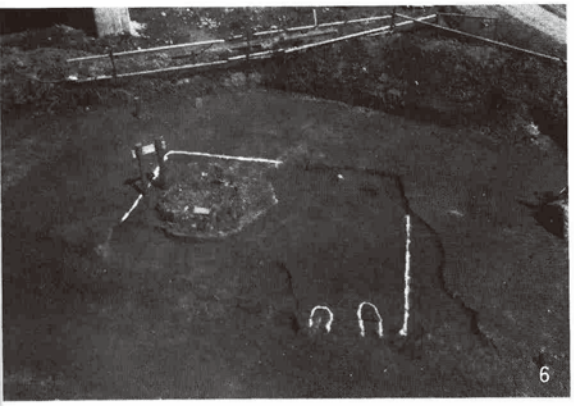
江刺市愛宕地区空中写真
（新幹線にかかわる遺跡）

遺跡遠景

遺跡近景

C・D区
作業風景





1.C 区 全 景
（東 よ り）

2.C・D区全景
（北西より）

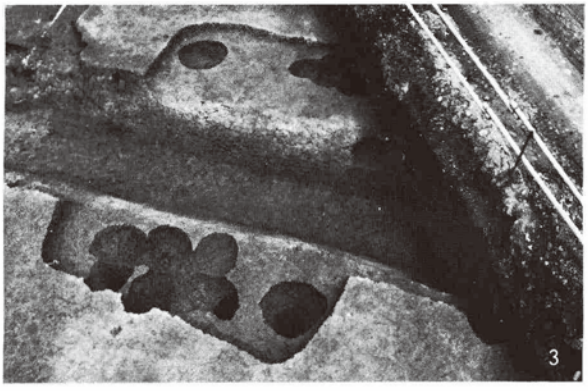
3.第1号住居跡
（東 よ り）

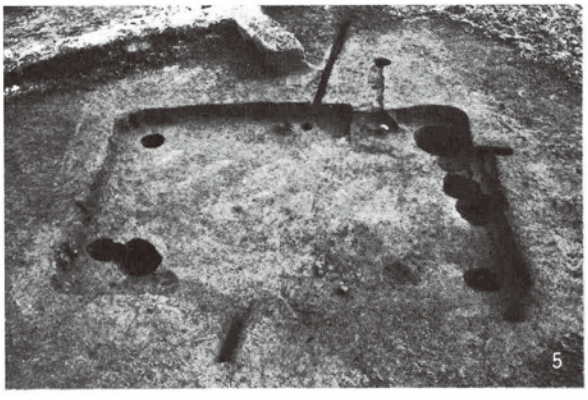
4.第1号住居跡
第3号住居跡
（北西より）

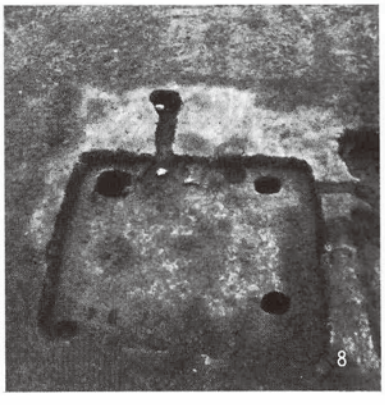
5.第1号住居跡
カ マ ド
（西 よ り）

6.第2号住居跡
（南 よ り）

7.第3号住居跡
（南 よ り）







1.第3号住居跡
（西より）

2.第3号住居跡
カマド
（西より）

3.第4号住居跡
（南より）

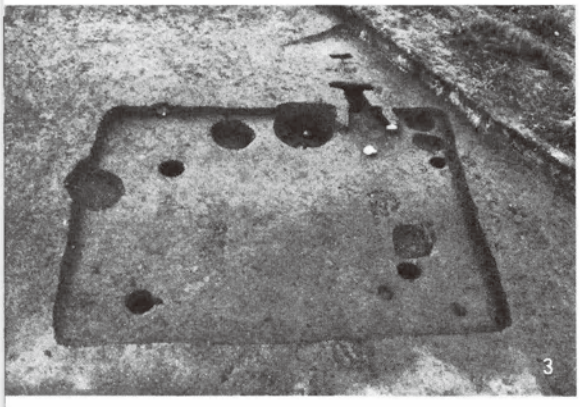
4.第4号住居跡
遺物出土状況
（西より）

5.第5号住居跡
（西より）

6.第5号住居跡
カマド
（西より）

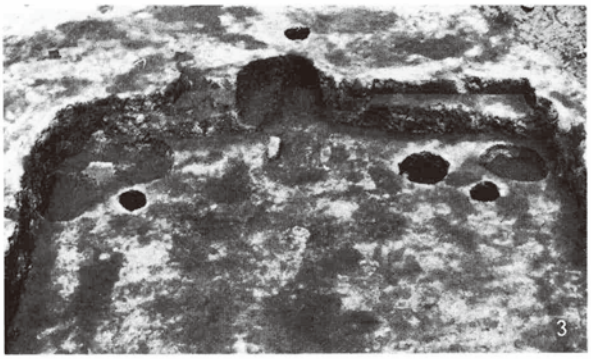
7.第6号住居跡
第5号住居跡
（東より）

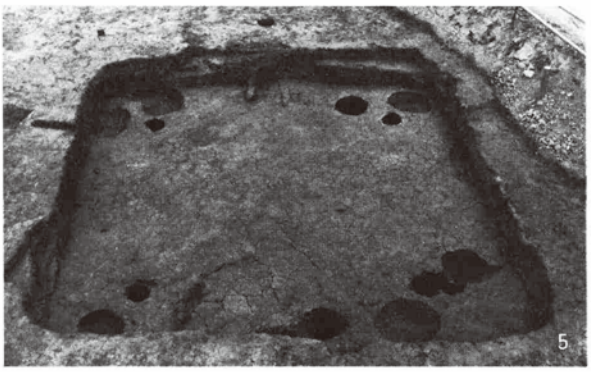
8.第6号住居跡
（南より）

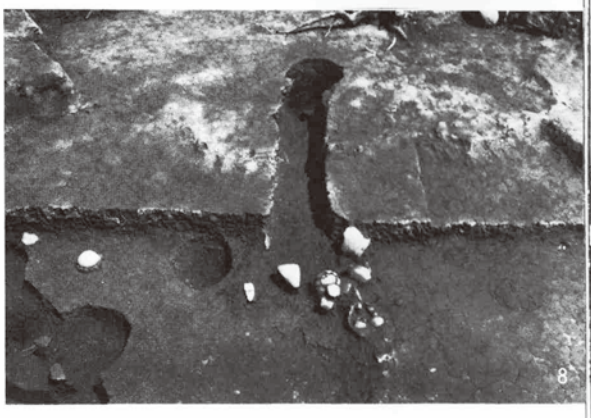


1. 第７号住居跡(西より)
2. 第７号住居跡(西より)
カ　マ　ド
3. 第８号住居跡(北より)
4. 第８号住居跡(東より)
No. 1 ピット
5. 第９号住居跡(南より)
6. 第９号住居跡(南より)
カ　マ　ド
7. 第10号住居跡(西より)
8. 第10号住居跡(西より)
カ　マ　ド
9. 第11号住居跡(西より)
炭化材出土状況

図版４







1.第11号住居跡(西より)
炭化材出土状況

2.第11号住居跡(西より)

3.第11号住居跡(南より)
北　　半

4.第11号住居跡(南より)
カ　マ　ド

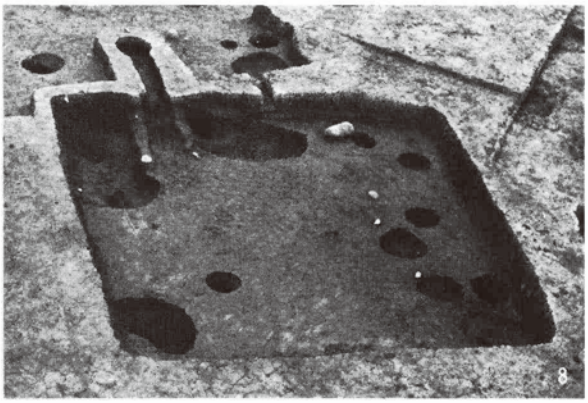
5.第11号住居跡(南より)

6.第12号住居跡(南より)

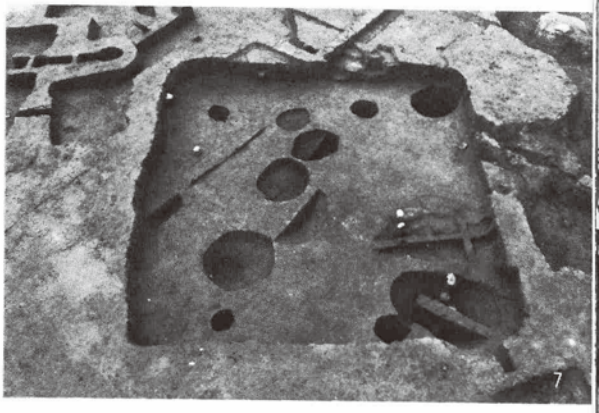
7.第12号住居跡(南より)
遺物出土状況

8.第12号住居跡(南より)
カ　マ　ド

図版 5

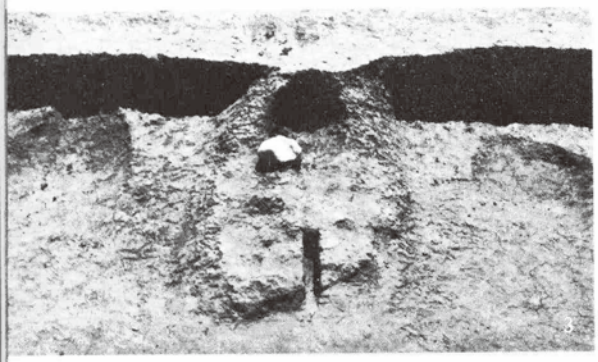


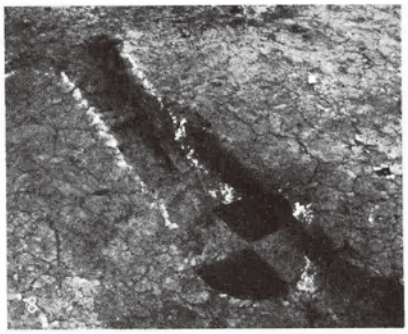
1. 第13号住居跡遺物出土状況(東より)
2. 第13号住居跡(南より)
3. 第13号住居跡カマド側壁(東より)
4. 第13号住居跡カマド側壁(南より)
5. E・F区全景(北西より)
6. E・F区全景(北より)
7. E区全景(西より)
8. 第14号住居跡(西より)
9. 第14号住居跡カマド(西より)



1.第15号住居跡(北西より)
2.第15号住居跡カマド(西より)
3.第16号住居跡(西より)
4.第16号住居跡カマド(西より)
5.E区西側(南東より)
6.第17号住居跡(南東より)
7.第18号住居跡(南より)
8.第18号住居跡カマド(西より)

図版 7





1.第18号住居跡
（西 よ り）

2.第19号住居跡
（東 よ り）

3.第19号住居跡
カ マ ド
（西 よ り）

4.第20号住居跡
カ マ ド
（西 よ り）

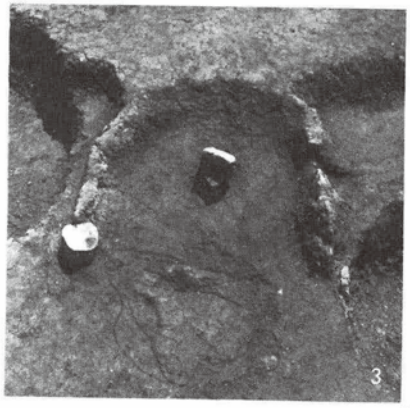
5.第20号住居跡
（ 東 よ り）

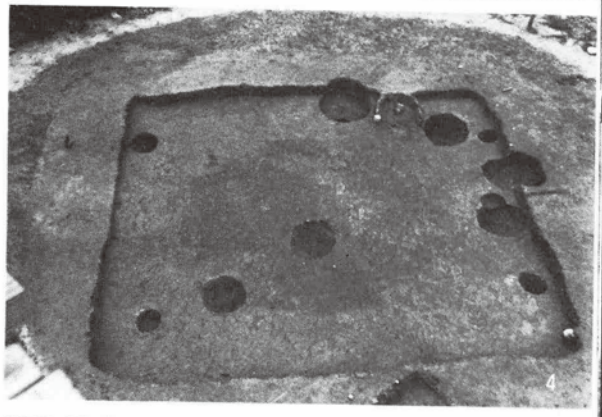
6.第20号住居跡
（北西より）

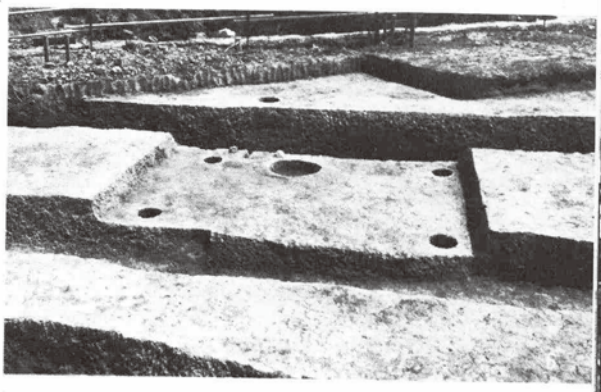
7.第21号住居跡
（南 よ り）

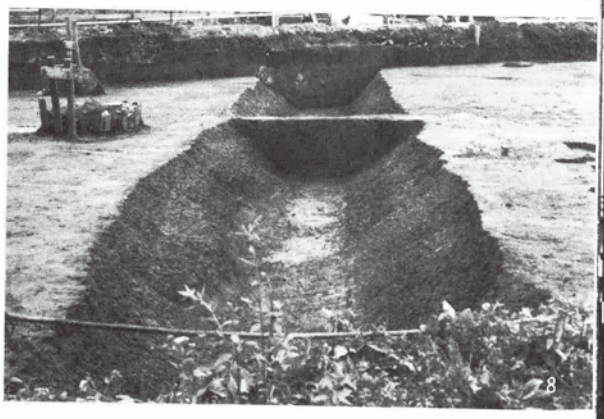
8.第21号住居跡
（東 よ り）

9.Ｅ・Ｆ区全景
（東 よ り）









1.E・F区全景(南東より)

2.F 区 全 景(北西より)

3.第22号住居跡カマド(西より)

4.第22号住居跡(西より)

5.第23号住居跡(西より)

6.第23号住居跡(北より)

7.No.2・No.3ピット(東より)

8.第 1 号 溝 跡(西より)

図版 9

G 区 全 景
（北西より）

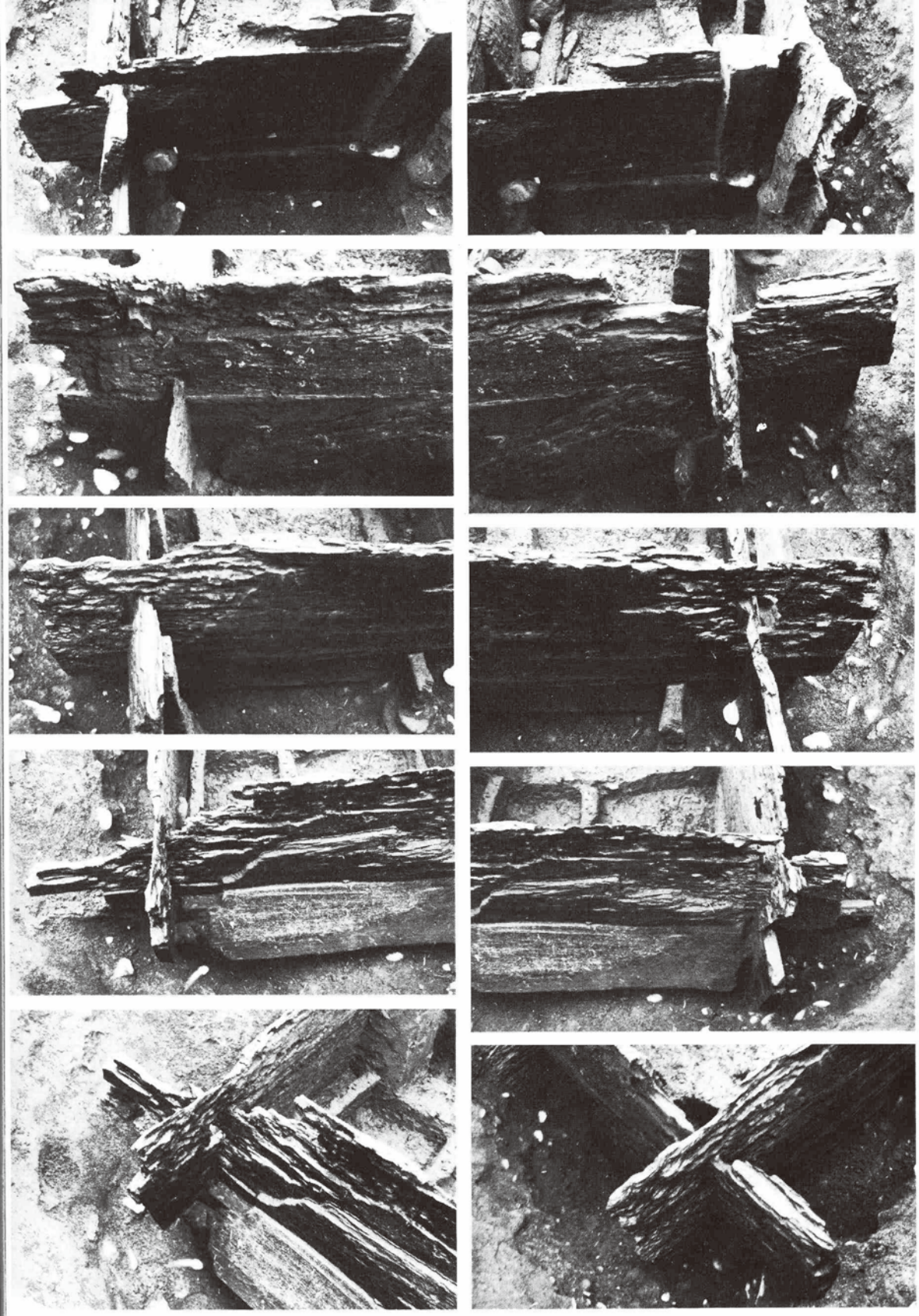
方形溝状遺構
（東 よ り）

第9号・第10号溝跡
（東　よ　り）

第Ｉ号井戸跡
堆　積　土
（南 よ り）

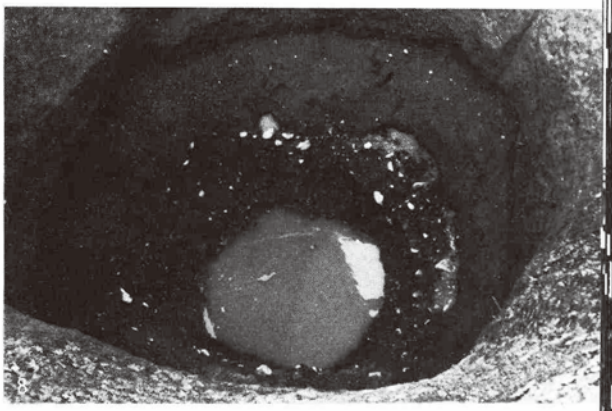
第Ｉ号井戸跡
青灰色粘土
（東 よ り）

第Ｉ号井戸跡
全　　景
（西 よ り）



第1号井戸跡井桁　　上より　北面
検　出　状　況　　東面
南面
西面
南西コーナー・南東コーナー

図版12



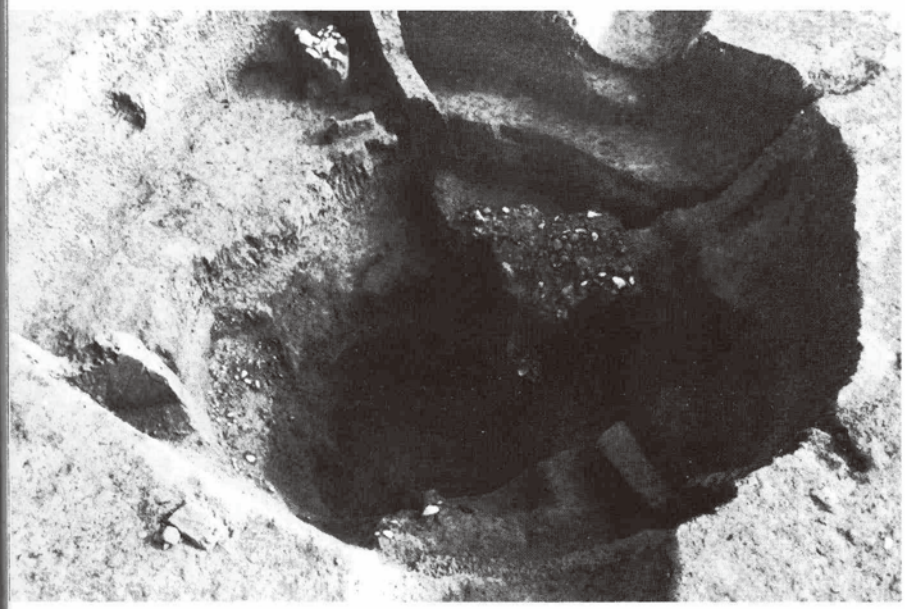
第１号井戸跡井桁
４・５段目検出状況

１・2.全景
3.西面
4.南面
5.東面
6.北面
7.北東コーナー
8.掘形最底部

図版13

第２号井戸跡
全　　景
（南 よ り）

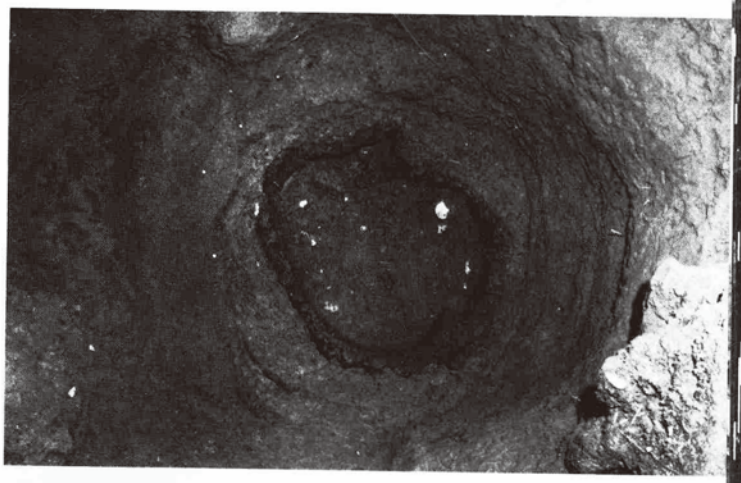
第２号井戸跡
青灰色粘土
検 出 状 況
（西 よ り）



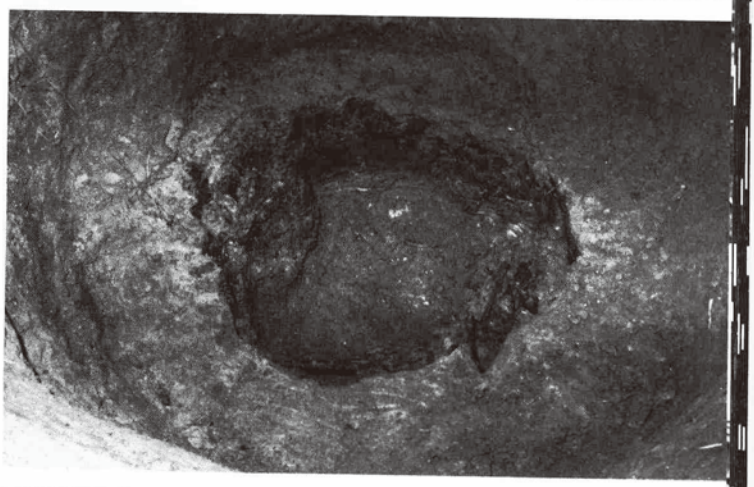
第２号井戸跡
同　　上
（西 よ り）

第２号井戸跡
井筒内遺物出土状況

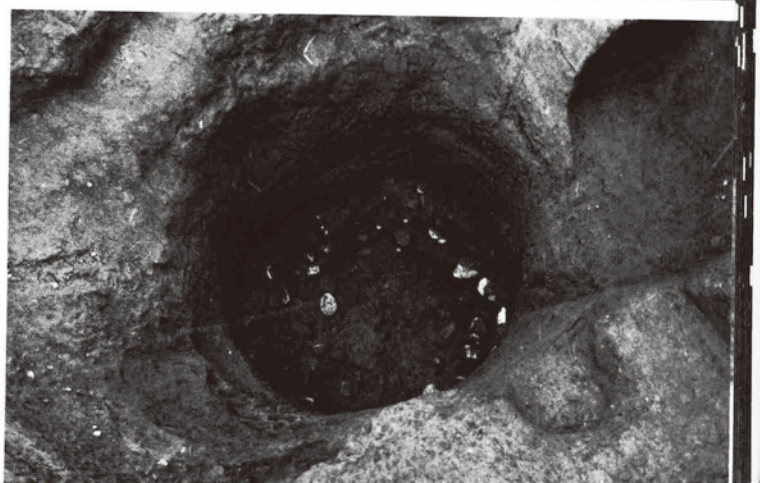
第２号井戸跡
井　　筒



第２号井戸跡
同　　上



第２号井戸跡
掘形最底部



図版15

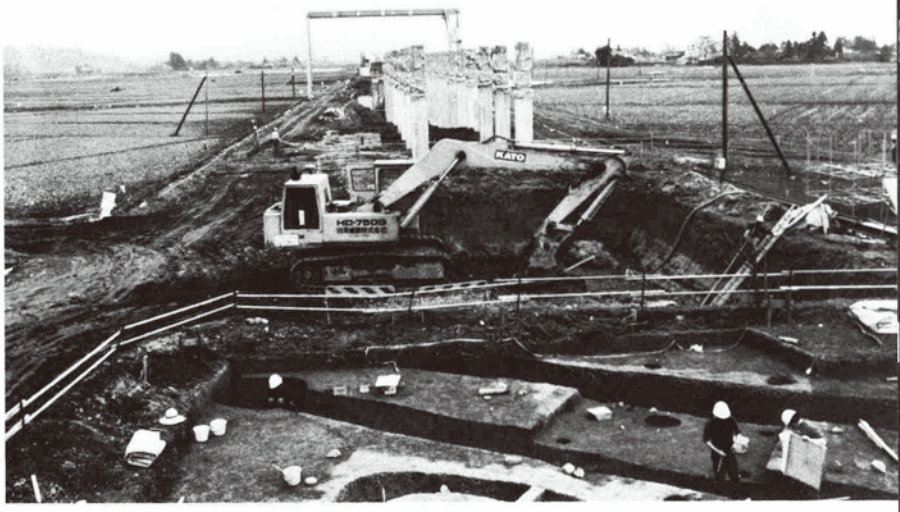
第２号井戸跡
全　　景
（北 よ り）

第１号井戸跡
第２号井戸跡
（南西より）

同　　上
（西 よ り）

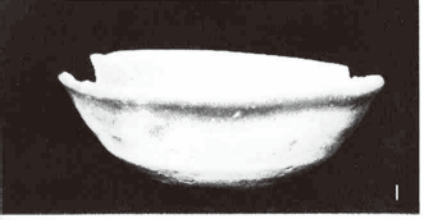
G区作業風景

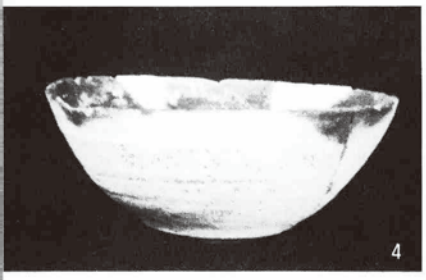
調査区南端

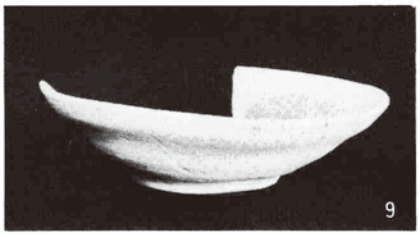


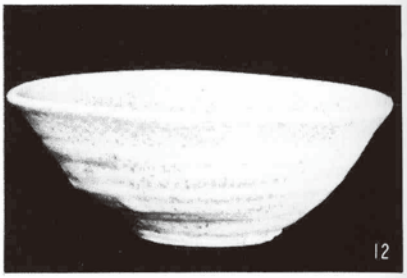
現地説明会

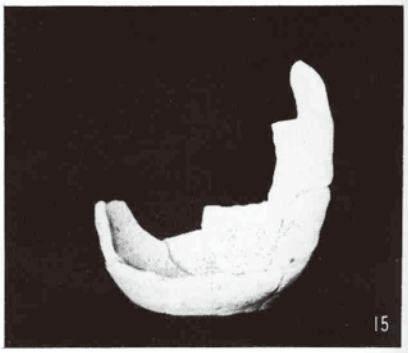
図版17

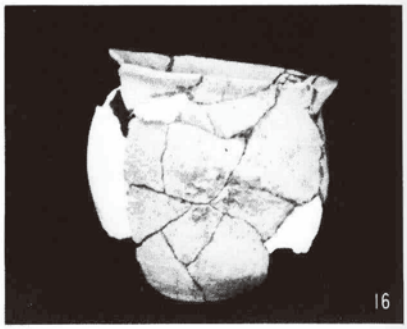










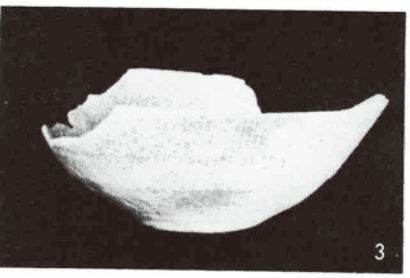


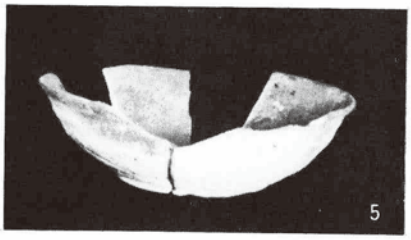
第１号住居跡

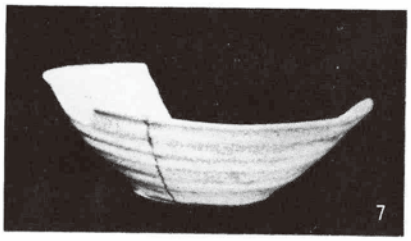
1.第８図―４
2.第８図―５
3.第８図―６
4.第８図―10
5.第８図―11
6.第９図―８
7.第９図―９
8.第９図―10
9.第９図―11
10.第９図―17
11.第９図―１
12.第９図―18
13.上第10図―７　中第10図―６　下第11図―３
14.右(1)　第10図―４
(2)　第10図―５
左(1)　第10図―１
(2)　第11図―４
下第10図―３
15.第10―９
16.第10―８

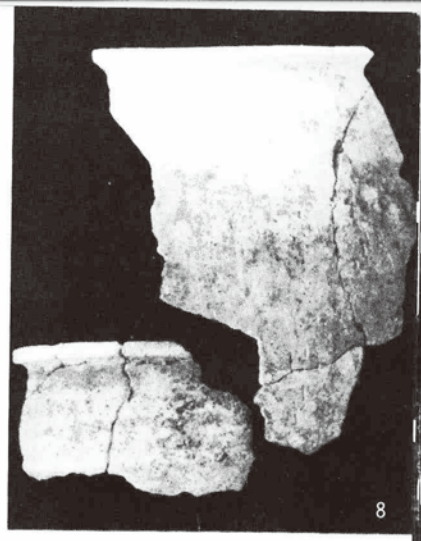
図版18

縮尺：坏類約1/3
甕類約1/4









第５号住居跡

1.第20図―２
2.第20図―４
3.第20図―７
4.第21図―２
5.第21図―３
6.第21図―４
7.第20図―１
8.右第20図―12
　左第21図―８
9.第20図―13

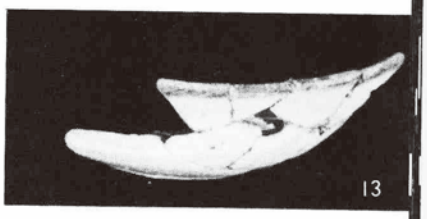
第３号住居跡

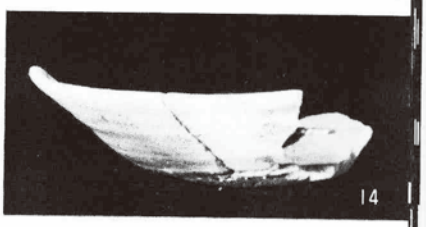
10.第15図―４
11.第15図―５
12.上・右、中・
　左第15図―７
　下　第15図―８

第２号住居跡

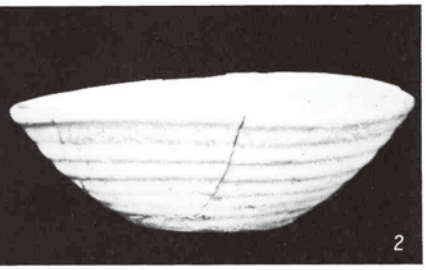
13.第13図―５
14.第14図―８
15.上・右、下第13
　図―10
　左第13図―９

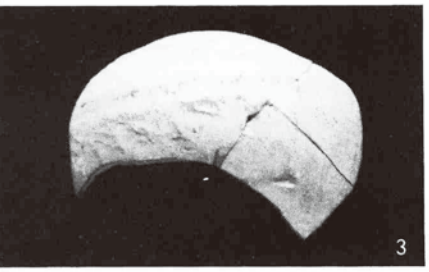
縮尺：坏類約1/3
　　甕類約1/4

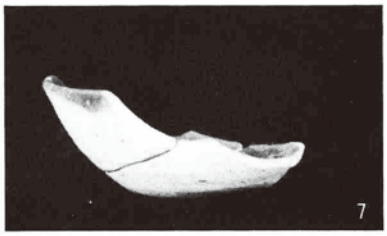


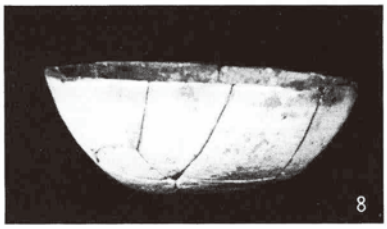


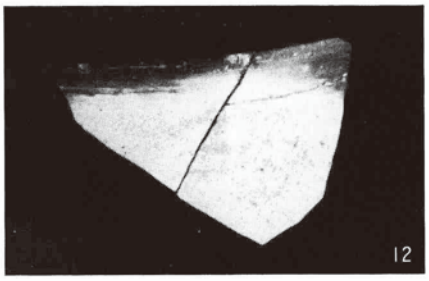
図版19

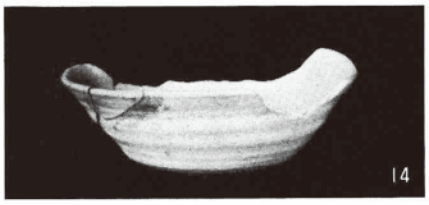












第４号住居跡

1. 第17図―３
2. 第17図―５
3. 第17図―10
4. 第18図―１
5. 第17図―11

第６号住居跡

6. 第23図―１
7. 第23図―２
8. 第23図―３
9. 第23図―５
10. 上・右第23図―８
　左
　中　第23図―６
　下　第23図―７

第８号住居跡

11. 第28図―６
12. 第28図―７
13. 第28図―３
14. 第28図―４
15. 第28図―５

縮尺：坏類約1/3
甕類約1/4

図版20

第７号住居跡

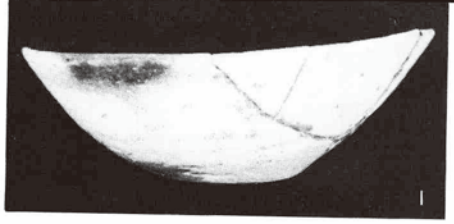
1.第25図―５
2.第25図―８
3.第26図―１
4.第26図―３
5.第26図―４
6.第26図―６
7.第26図―５
8.第26図―７
9.右(1)第25図―13
(2)第25図―11
左(1)第25図―９
(2)第25図―10
(3)第25図―12
下　第25図―14

第10号住居跡

10.第34図―７
11.第34図―８
12.第34図―２
13.第34図―６
14.第34図―３
15.第35図―10
16.第34図―12

縮尺：坏類約1/3
甕類約1/4

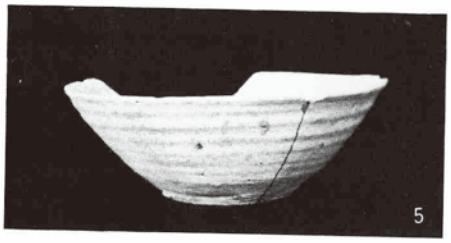
図版21

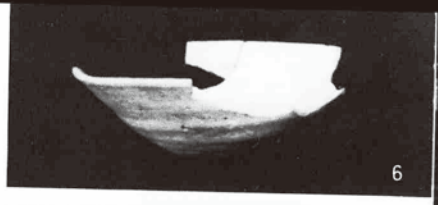

1

2

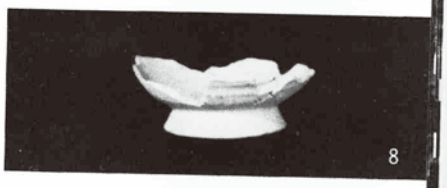
3

4

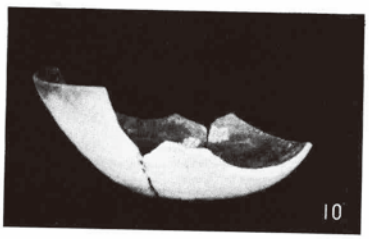

5


6

7

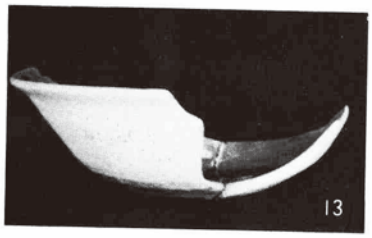

8

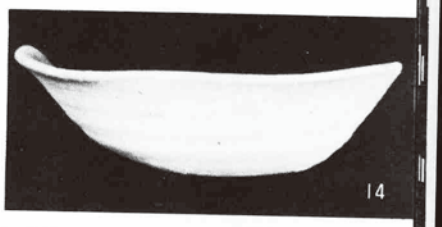
9


10

11

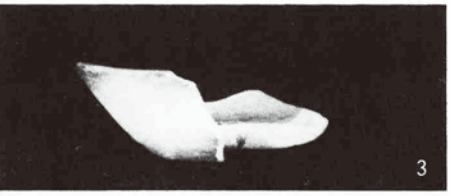
12

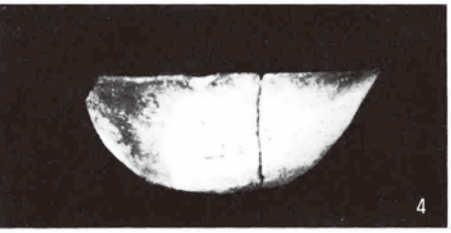

13

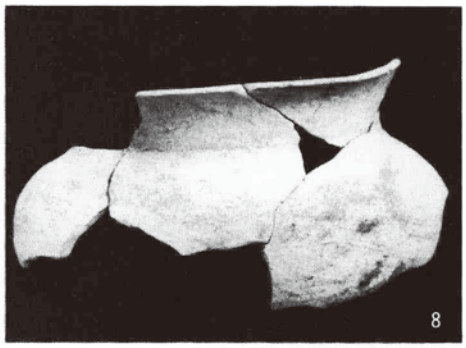

14

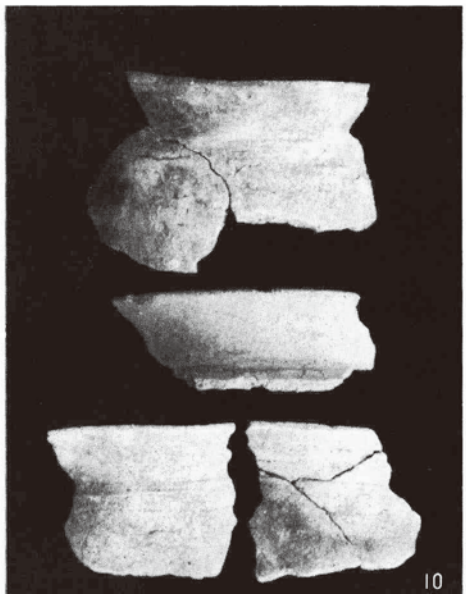
15

16









第９号住居跡

1.第30図―１
2.第30図―２
3.第30図―３
4.第30図―４
5.第30図―５
6.第30図―６
7.第31図―11
8.第31図―９
9.第31図―８
10.上
　中　第30図―９
　下・右
　下　左第30図―８

第10号住居跡

11.右(1)第34図―11
　(2)第35図―９
　(3)
　(4)第35図―１
　左(1)
　(2)第35図―３
　(3)第35図―２

縮尺：坏類約1/3
　　甕類約1/4

図版22

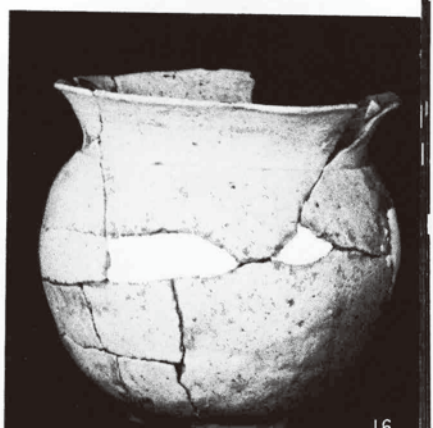
13.上第39図—1
　下第39図—3
14.第39図—9
15.第39図—7
16.第39図—10

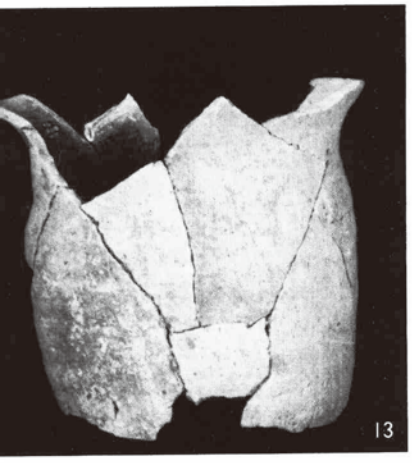
第11号住居跡

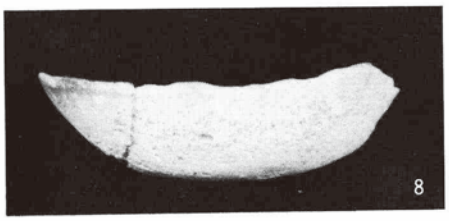
1.第38図—20
2.第38図—22
3.第38図—23
4.第38図—24
5.第38図—16
6.第38図—19
7.第38図—14
8.第38図—7
9.第38図—9
10.第38図—1
11.第38図—3
12.第38図—4

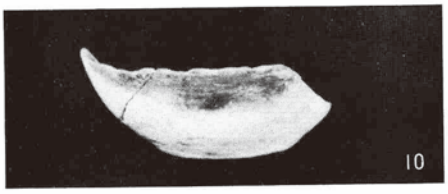
縮尺：坏類約1/3
　　甕類約1/4

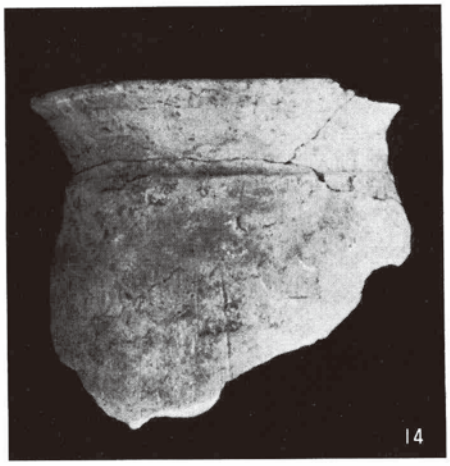
図版23











第12号住居跡

1.第42図— 3
2.第42図— 4
3.第42図—17
4.第42図— 8
5.第42図—13
6.第42図— 9
7.第42図—14
8.第42図—15
9.第42図—20
10.第42図—11
11.第42図—16
12.第42図—21
13.第43図— 2
14.第43図— 1

縮尺：坏類約1/4
甕類約1/4

図版24

第12号住居跡

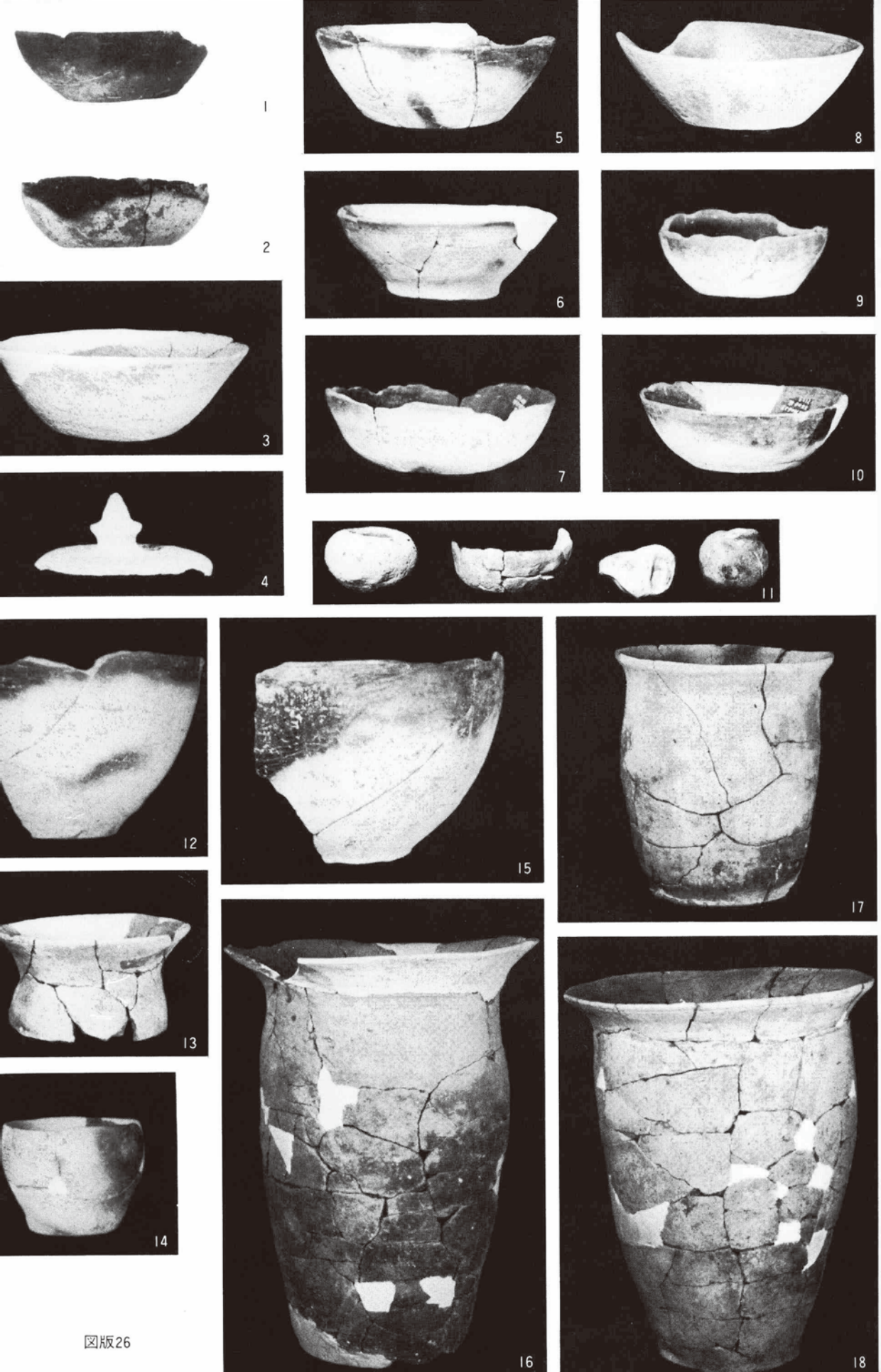
1.第43図— 3
2.右(1)
(2)第44図— 3
(3)第44図— 7
左(1)第43図— 4
(2)第44図— 6
(3)
3.第44図— 5
4.第44図— 2
5.第44図— 1
6.上第43図— 6
下第43図— 5

第13号住居跡

7.第50図—10
8.第49図— 8

縮尺：坏類約1/3
甕類約1/4

図版25



図版26

第13号住居跡（図版26）

1.第48図—7
2.第48図—14
3.第48図—23
4.第48図—24
5.第48図—6
6.第48図—1
7.第48図—13
8.第48図—3
9.第48図—15
10.第48図—5
11.左より(1)第52図—10
(2)第52図—11
(3)第52図—9
(4)第52図—8
12.第51図—5
13.第49図—5
14.第51図—2
15.第51図—4
16.第49図—3
17.第50図—9
18.第50図—1

第16号住居跡

1.第60図—4
2.第60図—8
3.右(1)第60図—10
(2)第60図—7
左(1)第60図—9
(2)第60図—3

第14号住居跡

4.第55図—6
5.第55図—7
6.上第55図—9
中第55図—8
下

第21号住居跡

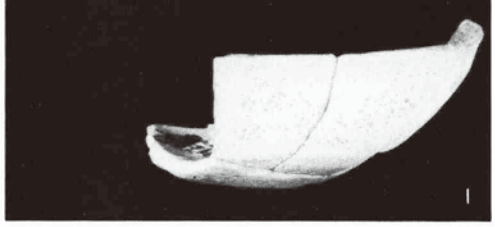
7.第75図—1
8.第75図—3
9.上第75図—4
下右
左第75図—5

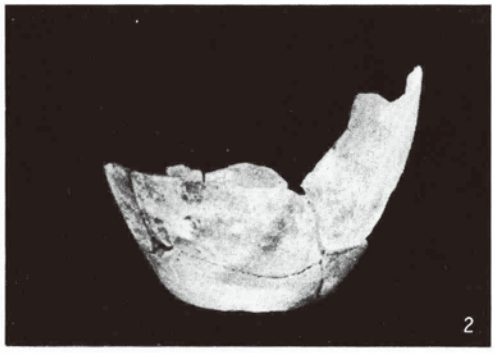
第19号住居跡

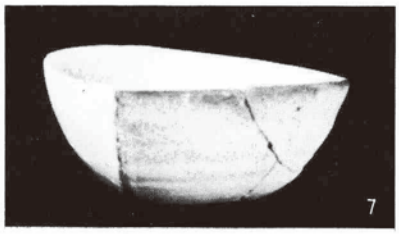
10.第70図—1
11.第70図—4
12.第70図—2
13.右　第70図—7
左左上第70図—5
下第70図—6

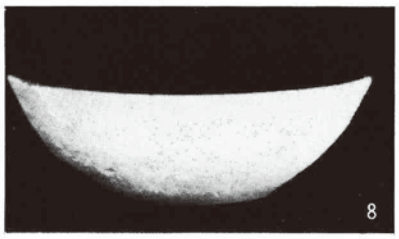
縮尺：坏類約1/3
甕類約1/4

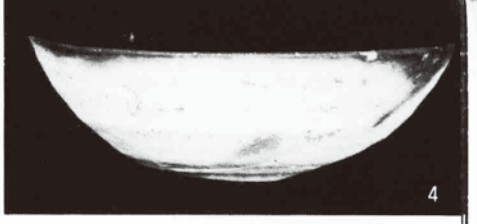
図版27

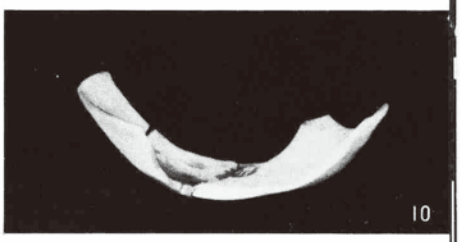


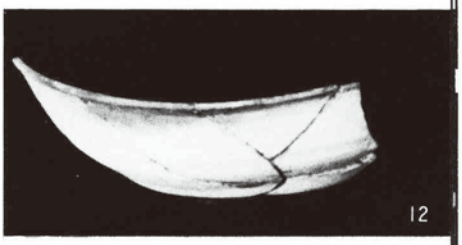


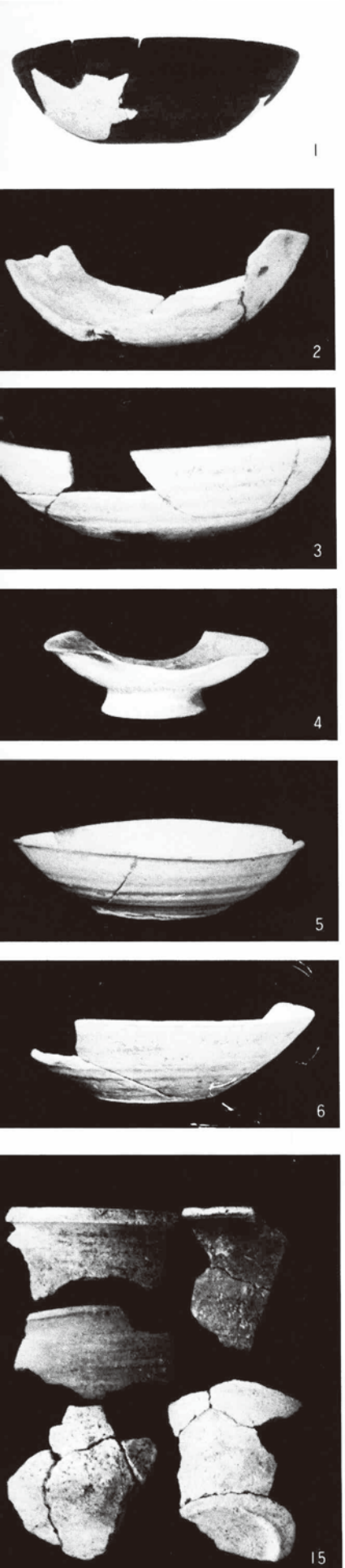


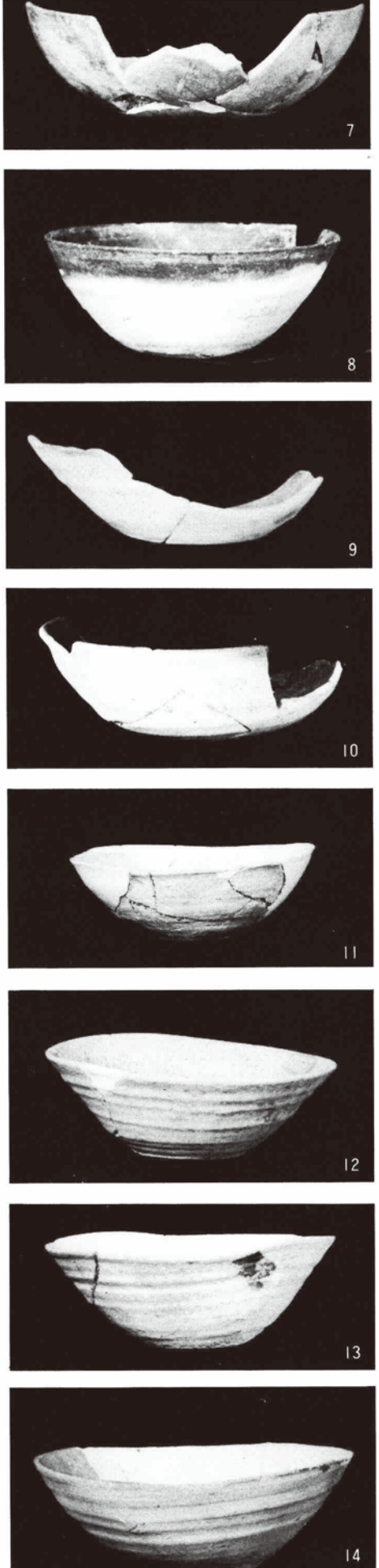










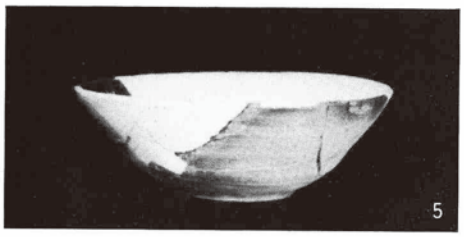


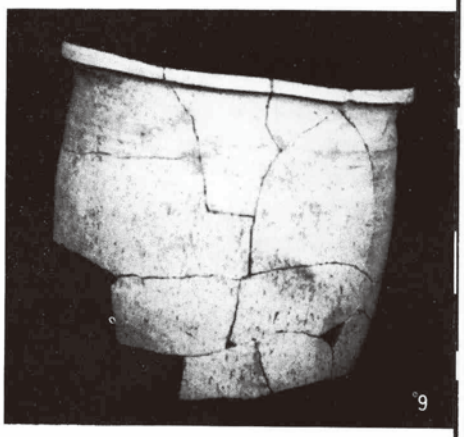
第18号住居跡

1.第64図—2
2.第64図—14
3.第64図—16
4.第65図—4
5.第66図—2
6.第66図—3
7.第64図—1
8.第64図—4
9.第64図—5
10.第64図—18
11.第66図—10
12.第66図—11
13.第66図—7
14.第66図—8
15.右上第67図—1
下第67図—8
左上第67図—2
中第67図—6
下第67図—7

縮尺：坏類約1/3
甕類約1/4

図版28





第17号住居跡

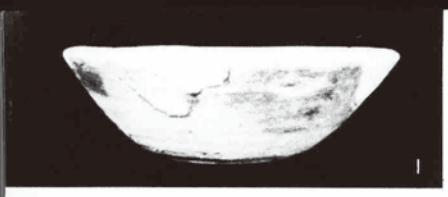
1.第62図—1
2.第62図—4
3.第62図—5

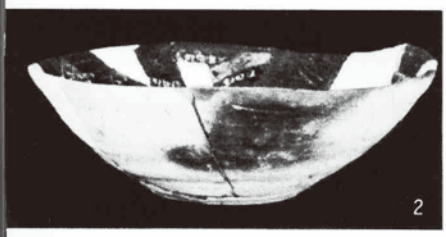
第20号住居跡

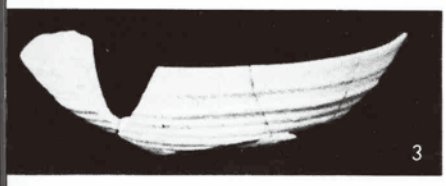
4.第72図—1
5.第72図—6
6.第72図—9
7.第72図—12
8.第73図—3
9.第72図—2
10.上第73図—6
右(1)第73図—4
(2)
左(1)第73図—1
(2)第73図—3
11.上　第73図—2
右(1)第72図—4
(2)
左(1)第73図—7
(2)第73図—5

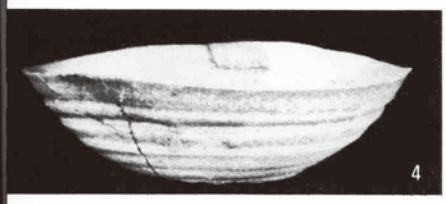
縮尺：坏類約1/3
甕類約1/4

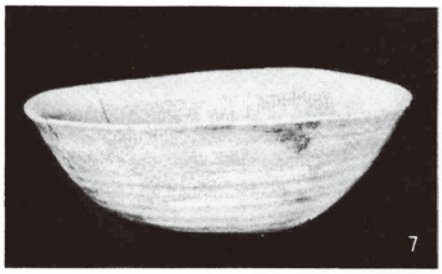
図版29

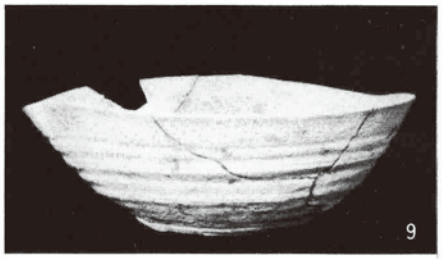


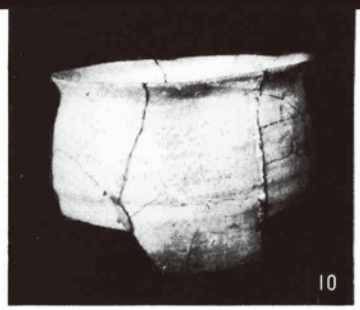


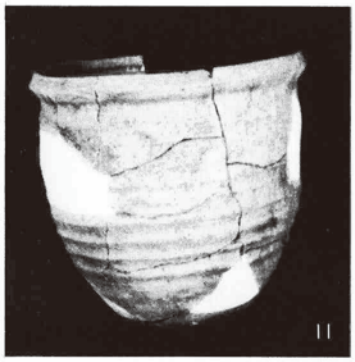


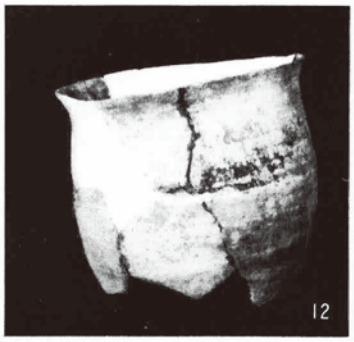


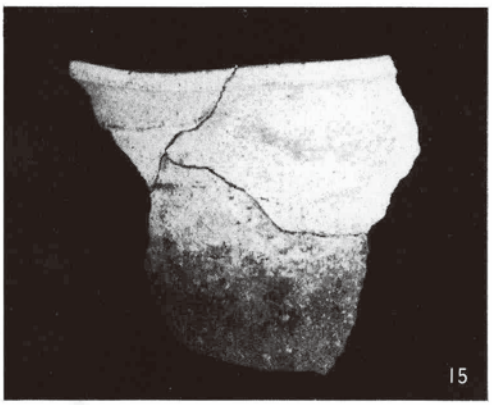












第22号住居跡

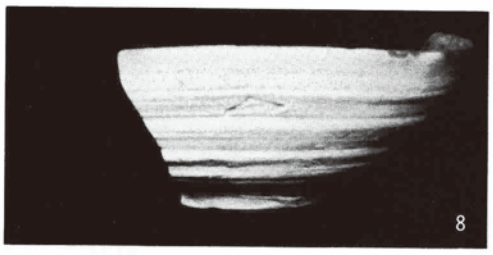
1.第77図—7
2.第77図—10
3.第78図—11
4.第79図—6
5.第78図—13
6.第77図—8
7.第78図—10
8.第78図—12
9.第79図—4
10.第79図—2
11.第79図—3
12.第79図—1
13.第77図—1
14.第78図—4
15.第77図—3
16.第77図—2

縮尺：坏類約1/3
甕類約1/4

図版30

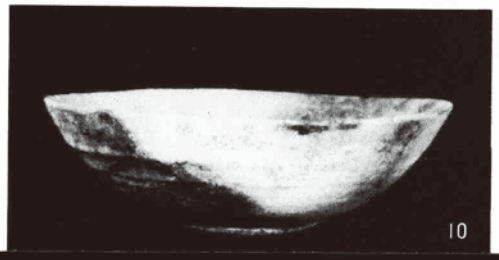
第23号住居跡

1.第81図—1
2.第81図—2
3.第81図—3
4.第81図—4
5.第81図—5
6.第81図—7
7.上第82図—2
右 } 第82図—1
左



第15号住居跡

8.第57図—6
9.第57図—7
10.第58図—5
11.第58図—7
12.右第57図—2
左 } 第58図—2
下

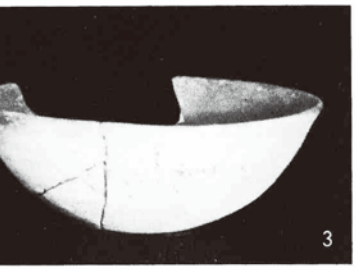


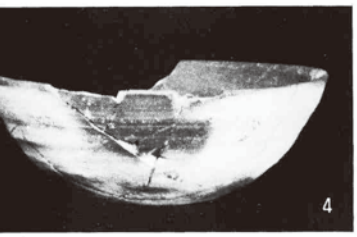
縮尺：坏類約1/3
甕類約1/4

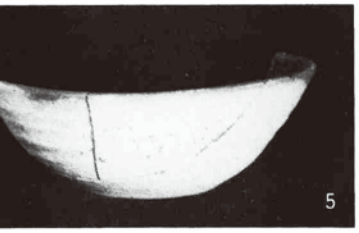
図版31

1

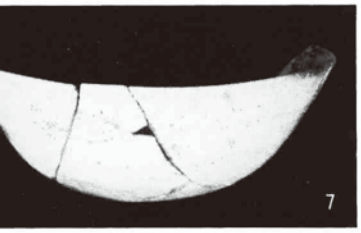
2

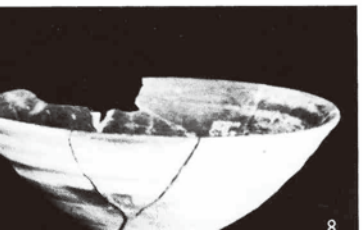

3


4


5

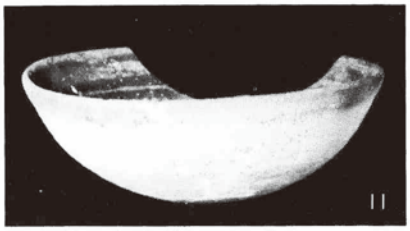
6

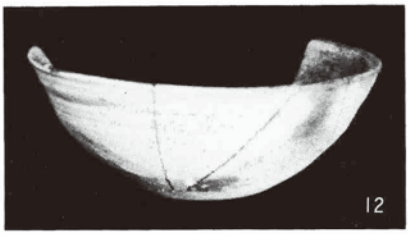

7

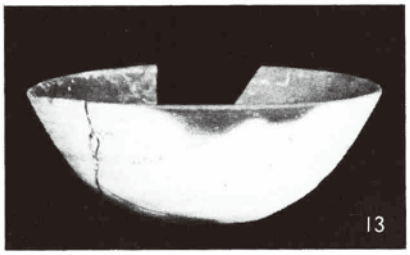

8

9

10


11

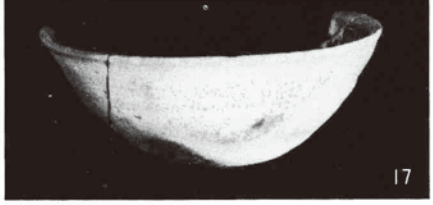

12

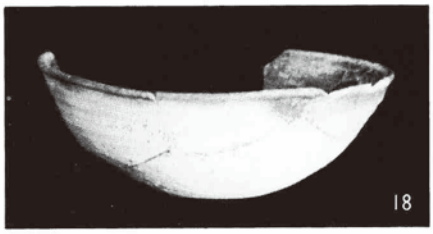

13

14

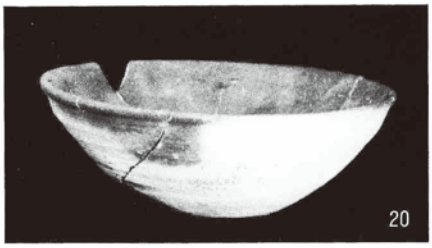
15

16


17

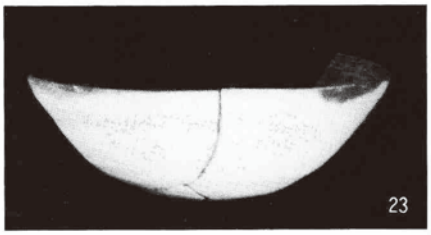

18

19


20

21

22


23

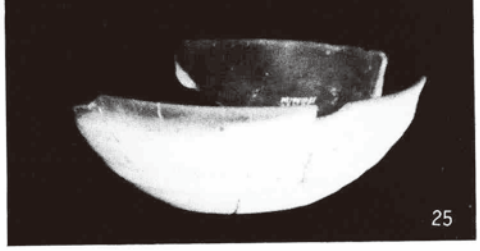
24

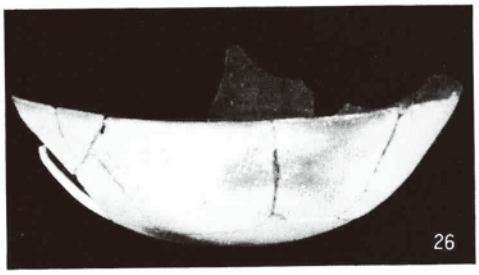
第２号井戸跡

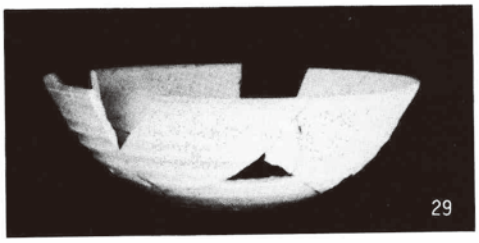
1.第98図―１
2.第98図―４
3.第98図―10
4.第98図―12
5.第98図―14
6.第98図―16
7.第98図―18
8.第99図―８
9.第98図―３
10.第98図―５
11.第98図―９
12.第98図―13
13.第98図―15
14.第98図―19
15.第98図―17
16.第99図―15
17.第99図―３
18.第99図―５
19.第99図―７
20.第99図―17
21.第100図―２
22.第100図―４
23.第99図―18
24.第99図―２
25.第100図―13
26.第100図―10
27.第101図―４
28.第101図―６
29.第101図―12
30.第101図―14
31.第100図―１
32.第100図―８
33.第101図―３
34.第101図―５
35.第101図―13
36.第101図―15
37.第101図―17
38.第101図―19
39.第100図―９

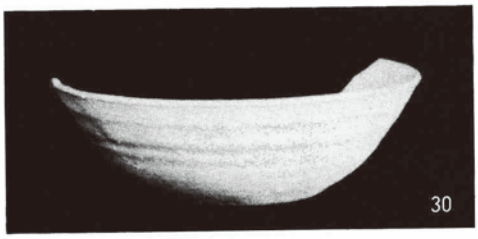
縮尺：坏類約1/3

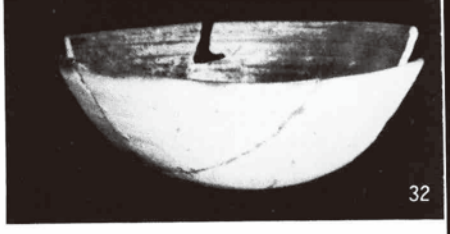
図版33

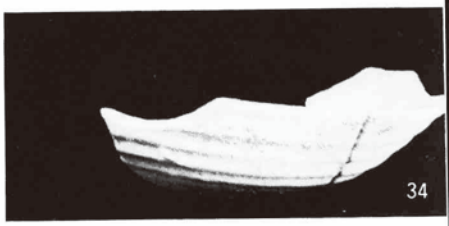


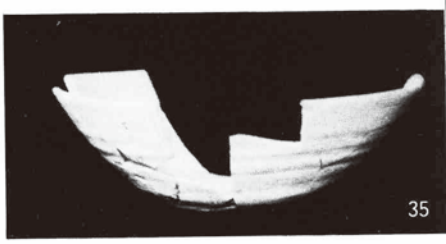


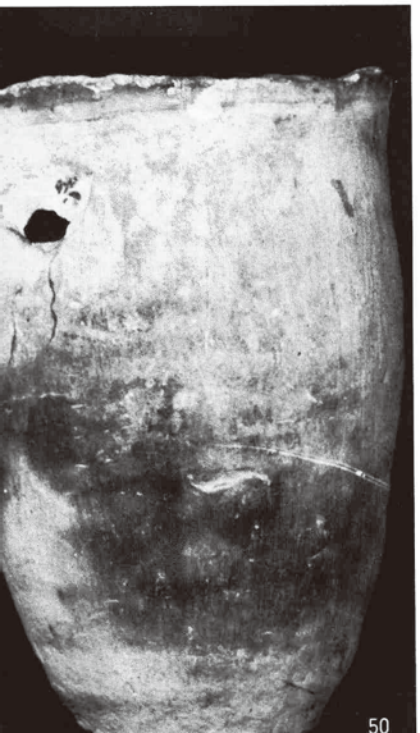


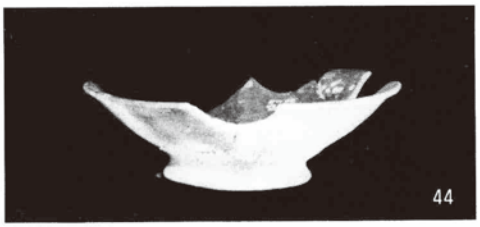


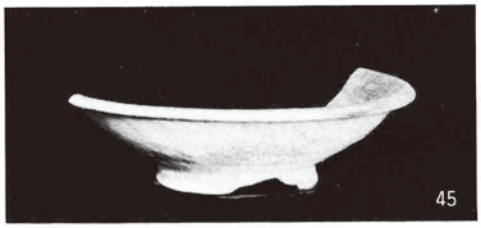


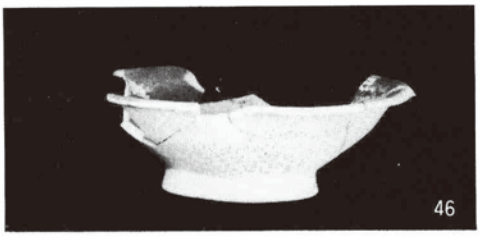












第２号井戸

40.第102図—17
41.第102図— 4
42.第102図—12
43.第102図— 3
44.第102図— 5
45.第102図— 7
46.第102図— 9
47.第102図—13
48.第102図—14
49.上第103図— 5
　中第103図— 4
　下第103図— 1
50.第103図— 2

遺構に伴わない
出　土　遺　物

51.ＢＨ03グリッド
　第114図— 1

縮尺：坏類約1/3
　　甕類約1/4

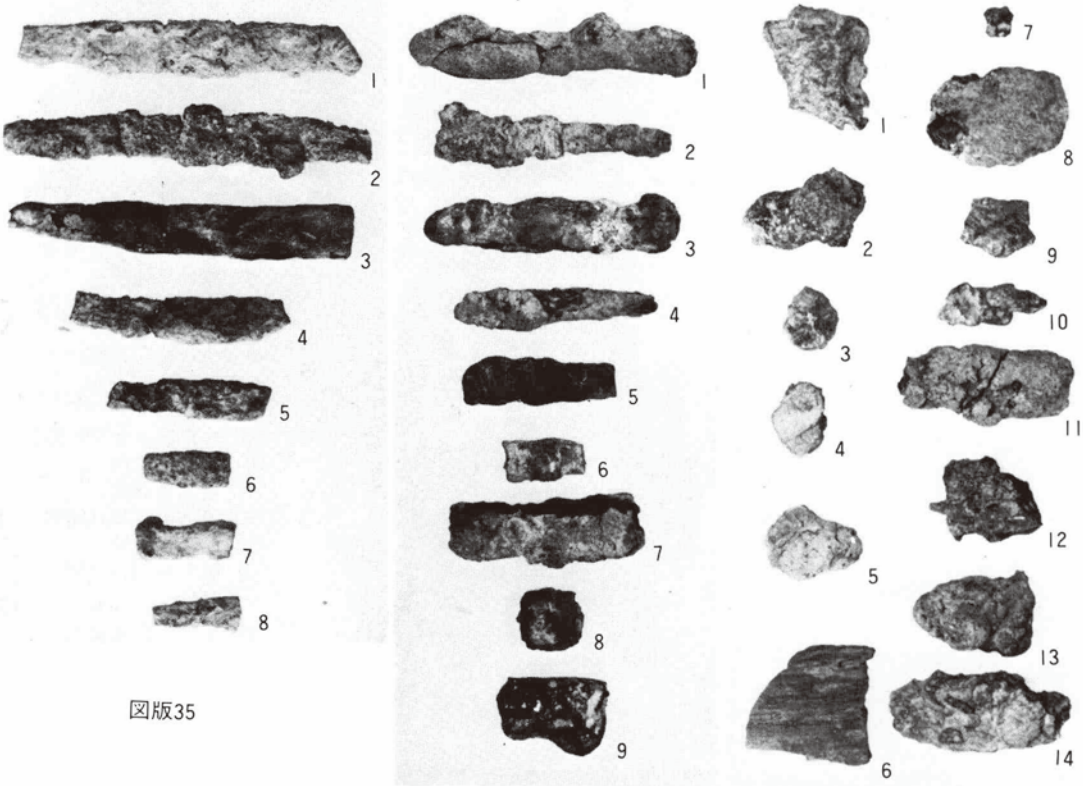
図版34

上（刀子）
1. 第５号住居跡
2. 第23号住居跡
3. 第15号住居跡
4. 第９号住居跡
5. 第18号住居跡
6. No.3 ピット

下・左（刀子）
1. 第12号住居跡
2. 第13号住居跡
3. 第11号住居跡
4. 第９号　溝跡
5. 第10号住居跡
6. 第15号住居跡
7. 第９号住居跡
8. 不　明

下・中（刀子）
1. 第１号井戸跡
2. 第９号住居跡
3. 不　明
4. 不　明
5. 第２方形溝状遺跡
6. 第18号住居跡
7. 第８号住居跡
8. 第２号溝跡
9. 不　明

下・右（鉄片）
1. 第１号溝跡
2. 第１号溝跡
3. 第５号溝跡
4. ＥＨ53グリッド
5. ＣＧ03グリッド
6. 第18号住居跡
7. 第２号住居跡
8. 第15号住居跡
9. 第２号井戸跡
10. 第２号井戸跡
11. 第１号住居跡
12. 第１号住居跡
13. 第11号住居跡
14. ＣＧ03グリッド



図版35

図版36

上

1. 第13号住居跡
2. 第17号　〃
3. 第11号　〃
4. 第18号　〃
5. 第18号　〃
6. 第18号　〃（金銅製）
7. 第１号溝跡
8. 第18号住居跡
9. 第９号　〃
10. 不　　明
11. 第14号住居跡
12. 第７号　〃
13. 第20号　〃
14. 第18号　〃
15. 第２号井戸跡

中

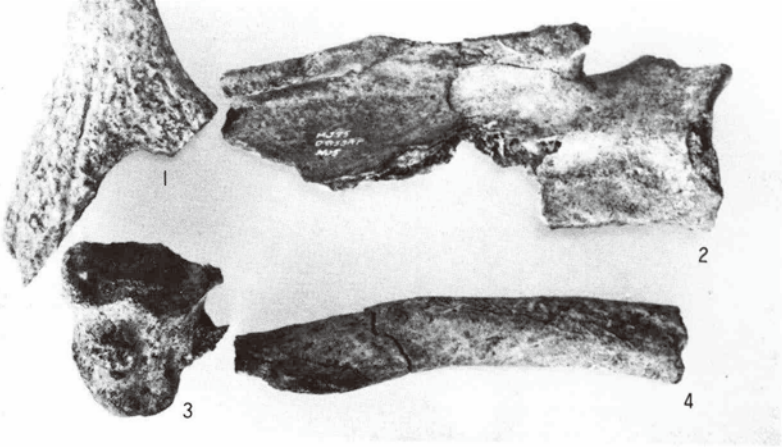
1. 第１号井戸跡
2. 第20号住居跡
3. 第20号　〃
4. 第18号　〃
5. 第18号　〃
6. 第18号　〃
7. 第11号　〃
8. 第１方形溝状遺構
9. 第13号住居跡
10. 第11号　〃
11. 第11号　〃
12. 第11号　〃
13. 第10号　〃
14. 第10号　〃
15. ＦＦ09グリッド
16. 第１号溝跡
17. 第６号溝跡
18. 第２方形溝状遺構
19. 第１号溝跡
20. 第１号溝跡

下

1. 第２号住居跡
2. 第９号溝跡
3. 第５号住居跡
4. 第18号　〃
5. 第18号　〃

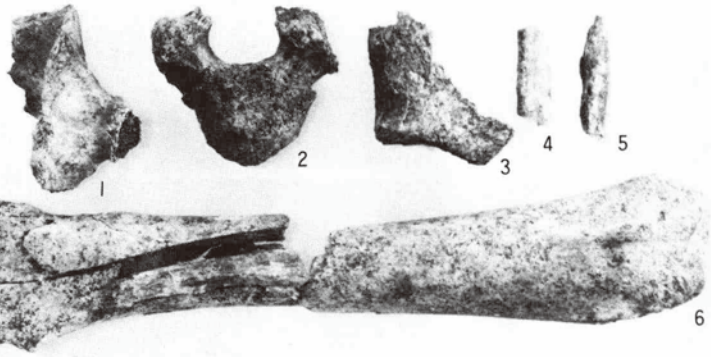
①角・牛骨

1.第2号井戸　鹿の角
2.　〃　牛肩甲骨中片
3.　〃　牛胸椎椎体
4.　〃　牛左肋骨近位端



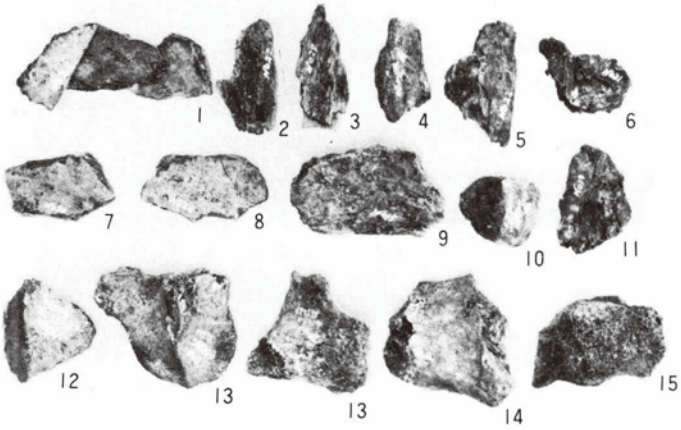
②馬　骨

1.第2号井戸　小型馬の頸椎関節突起
2.　〃　馬胸椎椎体前半分
3.　〃　小型馬肩甲骨遠位端
4.　〃　馬の肋骨
5.　〃　馬の肋骨
6.　〃　馬の右前腕近位端



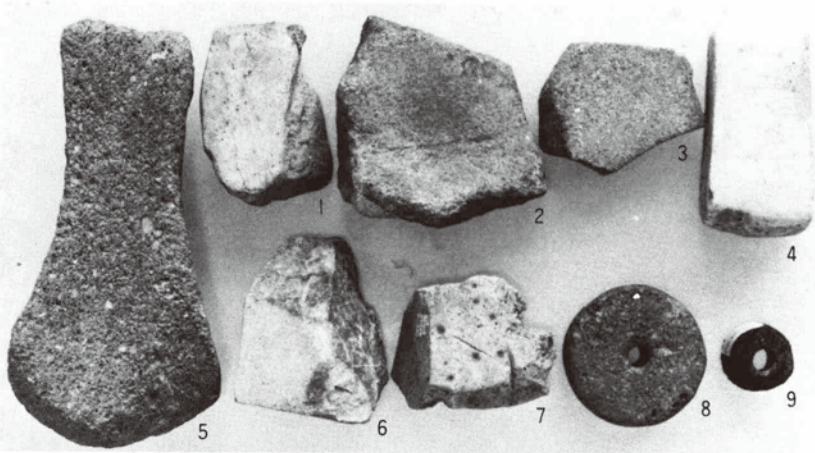
③獣　骨

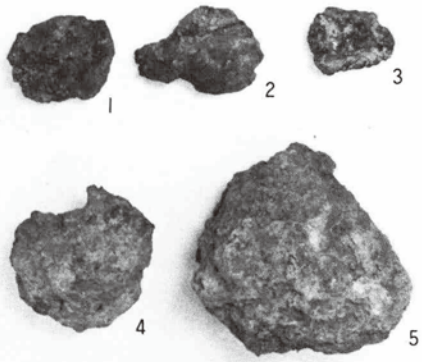
1.第2号井戸　大動物(牛?)肩甲骨の一部
2.　〃　〃
3.　〃　大動物骨片
4.　〃　大動物腸骨破片
5.　〃　大動物(牛?)肩甲骨の一部
6.　〃　大動物骨片
7.　〃　大動物(牛?)肩甲骨の一部
8.　〃　大動物(牛?)肩甲骨の一部
9.　〃　中型動物の腸骨
10.　〃　大動物の骨片
11.　〃　大動物の骨片
12.　〃　大動物頸椎関節突起
13.　〃　牛第3頸椎後関節突起
14.　〃　牛頸椎関節突起
15.　〃　牛後位頸椎破片
16.　〃　大動物腰椎椎体



④砥　石

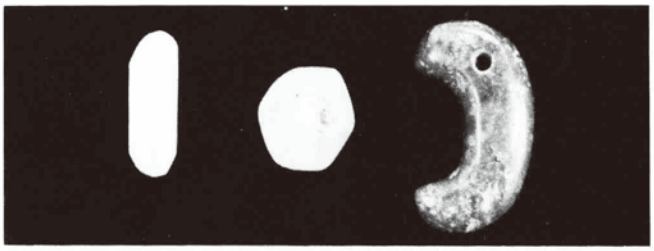
1.第12号住居跡
2.第8号住居跡
3.第9号住居跡
4.出土地不明
5.第13号住居跡
6.第4号住居跡
7.第11号住居跡
8.第17号住居跡
9.第13号住居跡





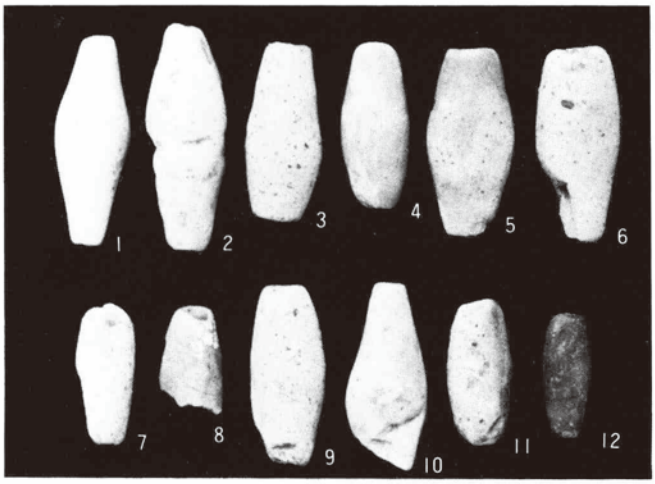
①鉄　滓

1.第15号住居跡
2.第16号住居跡
3.第２号溝跡
4.第10号住居跡
5.第５号住居跡



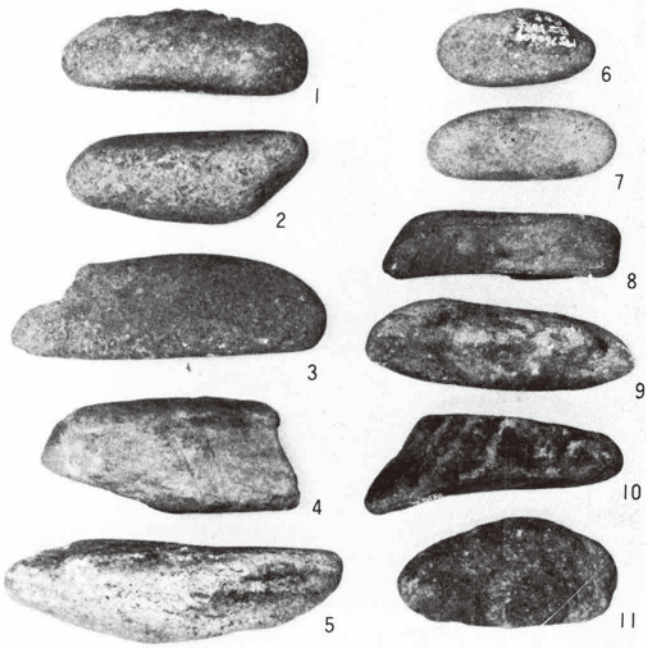
②特殊石製品

1.第16号住居跡　長　　石
2.第18号住居跡　水　　晶
3.第１号井戸跡　フリント



③土　錘

1.第18号住居跡
2.第23号住居跡
3.第１号井戸跡
4.第18号住居跡
5.第８号住居跡
6.第１号住居跡
7.第17号住居跡
8.第10号住居跡
9.No.７ピット
10.第１号溝跡
11.第５号溝跡
12.第１号溝跡



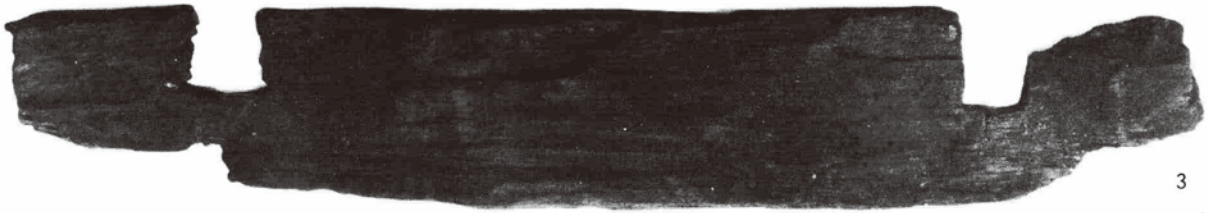
④足　方

1.第18号住居跡		Pit5	石英安山岩
2.第３号	〃	床面直上	石英安山岩
3.第10号	〃	床面直上	硬砂岩
4.第18号	〃	Pit5	チャート
5.第18号	〃	Pit5	凝灰質粘板岩
6.第18号	〃	Pit5	流紋岩質凝灰岩
7.第18号	〃	Pit5	流紋岩質凝灰岩
8.　不　明			凝灰質粘板岩
9.第18号住居跡		Pit5	凝灰質粘板岩
10.第３号住居跡		床面直上	凝灰岩
11.第10号住居跡		床面直上	凝灰岩

図版38

1.東—1
2.東—2
3.東—3
4.東—4
5.東—5
6.東—外側2
7.東—外側1
8.9.東—3の部分拡大
10.東—外側4
11.東—外側3

図版39 第1号井戸横板(1)　縮尺約1/8（拡大図は約1/4）



図版40
第1号井戸横板(2)

縮尺約1/8
（拡大図は約1/4）

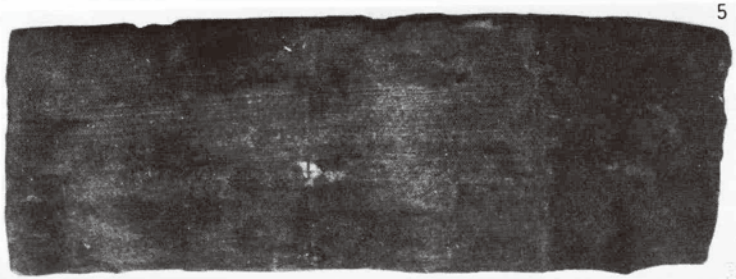
1.西—2
2.西—3
3.西—4
4.西—4の部分拡大
5.西—外側1
6.西—外側2
7.西—3の部分拡大
8.西—4の部分拡大
9.10.内側

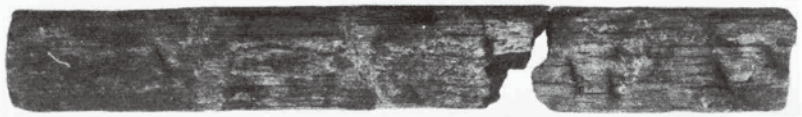
1.南—1　4.南—4　7.南—3の部分拡大
2.南—2　5.南—5
3.南—3　6.南—5

縮尺約1/4
（拡大図は約1/4）

図版41
第1号井戸横板(3)

1.北—1　　4.北—3　7.北—5
2.北—2　　5.北—4　8.北—3の
3.北—3の拡大　6.北—5　　部分拡大





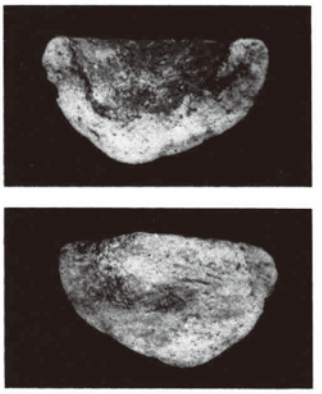
縮尺は約1/4（拡大図は約1/8）

図版42 第1ラッチ戸横板(4)

50

1 Pinus
2 Pinus
3 Toxodiaceae
4 Alnus
5 Moraceae
6 Castanea
7 Fagus
8 Chenopodiaceae
9 Chenopodiaceae
10 Chenopodiacece
11 Artemisia
12 Cichoriodeae
13 Gramineae
14 Monolete spore

ルツボ



内

外

1：3

No. 6 pit

1：3

図版43

発掘調査担当者および協力機関

・第一次調査（昭和50年９月１日～昭和51年２月21日）

嶋　千秋　　宍倉圭介　　佐々木勝　　（期限付臨時職員）　八木光則　　松本安司

松野恒夫　　佐藤典義

・第二次調査（昭和51年４月９日～７月26日）

嶋　千秋　　菅原弘太郎　　佐々木勝　　（期限付臨時職員）　八木光則　　松本安司

佐藤典義　　久保　実　　平野　茂　　古沢友治

・協力機関

江刺市教育委員会

発掘調査地元作業員名簿

・第一次調査

菊地四治右エ門　相原久之助　菊地　覚治　中村　庄蔵　菊地　文雄　中村　ハル

菊地トシヲ　菊地　ヒサ　菊地トキワ　茂庭フミエ　菊地　キヌ　菊地　サツ

千葉ハル子　佐藤トシ子　菊地トク子　菊地　克子　千葉　イヨ　菊地フミ子

佐藤ウメノ　菊地　シゲ　菅野ハツエ　菊地ハツヨ　菅野　タカ　佐々木優子

菊地　キヨ　有馬　昭子　石川　利子　及川ヒサヨ　中村マツミ　伊藤ハル子

菅野　フミ　千葉　イチ　高橋ミツ子　高橋　幸子　高橋　京子　菊地トヨミ

菅原　優子　菊地アヤメ　菊地　ミツ　菅野トモエ　吉田　里治

・第二次調査

菊池四治右エ門　相原久之助　中村　庄蔵　吉田　里治　菊地　覚治　菊地　文雄

菊地　ヒサ　佐藤トシ子　菊地　ミヨ　菊地トキワ　菊地ヨシエ　菊地　文子

菅野　タカ　佐藤ウメノ　菊地　シゲ　及川ヒサヨ　中村マツミ　菊地ハツヨ

菊地ツネヨ　菊地トシオ　高橋　幸子　石川　利子　菅野ハツミ　伊藤アサヲ

高橋　ヨシ　高橋カツ子　小田切サツ子　高橋ミツ子　佐藤　モヨ　菅原マサ子

千葉　イチ　高野トヨミ　佐藤　隼人　佐藤　賢治

整理作業員名簿（新幹線関係全遺跡）

・昭和49年度　吉田　陽子　竹内　昭子　千田　篤子　石川　　真　五日市淳子

阿部みゆき　鈴木由起子　工藤真理子　川村由美子　佐藤　敦子

・昭和50年度	竹内　昭子	五日市淳子	阿部みゆき	鈴木由起子	工藤真理子
	川村由美子	中村　幸江	大坊　敏純	野口　真理	佐藤　利宏
	石川　　真	大下　幸子	小野真理子	鈴木　優子	
・昭和51年度	小野真理子	大下　幸子	熊谷由美子	石川　　真	菊池真知子
	堀切　紀子	佐藤シゲ子	村田　泰子	青柳　直子	大坊　敏純
	佐藤　利宏	村山　博子	千葉恵美子	小野由美子	佐々木キヌ
	武藤　ヒサ	佐藤　リエ	鈴木キミヨ		
・昭和52年度	堀切　紀子	小野真理子	熊谷由美子	菊地真知子	村田　泰子
	斉藤　綾子	青井　伸子	石川　　真	浅利　孝子	伊東由美子
	小林　史子	中ノ目真弓	小野　道子	宮田　達哉	

岩手県教育委員会事務局文化課職員一覧
（埋蔵文化財関係）

文化課長	熊谷　正男
課長補佐（総務）	小野寺昭吾
課長補佐（調査）	小野寺　登
庶務係長	加藤　勝男
主　事	鈴木喜代治
主　事	佐藤伸一郎
主任文化財主査	嶋　　千秋
文化財主査	菊地　郁雄
技　師	国生　　尚

縦貫自動車道関係

文化財主査	吉田　　努
	三上　　昭
	斉藤　　淳
	島　　隆
	昆野　　靖
文化財調査員	相原　康二
	八重樫良宏
	狩野　敏男
	田村　荘一
主　　事	石川　長喜

新幹線関係

文化財主査	菅原弘太郎
	細谷　英男
	朴沢　正耕
文化財調査員	鈴木　隆英
技　師	佐々木　勝

（新幹線関係期限付臨時職員）

斉藤　　孝
鈴木　優子
村井　　隆（運転）
熊谷由美子
赤坂　恵子
藤原三代子
村上　良子
小林　史子
沢口　恵子
勝又　邦子
下村奈々子
伊東由美子
山崎久美子（６月末退職）

岩手県文化財調査報告書48集

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
（宮地遺跡）
昭和55年３月30日発行

発行　岩手県教育委員会
盛岡市内丸10－１　☎0196(51)3111

印刷　川口印刷工業株式会社
盛岡市本町通２丁目13－８　☎0196(23)3351